# DRAG-ON DRAGOON 3

## STORY SIDE

ドラッグ オン ドラグーン3
ストーリーサイド


映島 巡
Eishima Jun

監修
ヨコオタロウ
Yoko Taro




SQUARE ENIX.

# ドラッグ オン ドラグーン 3
ストーリーサイド

DRAG-ON DRAGOON3 STORY SIDE

映島 巡

Eishima Jun

監修 ヨコオタロウ

Yoko Taro

SQUARE ENIX

# DRAG-ON DRAGOON 3
## STORY SIDE

ドラッグ オン ドラグーン3
ストーリーサイド


映島 巡
Eishima Jun

監修
ヨコオタロウ
Yoko Taro



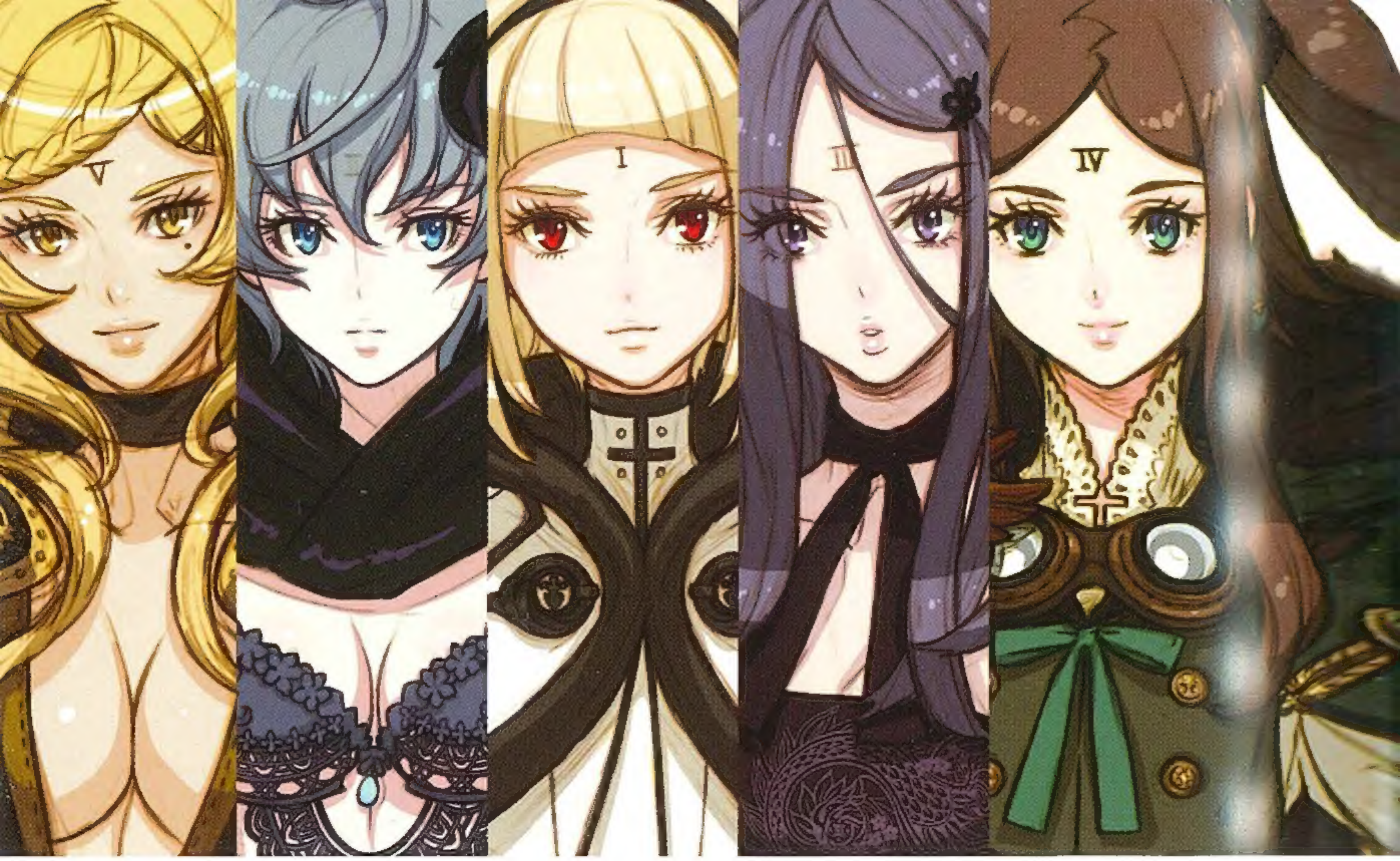

SQUARE ENIX.

# ドラッグ オン ドラグーン 3
ストーリーサイド
DRAG-ON DRAGOON3 STORY SIDE

映島 巡
Eishima Jun

監修
ヨコオタロウ
Yoko Taro

SQUARE ENIX



# DRAG-ON DRAGOON 3
## STORY SIDE

ドラッグ オン ドラグーン3
ストーリーサイド

映島 巡 Eishima Jun　監修 ヨコオタロウ Yoko Taro



# DRAG-ON DRAGOON 3
# STORY SIDE

ドラッグ オン ドラグーン3
ストーリーサイド

映島 巡
Eishima Jun

監修 ヨコオタロウ
Yoko Taro

カバー・口絵・章扉イラスト：藤坂公彦
カバー・口絵・章扉デザイン、本文組版：大西宏昭

DRAG-ON DRAGOON3 STORY SIDE

# CONTENTS






## 教会都市

次女ワンが治めている。
かつて高度な文明によって建てられた建造物が廃墟となって墓標のように並んでいる。この世界で最も権威ある「教会」の本拠地が存在する。



## 砂の国

三女トウが治める国。
砂漠地帯が広がる、立っているだけでも体力を消耗するほど過酷な気候の国。かつては文明が発達していたという伝承もあり、地下に遺跡が広がっている。



## 海の国

六女ファイブが治める国。
広大な海に囲まれた国。主人公ゼロは、この国のとある場所に1年間身を隠していた。物語はここから始まる。豊富な数を誇る艦隊と、水没したかつての文明都市の名残とが混在する国。

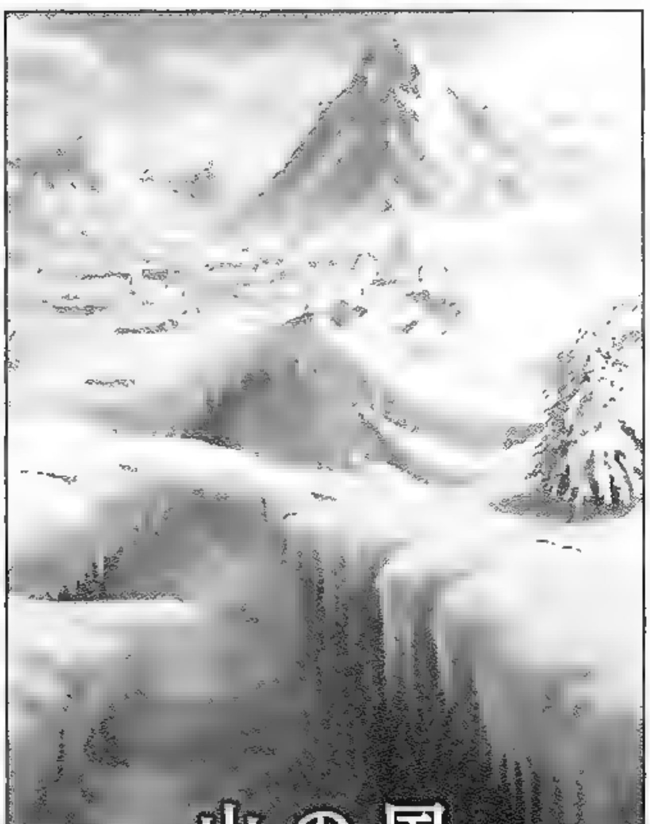
# World Map



森の国

四女スリイが治める国。
豊かな自然に恵まれた森深き国。妖精やエルフなど、人間以外の種族も数多く暮らしている地帯。木々が立ち並ぶ美しい森、外来者を拒むかのような深い霧が立ち込める場所など、行く先々によって様々に表情を変える。



山の国

五女フォウが治める国。
峻険な山々が連なる地帯。その山頂に難攻不落の要塞が待ちかまえている。極寒の雪山、その断崖絶壁に挟まれた渓谷、人が暮らすには厳しい景色が広がっている。

# Character Introduction
# DRAG ON DRAGOON3



## ゼロ

男はすべて迎え入れる。
難しいことは
ヤッてから考える

物語の主人公。ウタウタイと呼ばれる特殊能力者姉妹の長女。倫理観は人外レベル、加えて性に開放的な上に、極度の面倒くさがり屋。



そしたら、ゼロ、
褒めてくれる？

## ミハイル

1年前ゼロを守り瀕死の重傷を負ったパートナー、ミカエルが転生したドラゴン。ミカエルの頃の記憶はなく、精神年齢は子供に戻っているため、頻繁にゼロを苛つかせる。



連中がきみを何て
呼ぶつもりか、知っているかい？

## ワン(弟)

姉であるワンの対となる存在。この世界の行く末という大きな流れを変えたある出来事を起こしてしまうきっかけを作った人物。



妹達の魂に誓って、
私は貴様を許さない！

## ワン

ウタウタイの次女。姉妹の中では最も理知的で冷静な判断能力を持っている。自分が何故生まれてきたのか？　この世界の理とは？　様々な知識を得るために書物を好んで繙く、姉のゼロとは全く正反対の探求心旺盛な性格。



やりませんけどねぇぇ。
今はぁぁ

## セント

使徒の一人。いつもは残念な美青年だが、トウを心から愛しているがゆえの行動をとる。

それから……。
セントは死んじゃ、ダメ

## トウ

ウタウタイの三女。屈託のない明るい少女。使徒であるセントとは心から愛し合い、信用し合っている関係。自分の秘密を知った彼女は思わぬ選択をするが……。

## オクタ

飄々とした老人に見える使徒だが、実は20代。精力絶倫が自慢で、使徒の中一番アレが長くて大きい。常識人な一面もかいま見せる。




## スリイ

ウタウタイの四女。人形遊びが大好きな不思議ちゃん。偏執的で妄執的な性格で、いつも気怠げな……ハズなのだが。




## ファイブ




ウタウタイの末妹。旺盛な所有欲と性欲の持ち主だが、飽きっぽい。6人の姉妹の中で振る舞いも一番下品。その欲望はとどまるところを知らず、生への執着を最後まで持ち続ける。

## デカート




鍛えられた肉体で戦うタイプのフォウの使徒。一見常識的、紳士的な性格だが、己への逆境や試練を悦びに変えてしまう極端なマゾヒスト。本人はそれを隠しているつもりだが周囲にはばればれ。

## フォウ




ウタウタイの五女。性格は優等生的で冷静。理知的に振る舞い、日頃は人の話もよく聞くが、逆上すると子供のような口調になる。姉妹の中で唯一の処女。

## アコール

武器屋を営む正体不明の女性。ゼロの前に時折姿を現し、謎めいた言葉を残していく。




## ディト




爽やかで麗しいルックスだが、残忍な性格を隠しもせずに振るまう。相手の弱みを聡く見極め、徹底的に弄り倒す底なしの意地悪さを持っている。

きみも昔、聞いたことがあるだろう？

今は誰も口にしようとしない「ウタヒメ」という言葉を。覚えていない？　ああ、そうか。あの頃、きみはまだ物心付くか付かないか。そんな年齢だったんだね。だったら、これも知らないかな。

『遠い昔。戦で荒れ果てていた時代。五人の女神がこの地に降り立った。女神達はウタを歌う事でこの世界に平和をもたらし、我々はそれを〝ウタヒメ〟と呼び、信仰の対象として崇めた……』

言うほど遠い昔じゃない。この言い伝えなんて、ウタヒメの権威を高めて、統治を正当化するために作られたんだから。いや、言い伝えられるまでもなく、その治世は終わってしまったけれど。

何しろ、五人のウタヒメが世界を統治した時代は、振り返れば束の間のものだった。民を虐げる領主達を倒して、ウタヒメ達が四カ国の統治に乗り出したのは。その間、二年。いや、違うな。数えてみれば、わずか一年半……。

領主はいなくなったけれども、民の暮らしは少しも楽にならなかった。今では国王だの

貴族だのが民を虐げている。相争い、憎み合い、奪い合い、殺し合う。ヒトの世界は悲しいほどに変わらない。

変わらないのに、過去はどんどん遠くなる。人々はウタヒメ達のことなんて思い出そうともしない。世界に平和と秩序をもたらそうとした五人のことも、その五人の命を狙った裏切りのウタウタイのことも。

彼女達六人は、血を分けた姉妹だった。

海の国を統治した末の妹、六女ファイブ。山の国の統治者は、五女のフォウ。森の国を統治したのは四女スリイで、砂の国は三女トウ。教会都市を本拠地と定め、四人の妹達を統治国に送り込んだのは、次女のワン。彼女は教会の宗主だった。

そして、裏切り者の長女ゼロ。白い翼の竜で数多の戦場を駆け巡り、執拗(しつよう)に妹達の命を狙った、血塗(ちまみ)れのウタヒメ。

ゼロはなぜ妹達の命を狙ったのかって？　なぜ、ウタヒメの統治時代は一年という短さで終わったのかって？　今、ウタヒメはどこにいて、何をしているのかって？

そうだね。今となっては、本当のことを知っているのは僕くらいのものかもしれない。あれから十七年しか経(た)っていないのに、誰も何も語らなかったから。語れる者もいなかったから。

彼女達の話をしてくれって？　そんなことを言い出したのは、きみが初めてだ。それも

そうか。僕自身、「ウタヒメ」という言葉をもう何年も口にしていなかったんだ。いや、姉さんが死んで以来、一度も、か。ウタヒメのことを話して、なんて言われるはずもなかったな。

姉さん？　ああ、姉さんのことだけは、きみに話していたよね。そうだよ、僕の姉さん、ワン姉さんこそが、ウタヒメの次女ワンだったんだ。

ゼロは僕の姉さんじゃないのかって？　さっき、六人は血を分けた姉妹だって言ったのにって？

混乱させる言い方をしてしまったな。ごめん。少しばかり込み入った話なんだよ。それに、長い話なんだ。

きみの気を紛らわせるのには、いいかもしれないね。いつ終わるとも知れない苦しみと、絶え間ない痛みから、ほんの少しでも気を逸らすことができれば。

それじゃあ、始めようか。長い長い昔話を。王子様とお姫様が末永く幸せに暮らすような、そんなおとぎ話じゃないけれど。

昔々、あるところに、六人の姉妹がおりました……。

DRAG-ON DRAGOON3
STORY SIDE

# 壱

## 【妹の章】



## 〈1〉

海の色を美しいと感じたことなど、ただの一度たりとも、ない。
古(いにしえ)の詩人がいかに言葉を尽くして褒(ほ)め称(たた)えようと、塩辛い水の色など有り難がる気にはなれなかった。ただ、常々(つねづね)、奇妙だとは思っていた。水に色などありはしないのに、海には確かに色がある。
ありもしないのに、ある。あるはずなのに、ない。まるで詭弁(きべん)だ。そんなものに驚嘆したり、感心したりする連中の気が知れなかった。
だからというわけでもないが、あの女を斬(き)った後、海に蹴り落とした。あの女が立っていたのは、海を見下ろす崖の上だった。そう、ちょうどこんな場所だ。今、見下ろしているのとよく似た岩場と白く泡だった波、その真(ま)っ直中(ただなか)へ吸い込まれるようにして女は落ちていった。苦痛に顔を歪(ゆが)めるでもなく、かといって驚いたり戸惑ったりするでもなく、ごく当たり前の表情のまま。
詭弁を具現化したような海は、あの女には似合いの墓場だろう。思わせぶりな言い方で、巫山戯(ふざけ)た言葉ばかりを吐き散らした、あの女。
アコール、という名前さえ、今となっては真の名なのかわからない。
誰であろうと他人を信用するつもりはないが、とりわけあの手の女は質(たち)が悪い。口にす

る言葉のすべてが虚言であればまだしも、幾許かの真実が混ざっていたりするのだ。百のうち一でも真実が混ざっていれば、残り九十九の嘘ももっともらしく見えてしまう。
だから、相手にする気など端からなかった。早々にお引き取り願おうとした。なのに、女はしつこくつきまとってきた。それで消えてもらった。鬱陶しい女は嫌いだ。いや、どんな女も好きではないけれども。
『ゼロさん』
淡々とした声が耳に蘇った。
『貴女は〝花〟に寄生されたんです』
赤の他人に言われるまでもなく、わかっていた。理解していたわけではないが、自分の身体である。寄生。そう、寄生だ。感覚がそれを教えてくれた。生前とは明らかに異なった、感覚。
自分は確かに死んでいるはずなのに、死の闇に捕らえられた記憶はまざまざと残っているのに、こうして考え、動き回っている。何かに動かされている。それがわからないほど鈍感ではないし、己と他者との区別がつかないほど暗愚でもなかった。
ただ、〝花〟と言われて納得したのも事実だった。なるほど〝花〟か。生身の人間として見た最後のモノ。視界いっぱいに広がった薄紅色の花を確かに覚えている。あのときか、と思った。

『その〝花〟は貴女の身体を養分として育ち、やがてはこの世界――』

ゼロ、ゼロ、という舌っ足らずな声がした。鼻持ちならないあの女の声を押しのけるかのように、強い風が吹きつけてくる。

「ゼロ！　ねえ、ゼロってば！」

ばさりばさりという羽ばたきの音と共に、横合いからの獣臭い風が髪を乱した。神の遣いとも呼ばれるドラゴンがこれほどの悪臭を放つとは、身近に暮らしてみるまで知らなかった。

いや、竜種全般が悪臭を放つわけではないことは知っている。他のドラゴンは決してそんなことはなかった、とゼロは思い返す。ミハイルだけだ。人間の幼子が涎だの吐いた乳だのの臭いをまとわりつかせているようなものなのだろう。何しろ、ミハイルはまだ一年しか生きていない。

数千年以上という途方もない寿命を持つ竜種だが、成長は人間よりもずっと速い。人間の赤子ならばまだ伝い歩くのがやっとという月数で、この幼いドラゴンは空を飛び、炎を吐く。語彙は少ないながらも、会話も成立する。生き物が成熟するまでの期間というのは、その寿命に比例すると思っていたが、竜種は例外らしい。

「あのね、あのね、あっちにね、お船がいっぱいいいたんだよ！」

顔にかかる髪が鬱陶しい。おまけに、右目の花に絡みついて不愉快なことこの上ない。

目から花が生えているなど、それでなくても気持ちの良いものではないというのに。
力任せに髪を掻き上げる。が、獣臭い風が一際強く吹きつけたかと思うと、髪が指の間から逃げて広がった。
「それからね、兵隊さんがたくさんいたよ！　たくさんいたよ！」
髪がばさばさと頬を叩く。覚えず声が尖った。
「二回言わなくていい」
踵を返して歩き出す。陽光に輝く白い翼をゆったりと羽ばたかせながら、ミハイルが傍らをついてくる。海沿いの狭い道では、決して着地しないようにと辛抱強く教えた甲斐あって、最近ではミハイルもいきなり道を突き崩すようなへまはしなくなった。
何しろ、幼くともドラゴンは巨体である。ゼロの背丈ほどの高さから着地しただけでも、足許が揺れ、砂塵が舞い上がる。人馬がやっと往来できる程度の道などひとたまりもない。
「ゼロ」
「なんだ？」
遠慮と思しき短い沈黙の後、ミハイルが言葉を継いだ。
「ほんとに妹の人達を殺すの？」
ああ、と剣を抜きながら答える。行く手に武装した兵士達が迫っている。海の国の兵士達だった。

「一人残らず、な」
己の為すべき事くらい、わかっていた。訳知り顔の誰かに教えられるまでもなく。
「ボク、やっぱり良くないと思うな。妹なんでしょ？　妹って家族なんでしょ？　人間には家族って大事なモノだって……」
「大事じゃない」
　ミハイルの言葉を遮って走り出す。ミハイルは幼い。彼の世界はまだ、正論と一般論で編まれた揺りかごの中だけだ。そこから見える光景には、我が子を売り飛ばす母親や殺し合う姉妹などいない。おそらく。
「さて、と」
　ゼロは余計な考えを振り払い、眼前に迫る敵に意識を集中させることにした。これもまた、為すべき事である。
「まずは肩慣らし、だな」
　第一陣は長剣を手にした兵士達だった。盾持ちはいない。たいした攻撃力もなく無防備な連中、つまりは雑魚、ということだ。
　何の工夫も技も要らない。真っ正面に向かって、ただ剣を振っているだけでいい。傷が癒えたばかりの身体には、ちょうど良い相手だった。
　戦慣れしていないと一目でわかる兵士が剣を振り上げて向かってくる。声こそ勇ましい

が、残念ながら隙だらけだ。ゼロの剣はただの一度も遮られることなく、その喉元に突き刺さった。続けて、横合いから突っ込んできた兵士を斬り払う。
　剣を振る速度が些か落ちている。四肢にも無駄に力が入っているのがわかる。
　義手のせいか、と思い至った。一年前の戦いで左腕を失った。生身の腕と義手とでは重さが違う。無意識のうちにその差を補正しようと、動きが不自然になっているのだろう。
「まあいい」
　この程度なら、すぐに慣れる。たぶん、あと幾人か殺せば。
　奇声とも怒声ともつかない声で向かってくる一人を海に蹴り落とし、もう一人の首を斬り飛ばす。死角を突くように伸びてくる剣を左腕で叩き返す。金属と金属がぶつかり合う甲高い音の後、弾き飛ばされた剣がくるくると回りながら宙を舞った。
「義手には義手の強みがある。使ってやるさ」
　第一陣を片付けると、第二陣が目前に迫っていた。剣兵に加えて、槍兵の姿が見える。さらに続く第三陣には盾持ちもいる。
　海に視線を走らせれば、砲台を備えた艦が数隻、いや、十数隻か。
「たいした歓迎だな」
　おい、と背後に声をかける。
「なあに？　ゼロ」

「キミは空から」
白波を立てて迫る艦隊へ剣先を向ける。
「あの戦艦を沈めなさい」
「えー」
「ほら。さっさと行く！」
もう少し渋るかと思いきや、ミハイルは素直に「わかった」と答えて翼を翻した。おとなしく低空を飛ぶのに飽きていたのかもしれない。白い翼がみるみる遠ざかり、風が変わった。獣臭さが消えたのも束の間、今度は磯臭い風が吹いてくる。正真正銘の海風だった。その海風に乗って、兵士達が口々に叫ぶ声が聞こえてくる。ゼロが来たぞ、裏切り者を殺せ、と。
「裏切り者、ね。一年前と変わらないなあ。ちょっと語彙が貧困すぎるんじゃないの？」
苦い笑みと共に浮かび上がってくる光景がある。
『皆が貴様を裏切り者呼ばわりしているぞ』
『ありがたいね！』
『我のことはバケモノ扱いだ』
そう嘆息して白い翼を翻し、群がる敵を蹴散らした、あの姿。ほんの数日前のようでもあり、何年も昔のようでもあり。「一年」という確たる数字の曖昧さに戸惑いを覚えた。

あの日、教会都市で五人の妹達と戦い、敗れた。せっかく一カ所に集まってくれたのだから、望みどおり一網打尽にしてやると思った。思ったのだが、返り討ちにされた。それどころか、己の左腕と相棒を失った。

読みが甘かったと言われれば反論できない。そもそも戦局を読むとか、作戦を立てるとか、その類は苦手だった。性に合わないのだ。そんな七面倒くさいことをするくらいなら、さっさと剣に物を言わせたほうがいい。

あれから一年。傷は思いのほか深く、曲がりなりにも剣を取れるようになるまでは長かった。その分、考える時間もたっぷりあった。姑息な手が嫌いなのは相変わらずだが、同じ轍は踏まない。

敗因は何もかも一度で終わらせようとしたことだ。ならば、次からは一人ずつ。確実に、仕留める。それが五人分。その程度の手間はかけて然るべきだろう。

最初の一人は、末の妹に決めた。末妹のファイブは、ここ海の国を統治している。ゼロが一年近く潜伏生活を送った国だ。教会都市とは海を隔てただけの至近にあり、隠れ家として好ましい立地とは言えなかったが、深手を負った身での移動は思うに任せない。見つかったらそのときはそのときと割り切ることにして、海の国に留まった。

幸い、ファイブは熱心な追跡者ではなかった。ゼロも初めの頃こそ先手を打って隠れ家を変えたものの、次第に面倒になって、発見されたら逃走するというやり方に変えた。そ

れで十分だった。
　おそらく、白い竜を見たという知らせが入ったときだけ、ファイブは追っ手を差し向けていたのだろう。知らせがなければ、放置した。ファイブは贅沢三昧（ぜいたくざんまい）の日々を楽しむのに忙しい。好きでもないことに割（さ）く時間などない、ということだ。
　海の国は、かつて女領主によって治められていた。彼女もまたファイブと同じく、金遣いが荒かったと聞く。租税と賦役で民を縛り搾取し、当然のように憎まれ恨まれた。ファイブが今、統治者として行っていることはその女領主とさしたる違いはない。しかし。
「道を塞（ふさ）げ！」
　兵士達の怒号とともに地響きが聞こえてくる。どうやら道に岩を落として封鎖しようとしているらしい。ゼロは小さく舌打ちをした。厄介（やっかい）なことをしてくれる。
「ファイブ様をお守りしろ！」
「これ以上、神殿に近づけさせるなっ！」
　蛇蝎（だかつ）の如く嫌悪されていた女領主と違って、ファイブは民に慕われている。兵士達もファイブのために命懸けで戦っている。統治者として優れているからではない。ファイブがウタウタイだから、だ。
　ウタウタイ。それは、ウタノチカラを使いこなす者。この世界には今、六人のウタウタイがいる。ゼロと五人の妹達である。人々はウタウタイ達を敬意と畏怖の念を込めて、ウ

タヒメと呼ぶ。
少し前まで、世界は領主と貴族達のものだった。今、世界は五人のウタヒメによって統治されている。海の国は末妹のファイブが、山の国は四番目の妹フォウが、森の国は三番目の妹スリイが、砂の国は二番目の妹トウが。そして、彼女達の本拠地となった教会都市にはすぐ下の妹ワンがいる。強大な組織である「教会」の宗主として。
彼女達を「妹」と呼んで良いものか、実は今も若干の迷いと戸惑いが残っている。父か母、どちらかの親を同じくする者を「きょうだい」と呼び、自分よりも後に生まれた「女のきょうだい」を「妹」と呼ぶ。その定義に則れば、彼女達を「妹」と呼ぶのは些か語弊がある。
彼女達はもともと「ゼロの中にあったモノ」だった。ただし、腹を痛めて産んだわけではないから、「娘」ではない。古い神話に、分裂して増える怪物が出てきたが、それに近いのではないかと思う。
もちろん、生身の人間だった頃の出来事ではない。〝花〟に寄生された後である。己の身体に巣くっている〝花〟が悪しきモノであることは、あのアコールという女に教えられる前からわかっていた。何しろ、死体を生前と同じように動かしているのである。
しかも、それは体内で日々生長し、邪悪とわかるチカラを増していった。ついには左胸を突き破ってそれが現れたとき、ゼロは〝花〟を駆除しようと決めた。その辺に生えてい

る植物と同じように、引き抜いて枯らしてしまおうと思った。その程度では枯れなくても、取り出して切り刻めば、駆除できるかもしれない。或いは、〝花〟もろとも命を絶てばいい。

すでに死んでいる身で「命を絶つ」ことができるのかどうか、甚だ疑問ではあったが、これ以上、手を拱いているわけにはいかない。竜種ならば〝花〟を破壊できるらしいが、探しに行くのも面倒だった。何より、竜種がどこに棲息しているのか、知らなかった。ならば、自分の手で何とかするしかない。わずかでも可能性があるなら、やってみる価値はある。

そう決意して、ゼロは左胸から生えている〝花〟に剣を突き立てた。己の心臓ごと串刺しにした。生身の人間なら、間違いなく致命傷となる一突きだった。薙ぎ倒されそうな激痛が走った。それでも、ゼロは剣を手放さず、強引に〝花〟を引きずり出そうとした。

体内に根を張っているのか、引っ張ってもびくともしない〝花〟を自らの肉ごと抉り取ろうと剣先を動かしたときだった。

不意に〝花〟が絶叫した。この世のモノとは思えぬおぞましい悲鳴だった。次の瞬間、唐突に痛みが引いた。握りしめていた剣が落ちて転がった。全身の筋肉が一度に弛緩し、ゼロはその場に倒れ伏した。倒れてみて、痛みが消えたわけではなく、触覚や痛覚がおかしくなったのだと気づいた。

しかし、なぜそんなことになったのか、すぐには理解できなかった。見れば、左胸から生えていた〝花〟が異様な大きさに膨れ上がっている。どうやら、チカラを根こそぎに吸い取られたせいで四肢が動かなくなったらしい。

まだ絶叫は続いていた。膨れ上がった〝花〟から血が噴き出した。その血と共に現れたモノを見て、ゼロは目を疑った。血飛沫の中から現れたのは少女、いや幼女達だった。年格好は三歳か四歳くらいだろうか。

彼女達は五人いた。それぞれ瞳の色も髪の色も異なっていた。どこかで見たような顔もあれば、全く見覚えのない顔もいた。

やがて、青い目に青い髪の幼女が不思議そうにゼロを覗き込んできた。

「ぜろ……ねえちゃ……」

まだよく回らない口で彼女はそう言った。それで、この子供達が自分を「姉」と認識していると知った。家族と誤解してくれているなら好都合だ、早く捕らえなければと思った。彼女達がまだ幼く、弱いうちに。世界に災いを為す〝花〟から生まれた子供達が善であるはずがない。

「ダメ！」

鋭い声で制止してきたのは、赤い瞳の幼女だった。彼女は憎悪を露わにした目でゼロを睨みつけ、「ウラギリモノ！」と叫んだ。その声に怯えたように、青い髪の幼女は後ず

さってゼロから離れた。
「待て……」
必死で手を伸ばそうとしたが、指一本動かせなかった。五人の幼女達は身を翻して逃げ出した。
植物が株分けをして増殖していくように、〝花〟もまた駆除される前に自らを分割したのだと気づいた。ゼロの思考や記憶を写し取り、チカラを根こそぎ奪って新たな「苗床」を造り、そこへ逃れた。その「苗床」こそがゼロを「姉」と呼んだ五人の幼女達だった。
やはり〝花〟は竜種でなければ破壊できないらしい。その手間を惜しんだために、駆除すべき〝花〟が増えてしまった。厄介な事になったと思ったが、元はといえば己の過ちである。まさに自分で蒔いた種なのだから、自分で刈り取るべきものだ。
そう悟ったときには、すでに五人の幼女達は行方をくらました後だった。
奪われたチカラは次第に回復し、やがてゼロは元どおりに動けるようになった。つまり、体内に残った〝花〟もまた勢いを取り戻したということである。まるで雑草のようなしぶとさだった。むしり取っても刈り取っても、いつの間にか蔓延る……。
そして、妹達に巣くった〝花〟も驚くべき速さで生長していた。逃げ去ったときには三歳児程度の外見だった妹達は、三月と経たずに少女と呼べる外見に成長し、教会都市で再会したときにはゼロとたいして変わらない姿になっていた。その間、わずか一年。

劇的な変貌を遂げたのは外見だけではない。〝花〟から与えられたウタノチカラも増大していた。信じられないことに、妹達はそのチカラを「世界平和」のために使い始めた。民を虐げる領主を討ち、自分達が統治者となって善政を施そうとしたのである。世界に災いを為す〝花〟のチカラを、世界に善を為すために行使する。何とも皮肉な話だった。

もっとも、妹達の行いが善であろうと悪であろうと関係はなかった。蒔いた種は自分で刈り取る。それだけだ。

たとえ世界中の人々が五人の妹達を「平和と秩序をもたらすウタヒメ」として熱狂的に崇拝し、彼女達を狙うゼロを「裏切り者」として憎悪したとしても。

〈2〉

道を大岩で塞がれ、遠回りを余儀なくされた。邪魔されたのは腹立たしいが、悪いことばかりではない。こうして露骨に封鎖したということは、これがファイブのいる神殿への近道なのだろう。

ゼロは海の国で潜伏生活を送っていたものの、土地勘があるわけではない。兵士達の配置や漏れ聞こえてくる会話からファイブの居場所に当たりをつけてはいたが、正確なとこ

ろは知らなかった。これで神殿の方角が把握できた。多少迂回することになっても、見当違いの方角へ向かって無駄足を踏むよりはいい。

道を外れて、浜辺に降りた。海の国は海岸線の間近まで山が迫っているせいで、迂回するとなればどうしても海側に降りることになる。

どうしても？　選択の余地がなかった？　つまり、誘導されていた、ということか？

本能が警告を発した。ゆっくりと歩を進める。崖の上に弓兵の姿はないか、岩陰に槍兵が身を潜めてはいないか、周囲を窺う。砂に足を取られたところを狙い撃ちにでもされたら、目も当てられない。

幸い、弓兵も槍兵も下っ端の剣兵も間近にはいないようだった。ただ、前方に見える水門と思しきものが注意を惹いた。河口付近なら水門があっても何の不思議もないが、門は崖に沿って設えられている。海の水を堰き止める必要がありそうな川などどこにも見当たらない。

何か、ある……のか？

そこでゼロは考えるのをやめた。何かあったら、そのときはそのとき。ごちゃごちゃ考えるのは性に合わない。何より、時間の無駄だ。

大股に歩き出したそのときだった。

「放てえっ！」

号令と共に水門が音を立てて開いた。同時に、咆哮をあげて巨大な何かが飛び出してくる。ギガースだった。ゼロの二倍の高さ、いや、三倍はありそうな巨体を持つ、直立歩行の魔物である。知性があるとはお世辞にも言えないが、棍棒程度の武器を使いこなすだけの知恵はある。

門が堰き止めていたのは川の水でも海の水でもなく、この獰猛な魔物。海水の浸食によってできた洞穴に魔物を閉じ込め、水門に偽装した檻の扉を付けた。この場所にゼロを誘い込むために。やはり、道を塞いだのは神殿に近づけないためだけではなかった。

狭い洞穴に閉じ込められていたせいで苛立っているのか、棍棒を振り上げてギガースが迫ってくる。

「上等だッ！」

ギガースに向かって、力任せに斬りつける。姑息な罠を仕掛けた連中に、こんなものは無意味だと思い知らせてやる。あからさまな罠に引っかかった自分に腹を立てているわけではない。断じて。

振り下ろされる棍棒を難なく躱わす。ギガースの動きは鈍重だった。地響きと砂塵をあげて棍棒が砂にめり込む。なまじ腕力があるせいで、棍棒は相当深く埋まってしまったらしい。引き抜けなくて難儀している巨体の背後に回り込んだ。首の後ろめがけて剣を突き立て、捻りながら強く押し込む。

ギガースが絶叫した。とはいえ、さすがに魔物である。首の後ろを抉ったくらいでは致命傷にならないらしい。

いきり立ったギガースが棍棒を振り回す。もちろん、身のこなしは相変わらずで、隙だらけである。ぎりぎりまで引きつけて、棍棒を掻い潜る。さっきと寸分違わぬ間抜けさで、棍棒が砂浜にめり込む。背後に回り込み、斬りつける。馬鹿馬鹿しいほど簡単な手順の繰り返しだった。

「学習能力がないってのも哀れなもんだな」

ただ、単調な繰り返しだけに、すぐに飽きた。それで、一気に片を付けることにした。ゼロは強く身体を反らせて、ウタノチカラを吐き出す。強い魔のチカラが喉を震わせる。ウタの二文字が付いていても、それは美しい音ではなく、むしろ騒音に近いとゼロ自身は思う。

視界が切り替わり、ギガースが石像のように動きを止める。実際にはギガースが動かなくなったのではなく、ゼロの動きが速くなっただけのこと。ウタウタイは声で魔力を操る。今、ゼロはウタノチカラによって自らの身体能力を非常識なまでに強化していた。

ゼロの剣はたった一振りで硬い首の肉を大きく抉り取った。ついさっきまで、幾度となく斬りつけても致命傷を与えられなかったのが嘘のように、ギガースは絶命した。

ふうっ、と息を吐いて生臭い血を拭おうとしたときだった。間近で強烈な音と熱が爆ぜ

た。身体が浮き上がり、叩きつけられた。ひっくり返った視界の中に戦艦があった。

続けざまに艦の砲台が火を噴くのが見えた。跳ね起き、岩陰へと走る。

ギガースとの戦いに気を取られている間に、艦隊の一部が迫っていたらしい。ゼロは舌打ちをした。

海からの砲撃は想定していた。他国と違って、海の国には優れた造船技術がある。東方との貿易も盛んで、強力な火薬を買い付けたという噂も小耳に挟んでいた。それで、先手を打ってミハイルに艦を沈めさせた。

沈めさせたつもりだったのだが、どうやらミハイルは何隻か仕留め損ねたらしい。

「ゼロ！　大丈夫？　大丈夫？」

そのミハイルが風を切って舞い降りてくる。陸に向かって砲撃が開始されたことで、ゼロに危険が及んでいると気づいたのだろう。

「こらあっ！　クソドラゴン！　さっさと艦を沈めておけって言っただろうがっ！」

「ゼロのために残しておいてあげたんだよ！　残しておいてあげたんだよ！」

「そんなもん要るかッ！」

言うそばから着弾し、砂塵が辺り一面に舞い上がる。ここにいては的にされるだけだ。身を隠そうとした岩も、いつの間にか跡形もなく砕け散っている。敵も馬鹿ではない。

「来い！」

ミハイルに向かって叫ぶ。しかし、この状況を理解しているのかいないのか、ミハイルは「なあに？　何するの？」と不思議そうに首を傾げている。
「いいから早く！」
「はぁい」
ミハイルがようやく着地した。勢いをつけてその背に飛び乗る。
「空から行く」
「わかった」
たった今、ゼロが立っていた場所で砂が爆ぜる。間一髪だった。ミハイルが翼を鳴らして急上昇を始める。砲台の向きを変えるのに手間取っているのか、空への追撃はない。
「最初からこうすればよかったね」
「気が進まなかったんだ」
「どうして？」
「だってキミ、臭いし」
ひどいや、という抗議の声をひとまず聞き流し、ゼロは海へと視線を落とした。こうして上空から俯瞰すると、艦隊の配置がよくわかる。最優先で守るべきものがあるのは、どの方角なのか。一目瞭然とまではいかなくても、推測はつく。
ようやく砲台の向きを変えたらしく、さっきの艦隊が砲撃を再開してくる。が、すでに

ミハイルは射程範囲外を飛んでいる。幼くとも竜種は竜種、人間の兵器如きに引けを取りはしない。

「うわぁん！」

ミハイルが悲鳴を上げて高度を落とした。別方向の艦から砲弾が飛んできたらしい。

「おい！　こんなところで暴れるな！」

「だって！　お腹のところをバシュッて」

「かすっただけだろうが！」

「熱いんだもん！　熱いんだもん！」

「我慢しろ！」

前言撤回。人間の兵器は十分に竜種の脅威となる。

「弾が怖いんなら、もっと高く飛べ！」

「飛んでるよう」

「もっと高くだ！」

ミハイルの身体が大きく上下に揺れる。翼を必死で動かしているのだろう。飛び方ひとつとっても、ミハイルは幼いのだと改めて思う。

「ミカエルだった頃と比べられても困るよ、ボク」

胸の内を読みとられたかのようで、ゼロは少しばかり戸惑いを覚えた。そう、ほんの少

しばかり、だ。

「比べてないよ。キミはミカエルじゃない」

ミカエル。一年前の戦いで、ゼロを守って命を落としたドラゴン。彼は転生し、ミハイルになった。しかし、ミハイルにはミカエルだった頃の記憶はない。

転生した直後こそ、あまりにも無防備に振る舞うミハイルに、もしやミカエルとしての記憶が残っているのではと考えたが、そうではなかった。孵化したばかりの雛が最初に見たものを親鳥と認識するようなものだった。

一年間、共に暮らしてみてよくわかった。性格も口調も仕種も何もかも、ミカエルとミハイルは全くの別個体だ。

「ねえ、ミカエルが怖いって言ったことある？」

ゼロには理解できなかったが、ミハイルはミカエルのことを知りたがった。幼い子供がおとぎ話の続きをねだるように、何度も、何度も、ミカエルの話をせがんだ。

「ないな。少なくとも私の知る限りでは」

「すごいなぁ。ミカエルには怖いモノがなかったのかな？　それとも、うんと怖くてもガマンできたのかな？」

「さあ、どうだか。おい、高度が落ちてるぞ」

慌てたように翼が上下した。

「ボクもミカエルみたいに強いドラゴンになりたいな」
ミハイルにとって、ミカエルはおとぎ話に出てくる勇者なのかもしれない。
「そしたら、ゼロ、褒めてくれる？　うんと褒めてくれて、頭をなでてくれて、ごほうびをくれて……」
「要求が多すぎです！」
「それからね、おっきなマルをつけてくれて」
「丸？」
「ほら、あんなの！」
ミハイルが海面に鼻先を向ける。海の上はどこもかしこも艦隊で埋め尽くされていたが、一カ所だけ何もない海面が広がっている。まるで船が避けて通っているかのようだ。
「なるほど、な」
そこだけ海の色が異なっていた。確かに、あれは海面に描いた「おっきなマル」だ。つまり、海の中に「巨大な円形の何か」がある……。
「あの大きな丸に向かって飛びなさい。あれは今からキミのものです」
「ほんと？　わーい！」
ミハイルの翼が風を切った。こんなに速く飛べたのかと、呆れるほどの高速飛行である。途中、幾つもの砲弾が飛んできたし、翼すれすれにかすめていったものもあったが、

ミハイルは気にも止めなかった。「おっきなマル」で頭の中がいっぱいなのだろう。子供の思考回路は、種族に関わりなく単純にできているものだ。
海面に描かれた「丸」が近づいてくる。と、ミハイルが翼をばたつかせて叫んだ。
「なんか浮いてきたよ！　浮いてきたよ！」
「だから、暴れるなッ！」
振り落とされないようにミハイルの背にしがみつく。ゼロの制止などまるで耳に入っていないらしく、ミハイルは翼といい尾といい、振り回せる部位はすべて振り回して驚きを表現している。
「ねえねえ、あれ何？　何？」
海中に沈んでいた「巨大な円形の何か」が浮上を始めていた。石造りの壁、その壁に沿って階段状に並ぶ観客席。
「闘技場（コロシアム）とか、キメすぎだろ。虚仮威し（こけおど）にも程がある」
「ころしあむって、なあに？」
「戦うための場所だ。大昔の」
動作も物言いも服装も、何もかも装飾過多で芝居じみたものを好むファイブらしい舞台だった。
もっとも、ミハイルの目には虚仮威しも物珍しく映っているのだろう。歓声を上げて闘

技場の上を旋回している。
「ねえ、降りてみていい？」
「好きにしろ」
わあい、とミハイルが円形のど真ん中に着地しようとしたときだった。
観客席の中でも一際高い場所に設えられた桟敷席から声がした。陽光に煌めく金色の髪を掻き上げながら、ファイブが姿を現す。傍らに、愛くるしい顔立ちの少年を侍らせて。
「ゼロお姉様のために、最高の舞台を用意いたしましたのよ。それとも、ベッドの上でお待ちしていたほうがよろしかったかしら？」
これ見よがしに胸を突き出し、身体をくねらせる様子は一年前と少しも変わらず、下品極まりない。しかし、この下品さも自分の中にあったモノ、だ。
妹達はゼロ自身を写し取って造られた。一年前、成長した五人の妹達と相見えた瞬間、彼女達は紛れもなく自分から造られたのだと悟った。自分自身の中にある、醜い部分、歪んだ部分を引き伸ばされて、鼻先に突きつけられているかのようだ、と。
ファイブの姿形は、かつて殺した女のものだった。生前、盗みと殺しを繰り返していた頃の話である。修道院に押し入り、食料を奪って修道女達を皆殺しにした。その中に、ファイブと同じ顔の女がいた。凡庸な顔立ちの修道女達の中にあって、一人だけ目立つ顔

だったから、鮮明に覚えていた。

もちろん、その女はずっと品のいい言葉遣いで命乞いをした。おそらく、性格にしてもファイブのように強欲ではなかっただろう。〝花〟はただ、ゼロの記憶からファイブの姿を造り、ゼロの思考からファイブの人格を造ったに過ぎない。

やたらと良い子ぶっては正論を振りかざすフォウは、遠い遠い昔の自分を見ているようだった。淫売宿に売り飛ばされた直後、ちっぽけな自尊心を必死で守ろうとしていた頃の自分に。

スリイなどは頭がおかしいとしか思えないが、そういう気違いじみた部分が自分に全くないかというと嘘になる。たまたま表に出てこないだけで、自分にも狂った部分はある。そういうことなのだろう。

甘ったれで単純で、お人好しのトウは、凡そ今の自分とは対極にあるが、あれは「生まれ育ちが違えばあり得たかもしれない自分」なのではないかという気がする。

生前のゼロは、実の母親に売り飛ばされ、友に裏切られ、男に捨てられ、ありとあらゆるものを失い続けてきた。踏みにじられ、奪い続けられる日々を生き抜くためには、一欠片の甘さも許されなかった。トウの善良さは、いわば沈みゆく船から真っ先に投げ出した積み荷だったのだ。

ただ、ワンだけはわからない。あの正義感の強さや生真面目さ、自制心、知識欲、どれ

を取っても自分の中にはない。仮に何不自由のない家に生まれていても、ワンのようにはならなかったと断言できる。

ワンの声と髪の色は、死の間際、傍らにいた少女に似ている気がしなくもない。だが、そのとき少女は両目を潰されていたから、瞳の色までは知らない。〝花〟はいったい自分の中の何を使ってワンを造ったのか？　それだけは未だ解けない謎だった……。

「私、本当に待ち焦がれておりましたのよ。毎晩毎晩。ゼロお姉様にお会いしたくて。狂おしく絡み合いたくて。一年前のように」

ねえ、そうでしょディト、とファイブが傍らの少年に同意を求める。彼の名はディトというらしい。彼がウタヒメに使える「使徒」であることはもちろん知っているが、名前までは知らなかった。

「もしかしたら、他のお姉様にヤラれてイッちゃったのかしら、なんて。まさか、私のことをお忘れになってたわけじゃありませんわよね？」

「残念ながら。とっとと忘れて、さっぱりしたいのは山々だけどね」

「ああら。すぐに忘れさせて差し上げますわ。何もかも。永遠に」

ファイブが今にも舌なめずりをしそうな顔になる。目の前の末妹がこの無意味な会話でさえ楽しんでいるのだと思うと、苛立ちを覚えた。無性にムカついた。

「御託はもういい。さっさと死ね！」

「ゼロお姉様ったら。何を仰っているの？　ここは闘技場ですのよ？　戦うのは闘士達と決まっていましてよ。私はウタヒメですもの」

　自分は闘士達の戦いを見物する姫君だ、とでも言いたいらしい。ファイブの唇が微笑とは異なる形に開く。甲高い叫びにも似た声が吐き出された。誰のものでもウタはウタ、耳障りな騒音である。

　闘技場がウタノチカラに包まれていく。使徒が召喚のための口上を詠唱し始める。

「聴きたもうれ、聴きたもうれ、第五の歌、古ノ異光
現世に顕現せし力、轟魔を払わんとす、光臨の儀
神罰が彩る断罪の槍、その目に焼き付けん
我がディトの名に於いて」

　強い光と共に、闘技場の上空いっぱいに召喚の魔法陣が広がった。この「天使」の召喚こそがウタウタイの本領である。強大すぎるウタノチカラを召喚に使うためには、ウタヒメ一人ではなく使徒の補助も必要になる。一人で召喚ができないわけではないが、チカラの制御が難しい。大きな岩を片手で支えたときと、両手で支えたときの違い、とでも言おうか。事実、過去に妹達は暴走状態に陥ったことがある。

　ファイブのウタが高く低く響き渡った。魔法陣の放つ光が一際鮮明になる。

「出でよ！　ファヌエル！」

魔法陣が開く。光に包まれて現れたのは、甲虫そっくりの「天使」だった。黒光りした盾を背負ったような本体に、籠手を組み合わせたような複数の肢。それでいて、ミハイルよりも大きな身体。

ゼロはミハイルの背に飛び乗った。まずはこの天使を倒さないことには、目的を果たせないとわかっていた。そして、己の剣のみで倒せる敵ではないことも。

「アレを焼き払え！」

「うん、わかっ……」

ミハイルの答えをかき消すかのように、真っ白な光の筋が向かってくる。

「危ないッ！」

ミハイルが真横へと身を翻した。光が翼をかすめて走る。鱗が焼ける臭いがした。

「あのビーってくるの、痛いよ！　とっても痛いよ！」

ミハイルが泣きそうな声で訴えてくる。直撃を免れたのは幸いだった。

「敵の攻撃が痛くなかったら、逆におかしいだろ？」

「う、うん。そうだね」

「わかったら、痛くてもがんばる！」

「はあい」

納得がいかないと言いたげな返事だった。だが、今はミハイルの気持ちを斟酌している

余裕などなかった。
「火だ！　早く火を吐けっ！」
「わかってるよう」
横滑りするように低空を移動しながら、ミハイルがファヌエルめがけて炎を吐いた。海の国で召喚された天使ならば、いわゆる水棲魔物と同様に炎を嫌うのではないか……。
炎がファヌエルの巨体を覆い尽くしたかに見えた。
「あっ！　ずるーい！」
ミハイルが憤慨の声を上げた。ファヌエルは水中に身を隠して炎を避けたのである。いつの間にか、闘技場は客席の半分近くが水没していた。
「水の中に隠れるとか、卑怯だよ！　卑怯だよ！」
しかし、それはゼロの読みが当たっていたことを意味する。やはりファヌエルは炎を苦手としている。だからこそ、ファイブは闘技場をすぐに水没させられる沖合に作ったのだ。或いは、ファヌエル自身が周囲を水没させる能力を有しているか。
いずれにしても、ファヌエルが水中にいる限り、ミハイルの攻撃は通用しない。
「引きずり出せ」
「えっ？」
「水の中に逃げ込んだ卑怯者を引きずり出して、壁に叩きつけてやりなさいと言ってるん

です」
「えー。そんなのムリ……」
「できるな？」
「えーと……」
「四の五の言ってる場合かっ！　早くやれっ！」
鱗の隙間を靴の踵で蹴り飛ばす。つくづく自分は子供の相手は向いていないと思う。この手のやり取りに付き合ってやれるほどの根気など、どこを探してもない。
「やるよ！　やるよ！」
ミハイルが水面に向かって急降下した。
「引きずり出したら、あそこに叩きつけてやれ！」
桟敷席を指さす。ウタを続けているファイブと、その傍らで恭しく跪いているディトがいる。
ミハイルの鉤爪がファヌエルを引っかけた。相当な重さであることが翼の動きから伝わってくる。
「今だ、やれ！」
ミハイルの背が大きく揺れる。ファヌエルの巨体が宙に浮き、観客席のど真ん中に激突した。ファイブ達のいる桟敷席ではない。

「何やってんだ！　もっと右だ、右！」
「そんなこと言われたって」
くすくすと笑う気配がした。
『ゼロお姉様ったら、相変わらず乱暴。でも、そこが、好・き。もっと激しくシてくださる？』
ファイブの思念が伝わってくる。脳味噌が腐りそうだ、とうんざりした。これもウタウタイの能力のひとつだが、頭の中に直接響いてくる思念は、暴力や嫌がらせに近い。聞き流すことも、耳を塞ぐこともできないのだから。
観客席に身体をめり込ませていたファヌエルが、もぞもぞと動き始めている。ファイブの思念に気を取られている場合ではなかった。
「また逃げられるぞ！　さっさと火を吐け！」
「わかったよ！　わかったよ！」
「二回言わなくていいッ！」
ミハイルの炎がファヌエルを舐めるように覆った。が、それもほんの短い間だけで、すぐにファヌエルの姿は水中に没した。
「もう一度だ！　引きずり出して叩きつけて消し炭にしてやれッ！」
「ゼロってらんぼう……」

ミハイルがため息混じりにファイブと同じ言葉を口にする。
「さっさとやれ！」
「はぁい」
気乗りしない返事ではあったが、二度目ともなればミハイルも要領を飲み込んだらしい。桟敷席を破壊するには至らなかったが、炎に巻かれたファヌエルはもがき、暴れ、闘技場の壁に大穴をあけ、水中に逃げ戻った。相当な深手だったのか、反撃が全くない。
「まだやるの？」
「もちろんです」
ファヌエルに少なからぬ傷を負わせたことで、召喚者であるファイブもまたチカラを削がれている。ウタが乱れ始めていた。これを続ければ、目的は果たせる。妹の一人を殺す、という目的を。
三度目の正直で、ついにミハイルはファヌエルを叩きつけて桟敷席を破壊した。間髪を容れずに炎がファヌエルへと向かう。咆哮が辺り一帯を震わせる。
闘技場を満たしていた水に亀裂が走った。ファヌエルが激しく暴れている。
「止めを刺せっ！」
ミハイルの炎と共に、ゼロも思うさまウタを吐き出す。視界が切り替わり、時間が止まったかのようにファヌエルの動きが遅くなる。

ウタノチカラはゼロ自身だけではなく、共に戦う者にも効果を及ぼす。業火と名付けただけでは足りないほどの火焔がミハイルの口から吐き出される。ファヌエルの黒い巨体が燃え上がり、砕けるように消え去った。

水が引いていく。今度は時間が早送りされているみたいだ、と頭の片隅で思う。ゼロとファイブ、ふたつのウタが同時に止み、静寂が訪れた。

ファヌエルがいたはずの場所に、ファイブが立っていた。挑発的な物言いも、芝居じみた仕種もなく、ただ顔色を白くして立ち尽くしている。

「そん…な……。ウタが……。私のウタノチカラ……」

糸の切れた操り人形のように、ファイブがその場に倒れた。〝花〟にチカラを根こそぎ奪われたときの自分に似ていると思った。ウタノチカラを使い果たしたファイブは今、指一本動かせない状態なのだろう。

ミハイルの背から飛び降り、足早にファイブに近づいた。

「いや……助け…て……」

問答無用で剣を振り上げる。

「おねが…い……」

まっすぐに振り下ろす。起き上がろうとしているのか、ぶるぶると震えている腹を剣先で縫い止め、絶叫する口を刃で塞ぐ。左胸に剣を突き立て、喉を切り裂く。何度も、何度

も。肉と骨と刃がぶつかり合い、鈍く湿った音をたてる。噴き出す血が闘技場の敷石を染める。

「まだやるの？　もうやめようよ」

ミハイルの泣きそうな声を聞き流し、ひたすらファイブを切り刻み続ける。同じ動作を力任せに繰り返しているせいで、腕がだるい。いつの間にか、悲鳴が止んでいる。

「ゼロ！　ゼロってば！」

「黙ってろッ！」

「だって……」

ミハイルは〝花〟のしぶとさを知らない。むしり取っても刈り取っても、雑草のように蔓延る〝花〟を。

「何もそこまでしなくったって」

腕や肩が鈍く痛み始める。ファイブの身体に剣を深々と突き立てると、ようやくゼロは手を止めた。全力で剣を振るい続けたせいで、疲労困憊していた。

「何もそこまで？　ああ、そこまでしなきゃウタウタイは殺せない。こいつらは」

そこいらの魔物とは違うんだ、と言いながらミハイルを振り返る。ミハイルが息を呑んだ。頭から返り血を浴びたゼロの姿に怯えたのだろうか。違う。ミハイルの視線はゼロを通り越して背後に向けられている。

剣が落ちる音を聞いた。ファイブの身体に突き立てていた剣だ。それが落ちる？　なぜ？
立ち上がる気配を背後に感じた。振り向く。ファイブが、ファイブであったはずのものが立っていた。何か言いたげに唇が動いたが、聞き取れなかった。代わりにすきま風のような音が血塗れの喉元から漏れ聞こえてくる。
べたり、と右足が前へ進む。かろうじてつながっている腕が今にも落ちそうに揺れる。胸と腹は何度も突き刺され、切り裂かれたせいで、白い骨と臓物とが剥き出しになっていた。なのに、立って歩いている。
「これがウタウタイ……」
ミハイルの声が震え、掠れている。目の前の凄惨な光景に心底怯えているのだろう。
これ以上長引かせるわけにはいかない、早く剣を拾って止めを刺さなければ、と思ったときだった。ファイブの動きが止まった。斬り飛ばされた腕が音を立てて落ちる。続けて首が。そして全身が。
「死んだ？」
ディトが剣を手に笑っていた。ウタヒメに仕える使徒が、主たるウタヒメを斬り殺して喜悦の色を浮かべている。
「死んだ死んだ！」
この上もなく愛らしい笑顔で言って、ディトはファイブの身体を踏みつけた。肉が潰れ

る音がした。
「今までさんざんコキ使ってくれたねえ、オバさん！」
ディトはファイブの腹と言わず顔と言わず踏みつけ、蹴り上げ、憎悪と嫌悪に塗れた悪罵を投げつけている。この場にいるゼロのこともミハイルのことも全く目に入っていないかのようだった。
「僕が使徒だからって、言いたい放題やりたい放題！」
ファイブの使徒に対する扱いは、どうやら想像を絶するものであったらしい。原型をとどめないほどに踏みつぶされた死体を見れば、その恨み辛みの深さがわかる。
「夜も昼も！　ベッドの中でも外でも！　愛してる、だって？　人をさんざん弄んでおいて、どの口で言うかなあ？　虫酸が走るね」
汗だくになっても、息が上がっても、ディトはファイブの死体を破壊し続けた。もはやゼロが手を下すまでもなかった。

〈3〉

死にたくない。
意識を手放す寸前まで、死にたくないと叫び続けた。声が出せなくなっても、自分が何

者なのかわからなくなっても、死にたくないと願った。真っ暗な闇の中でも、冷たい土の下でも、それだけがあった。

まだ生きていたい。まだまだ生き続けたい。

だって。私はまだ満足していないもの。まだ足りない。まだ欲しい。もっと欲しい。もっともっと欲しい。

ファイブと呼ばれた肉体が跡形もなく消え去っても、執念にも似たその思いは消えることなく残った。

私は死なない。絶対に死なない。まだまだ欲しいモノがあるんですもの……。

現世への欲望と執着がチカラを引き出した。ひたすらに増殖を続けようとする〝花〟から、再び生きるためのチカラを。

ゼロお姉様。お姉様は今、どちらにいらっしゃるのかしら？　ええ、必ず捜し出して差し上げますわ。もう一度、お目に掛かりましょうね。今度こそ、ゼロお姉様を私のモノに。お姉様も、ドラゴンも、全部、全部、私のモノ……。

かつてファイブであったはずのモノは、少しずつ、しかし着実に、その形を取り戻していった。

DRAG-ON DRAGOON3
STORY SIDE

# 弐

【竜の章】



〈1〉

空から落ちる夢ばかり見る。
夜半、自分の叫び声で目を覚ましたフォウは、ため息をついて枕に顔をうずめた。背中一面、汗で濡れて気持ちが悪い。
けれども、今、着替えたら目が冴えてしまうし、この後、また同じ夢を見たら、また着替えなければならなくなる。また着替えても、その後、またまた同じ夢を見て目を覚ませば、またまた着替えることになって……ああもう、きりがない。最近では、一晩に何度も夢を見る。
もともと夢見は良いほうではなかったけれども、ここまで酷くもなかった。嫌な夢ばかり見るようになったのは、ここ半年あまりのこと。毎日のように、自分の叫び声で目を覚ますようになったのは。
それでも、最初は一晩に何度も夢を見るようなことはなかった。汗で汚れた寝間着を替えて、ベッドに戻れば、あとは朝まで眠ることができた。でも、夢の回数がどんどん増えていって、今では眠っている時間よりも夢にうなされている時間のほうがずっと長い。
どうして私がこんな目に遭うのか、何も悪いことなんてしていないのに、私は正しいことしかしていないのに、とフォウは爪を噛んだ。やっと直した癖なのに、最近、また元に

戻ってしまった。
夢見が悪くなったのは半年前だと思っていたけれども、発端は一年前かもしれない。きっとそうだ。姉妹で殺し合うなんて間違ったことをしてしまったせいで、嫌な夢を見るようになった。
だから、私はやめてって言ったのに。ゼロ姉様もワン姉様も、私の言うことなんてちっとも聞いてくれなかった……。
「フォウ様」
遠慮がちなノックの音と、さらに遠慮がちな声がした。……今頃になって。
「うなされておいでのようでしたが」
使徒のデカートは毎晩、ウタヒメの警護のために寝室の扉の前に控えている。叫び声を聞いた後、声をかけようかかけまいかと逡巡し、意を決して扉を叩いたのだろう。デカートのこの気弱さがフォウは嫌いだった。
ウタヒメ様をお守りするのが使徒の役目？　そのためなら、扉の前で寝ずの番をするのも厭わない？　バカじゃないの？　だったら、私が叫んだ時点ですぐに声をかけなさいよね。ううん、うなされてるってわかった時点で起こしてくれたらいいじゃないの。っていうか、枕辺に付き添ってくれるとか。どうせ一晩中起きてるんだったら、部屋の外でも中でも同じことでしょ。なんて気が利かないのかしら。

苛立たしさを覚えて、思わず水差しを床に叩きつけた。
「フォウ様!?　いかがなさいました!?」
陶器の割れる音に驚いたのだろう。扉の前で狼狽する様子が目に浮かび、フォウはますます苛立った。
「うるさい！」
能無しのド変態が！　図体ばかり大きくて、脳味噌なんて小指の先ほども入ってなくて。だいたい、あんたが一度だって役に立ったことなんてあった？　蹴られて這い蹲るしか能がないくせに！
「フォウ様、あの……」
この期に及んで、部屋に入っても良いか許可を求めようとしているのだろう。それがますますフォウの怒りを煽った。
「うるさい！　うるさい！　うるさい！」
ベッドから飛び降りる。力任せに扉を開け放つ。ごつ、という鈍い音がした。デカートの額に硬い木の扉が直撃したようだが、構いはしない。どうせ痛めつけられて喜ぶ変態なのだ、この男は。
「この役立たずが！」
股間を蹴り上げる。牛蛙を押し潰したような呻き声を上げて、デカートが膝を折った。

「床でも舐めてろ！　クソッタレのインポ野郎！」
頭を踏みつけ、四つん這いになった尻を蹴り飛ばす。デカートはされるがままになっている。床に押しつけられている顔は歓喜のあまり緩みきっているに違いない。
「さっさと死ね！　死ねっ！　死ねっ！」
無茶苦茶に蹴りを入れながら、ふと疑念が兆した。
もしかしたら、デカートはわざを自分を怒らせようとしているのではないか？　ウタヒメに仕えるふりをしながら、神経を逆撫でして苛立たせるのが目的なのではないか？　そうやって疲れさせて、平常心ではなくさせて……その先は？
ああ、そうか。デカートは「敵」の回し者だったのね。まさか、使徒まで抱き込むとは思わなかったから、油断していたわ。
最初に「敵」を見つけたのは、ちょうど悪夢を頻繁に見るようになった頃だった。厨房の者達が毒を盛ろうとしていた。それで全員、処刑した。毒が見つからなかったのは、発覚する直前に処分したに違いない。
あのときもデカートは、思い過ごしだとか、調べ直したほうがいいとか、異を唱えてきたのだ。要するに仲間をかばっていたのだろう。
下働きの女達が結託して何か企んでいたときも、警護の兵士達が謀反を企てていたときもそうだった。もちろん、デカートが何と言おうとフォウは「敵」の回し者を許すつもり

はなかった。
「フォウ様？」
急に蹴りが止んだからだろう、デカートが怪訝(けげん)そうな顔で見上げてくる。
「あの……？」
いつもなら、ここでフォウはむらむらと腹が立って、さらに激しく殴る蹴るを繰り返して疲れ果てていたところだが、もうその手には乗らない。
「出て行きなさい」
デカートが両の瞼(まぶた)を全開にする。
「聞こえないの？　出て行けって言ってるの。この山の国から。二度と私の前に現れないで。もう騙(だま)されないわ。おかしいと思ってたのよ。処刑しても処刑しても敵の回し者が入り込んでくるなんて」
「フォウ様、それは……」
「あんたを殺さないのはね、『敵』に伝えてもらうためよ。この国から手を引きなさいって。いい？　必ず伝えなさいよ？」
「それは誤解です！　このデカート、決して……」
「騙されないって言ってるでしょ！」
みっともなく膝をついたまま、デカートが縋(すが)りついてくる。

「どうか、それだけはお許しを！　私がお側を離れたら、フォウ様をお守りする者がいなくなってしまいます！」

無言のまま、廊下の端まで蹴り飛ばす。それでもデカートは必死の形相で起き上がった。追い払っても叩き潰してもしつこく湧いて出る害虫のようだ。

「それに、フォウ様お一人では魔獣を召喚できません！　それでは、いざというときに危険が……」

「黙れ！」

懇願するデカートの顔面を力任せに殴りつけ、階下へと蹴り落とす。大柄な身体が無様にひっくり返り、やかましい音をたてて螺旋階段を転がり落ちていく。

どこまでも腹立たしい男。私を守る者がいなくなる？　私一人じゃ召喚ができない？　バカじゃないの？　私がいつ、あんたに助けて欲しいって言った？

「今日中に、この国から出て行きなさい！　明日以降、私の前に現れたら殺すわよ！　いいわね！」

これで、「敵」の回し者はいなくなった。一人残らず。だって、この砦にはもう誰もいないもの。みんな殺してしまったもの。

どこかへ身を隠したほうがいいかしら？「敵」に見つからない場所へ。そうよ、一人なら隠れるのも容易いわ。「敵」の目くらい、いくらでも欺ける。

敵？　敵って誰だっけ？　ううん、敵は敵よね。そう、敵よ。みーんな、敵なのよ。だから、殺さなくちゃ。みーんな、みーんな、殺さなくちゃ……。

〈2〉

ファイブを始末した後、即座に海の国を離れた。ウタヒメを殺されて、海の国の兵も民もいきり立っていた。とてもじゃないが、彼らの相手まではしていられない。

「山の国？　よりにもよって、一番遠い国？」

ゼロがミハイルに命じた行き先を聞いて、ディトが首を傾げた。ファイブの使徒であったこの少年は、主（あるじ）の死後、当然のような顔をしてゼロに同行した。

ディトに言わせれば、ゼロは「下品で強欲で頭の悪い肉豚女から自分を解放してくれた恩人」であるらしい。もっとも、ディトの言動を見る限り、本当に「恩」とやらを感じているのかどうかは疑わしい。彼なりの社交辞令か、単なる言葉遊びか。

「ま、海の見えない場所なら、僕はどこでもいいけどね。もう海だけはうんざりだ」

この辺りがゼロに同行したディトの本音だろう。或いは、「ウタヒメに仕えることを止めないほうがいい」と察したのか。

元来、使徒はウタヒメに仕える存在である。ならば、使徒とウタヒメが離れればどうな

るのか。ディトがそれを知っているとは思えないが、本能的に何かを嗅ぎ取っているのかもしれない。
ゼロ自身も戦力が増えて困るということはなかったし、何より、手近なところに性処理の相手がいるのはいい。調達する手間が省ける。
「それにしても、ウタヒメが全員、ド淫乱の色情狂だとは思わなかったな。あの肉豚女だけかと思ってた」
昨夜遅くまで相手をさせたことに文句をつけたいのか、ディトはわざとらしく大あくびをした。
強大なウタノチカラは、何の代償もなく行使できるわけではない。チカラを使えば、性欲が増大する。ウタウタイには尋常ならざる性欲がつきまとうが、その理由がこれだった。
つくづく〝花〟は皮肉がお好きらしい。年端の行かない頃から男の相手をさせられ、そんな暮らしにうんざりして人殺しに手を染めた。その自分が男無しではいられない身体になるとは。
「やることが同じなら、ゼロのほうがいいけどね」
「そりゃどうも」
「ぶよぶよにたるんだ肉団子と違って、細身だから抱かれ心地がいいし。ヤッてる最中に潰される心配しなくていいし。って、そんなのと比べて褒められてもうれしくないよね？」

全くだな、とゼロが答えるより先にミハイルが口を挟んでくる。
「ねえねえ、何の話？　褒められてうれしくないなんてことあるの？　ボク、褒められたらいつでもうれしいよ？」
やけにおとなしく飛んでいると思っていたら、しっかり聞き耳を立てていたらしい。
「お子ちゃまには、関係のない話」
えー、とミハイルが不満そうな声を出す。生まれた時期がほんの少し早いか遅いかの違いしかない子供が二人、他愛のない口喧嘩をしているようで、思わず苦笑が漏れる。
ディトが生意気そのものといった視線を向けてくる。
「そう言うキミも子供だろうが」
「なんか言った？　オバサン」
ディトは見た目こそ愛らしい少年だが、口の悪さがそれを台無しにしている。ファイブが死んだときにこれ以上ないほど口汚く罵(ののし)っていたのは、それまでの恨み辛みのせいであって、他の者に対してはそうでもないのだろうと思ったが、違った。取り立てて恨みのない相手に対してもディトは容赦(ようしゃ)のない言葉を吐く。
そのファイブ自身は、ウタノチカラを利用して強引にディトの言動を矯正していたらしい。「飾り物」として側に置くには、この減らず口と生意気さは不要、というわけだ。
もっとも、ディトが何を言おうが何をしようが放置するとゼロは決めていた。別に「飾

り物」が欲しいわけではなかったし、子供の言葉にいちいち耳を貸すほど暇でもない。
「殺すぞ、ガキ」
それに、腹に据えかねたときだけ、ちょいと一睨みしてやればディトはおとなしくなる。どこまでなら許されるのか、踏み込んではならない境界線はどこなのか、その見極めがつく程度にディトは利口だった。
「話を戻すけどさ」
こんなふうに。決して可愛げがあるとは言い難いが、扱いにくいわけでもなかった。
「なんで山の国なのさ？　砂の国にだってウタヒメはいるんだから、近いほうから行けばいいのに」
「海の上を飛べば、そんなに遠いわけじゃない」
それに、ファイブが殺されたことは一両日中に教会都市のワンの耳に届くだろう。となると、ワンが次に打つ手は何か？　残る妹達を一カ所に呼び寄せようとするのではないか？　一年前、そのやり方でワンはゼロに勝利している。人は成功体験を忘れられないものだ。
だとすれば、砂の国は危険だ。教会都市にも近く、森の国と山の国にも隣接している。逆に、教会都市から最も遠い山の国なら、集合場所として使われる可能性はまずないと見ていい。

それに、ファイブが死んだ今、海の国の艦隊は司令塔を失って瓦解したも同然である。ミハイルにとって脅威となる対空兵器は、少なくとも海の上にはない。海の国から沖合を飛び続ければ、攻撃を受けることなく山の国へ至るだろう。

「ま、僕はどっちでもいいけど。砂でも山でも。できれば、早く海が見えない場所へ行きたいってだけで」

「そんなに海が嫌いか？」

「大っ嫌いだね。海が好きって奴の気が知れないよ。風が生臭くて、ベタベタして。僕のウタヒメ様と同じ。生臭くてベッタベタ。ああ、思い出しただけで気分悪くなってきた」

げえっ、とディトが嘔吐する真似をする。

「あー。いーけないんだ、いけないんだ」

相変わらず聞き耳を立てているミハイルが囃し立てた。

「ディトは使徒でしょ？　使徒なんだから、ウタヒメ様を悪く言っちゃいけないんだよ」

「関係ないね。もう死んだんだから。ぐっちゃぐちゃになってさ。いや、元に戻ったってとこかな。肉団子が挽肉に戻っただけだ」

「死んだ人を悪く言うのもいけないんだよ」

ゼロが教えたわけでもないのに、ミハイルは時折、至極真っ当で常識的なことを言う。いったいどこで聞き覚えてくるんだか、と半ば驚き、半ば呆れてしまう。

「それに、ファイブはかわいそうだったよ。死にたくないって泣いてたよ」
「どうせ嘘泣きだ」
泣いていようが笑っていようが、関係ない。妹達は全員殺す。殺さなければならない。
「でも、やっぱり殺すのって良くないと思うんだ。ボク、きょうだい殺しには反対！」
「ミカエルは反対しなかった」
「えっ？」
「妹達を殺すな、なんて、ただの一度も言わなかった」
狡いやり方だ。ミハイルを黙らせるために、ミカエルを引き合いに出した。しかも、肝心な部分を伏せた上で。
ミカエルが妹達を殺すなと言わなかったのは、すべての経緯を知っていたからだ。他のウタウタイ達が実は「きょうだい」などではなく、〝花〟が造り出した紛い物で、世界を滅ぼす災いの種だと、ミカエルは知っていた。竜種だけが〝花〟を破壊できることも。
しかし、ミハイルは転生してから、やっと一年。自分自身のことさえ、半分もわかっていない子供だ。すべてを教えるにはまだ早すぎる。
『妹達を始末したら、その後は私を……殺してくれ』
同じ言葉を告げるには、まだ。

## 〈3〉

二年前。妹達を取り逃がした後、ゼロが真っ先にやらねばならなかったのは、竜種を探すことだった。どうにか歩けるようになると、人の分け入らない険しい山へ向かった。人間との接触を好まない竜種は、高い山の頂を棲み処とすると聞いていたからである。

しかし、実際にミカエルと出会ったのは高い山でもなければ、人の分け入らない辺境の地でもなかった。

何の変哲もない海岸だった。相も変わらずお尋ね者だったゼロは、追っ手の兵士達と戦っていた。あろうことか、その戦いの最中に乱入してきた竜がいた。それがミカエルだった。

「人間の分際で竜種に弓引くとは不届き千万！　許せぬッ！　そこへ直れッ！」

どうやら流れ矢に当たったらしい。もっとも、弓兵達の狙いはゼロである。たまたま手許が狂ったにせよ、地上の的に向けて射た矢に当たるくらいだから、ミカエルはかなり低空を飛んでいたのだろう。

「我が名はミカエル！　誇り高き竜種の……いてっ！　こら！　最後まで言わせぬかッ！」

大仰に名乗りを上げようとしたところを、弓兵に矢を射かけられて怒っている姿は、「誇り高き竜種」とは程遠いものだった。

しかも、怒ったミカエルは所構わず炎を吐き散らしてきた。弓兵にだけでなく、ゼロに対しても、である。

「こらあっ！　どこ狙ってんだ、バカドラゴン！　危ないだろうがっ！」

「バカとはなんだ、バカとは！　俺……いやいや、じゃなくて。竜種たる我に向かって、何たる暴言！」

今度ははっきりとゼロを標的と定めた炎が降ってきた。あわてて避けると、ミカエルは理不尽極まりない要求を突き付けてきた。

「女！　動くでない！　当たらぬではないかッ！」

「当たってたまるか、バカッ！」

「なんだとッ！　おとなしく聞いておれば、バカバカと……。仮にも竜種に向かって人間如きが！」

「全っ然、おとなしく聞いてないだろがっ！　ていうか、バカをバカと言って何が悪いッ！」

「バカと言う貴様こそバカではないかッ！」

何とも不毛な罵倒合戦だった。罵倒と炎を吐くミカエルに対して、ゼロが倍にした罵倒を投げ返しと、そんな応酬が延々続いた。辺り一面が焼け野原になり、一人残らず兵士達が消し炭に変わった頃になって、ようやくミカエルは攻撃を止めて言った。

「女。おぬし、その身の内に〝花〟を飼っておるな？」
頭が悪そうに見えてもドラゴンはドラゴンだな、とゼロは思った。こちらから何も言わなくても、〝花〟に寄生されていることを見抜いたのだから。
妹達のことがなければ、目の前の竜に自分を殺させれば良かった。だが、それだけでは足りない。妹達を全員始末した上で、自分を殺してもらう。この手順だけは譲れない。
しかし、ゼロが話を切り出すよりもミカエルのほうが早かった。
「女！　これから我の与える試練を乗り越えてみせよ！　さすれば、我は貴様を友として認めようぞ！」
「は？」
頭が悪そうに見えたわけではなかった。このドラゴンは実際に頭が悪い。それもかなり。
「偉大なる竜種の頂点に立つこのミカエルが、種族を超え友となろうと言っておるのだ」
「いや、別にそんなこと頼んでないし」
「感謝せよ、女！」
「だから、頼んでないって。むしろ、頼みたいことはそっちじゃなくて」
頼んでも大丈夫だろうか、という不安が湧き上がった。確かに、炎の威力はたいしたものだった。最強かどうかは比較対象となる竜種を他に知らないから断言できないが、ほぼそれに近い力は備えていそうに見える。だが、力は力でも理解力や判断力となると、甚だ

心許ない……。

「ごちゃごちゃと五月蝿いわッ！　四の五の言わずに我が背に乗らぬかッ！」

そう言われて、つい白銀の背によじ登ってしまった理由は、ミカエル以外の竜種に遭遇できる見込みがほとんどなかったことがひとつ。そして、もうひとつの理由は「なんとなく」、だろうか。

ただ、すぐにゼロはそんな自分の軽率さを猛烈に後悔する羽目に陥った。ミカエルの「試練」とやらは無茶苦茶だったのである。魔物の徘徊する森や、とんでもなく険しい山の頂上にいきなり置き去りにされた挙げ句、「そこから自力で脱出せよ」といったものばかり。仕舞いには、「我を倒して力を示せ」ときた。馬鹿馬鹿しいことこの上ない。

しかし、その馬鹿馬鹿しいことを繰り返しながら、いつしかゼロはミカエルに己の身の上を語っていた。娼婦から人殺しとなり、捕縛されて刑場で晒し者にされ、世界を呪いながら死んで、〝花〟に寄生されたこと。自らの手で〝花〟を駆除しようとして失敗し、五人の妹達が生まれてしまったこと。

そして、気づいた。ひとつの嘘も交えずに自分の来し方を誰かに語るのは初めてだった。自分以外の誰も信用していなかったから、手の内を晒すような真似はしなかったし、そもそも何かを語り合うような相手も時間もなかった。

人間でなくなった後になって、人間ではない相手に、人間だった頃の話をする。それは

何とも奇妙に思えた。だが、決して不快ではなかった。
一方で、ミカエルは昔のことや自分自身について多くを語ろうとしなかった。何を尋ねても、「忘れた」だの「知らん」だのと素っ気ない答えを返しては、そっぽを向いた。話したくなかったのだろう。人間よりも遙かに長大な歳月を生きてきたくせに、ミカエルは嘘や隠し事が下手だった。
「……とまあ、私の事情はそんなところだ」
ゼロがそう言って話を終えると、石になったかのように身動ぎひとつしなかったミカエルが徐に口を開いた。
「太古の昔から竜種は〝花〟の天敵であり、竜種は〝花〟を滅ぼさねばならぬ、と聞いておる。だが」
「だが？」
「所詮、年寄り連中の繰り言に過ぎぬ。何ひとつ根拠もなければ、証拠と思しきモノも、ない」
ミカエルの言う「年寄り」とは齢一万歳を数えるドラゴン達で、八千歳のミカエルは竜種としては若いほうらしい。とはいえ、人間から見れば、どちらも似たようなものだ。千年を超える歳月など、想像したくともできない。
「我は常々、疑わしいと思うておった。どうも〝花〟にまつわる伝承は胡散臭い」

だからこそ、その〝花〟を宿した人間を初めて目の当たりにしたミカエルは、一方ならぬ興味を覚え、仲間になってやろうなどと突拍子もないことを言い出したに違いない。

「けど、私の話でわかったろう？　〝花〟はこの世界に災いを為す。竜種は〝花〟を滅ぼすべき、というのは間違っちゃいない」

無茶苦茶な「試練」を課すことでゼロと行動を共にし、〝花〟の気配を間近に感じることによって、ミカエルにも薄々わかり始めていたはずだ。古の伝承とやらが決して胡散臭いだけの代物ではない、ということが。

「それでも、わからぬことが多すぎる。我はまだ……得心が行かぬのだ」

なぜ、〝花〟が存在しているのか？　なぜ、竜種だけがそれを破壊できるのか？　ミカエルの言う「わからぬこと」とはその辺りを指しているのだろう。だが、ゼロにとってそんなものはどうでも良かった。〝花〟が悪しきモノであることははっきりしている。その悪しきモノを自分の手違いで増殖させてしまったこともまた明らかな事実である。

「私には時間がないんだ」

こうしている間にも、邪悪なチカラは増殖している。自分の〝花〟も、妹達の〝花〟も。自分が自分でいることができて、妹達が「世界に調和をもたらすウタヒメ」でいられる時間は、もう幾らも残されていない。

だから、とゼロは言って、ミカエルを見据えた。

「〝花〟から生まれた妹達を殺すのを手伝って欲しい。そして、妹達を始末したら、私を……殺してくれ」

沈黙が続いた。何かを思い出そうとするかのように、ミカエルはしばし目を閉じていたが、やがて微かな声で「わかった」と答えたのだった。

〈4〉

ゼロの読みは当たり、海の上を飛ぶ間、攻撃を受けることはなかった。艦隊と全く遭遇しなかったわけではない。だが、もはや命令系統が機能していないのだろう、艦はその砲台を微動だにさせなかったし、追跡さえしてこなかった。

単調な海の上に飽きたミハイルと、もともと海が嫌いなディトとが代わる代わる口にする不平不満に悩まされた以外は、平穏そのものの空の旅だった。

「山の国のウタヒメはフォウ……だったっけ？」

眼下に広がる海が緑の大地に変わるなり、ディトは首を傾げた。新たな不平不満の材料でも探すつもりなのかもしれない。

「フォウって、どんな妹さんなの？」

ミハイルが興味津々といった様子で便乗してくる。こちらは純然たる好奇心であること

に間違いはない。

「処女だ」

ミハイルもディトも揃って黙り込んだ。もちろん、両者の沈黙の意味はそれぞれに異なる。ミハイルはいきなり知らない単語が出てきて面食らっている様子だし、ディトのほうはまさか質問の答えが一言で終わるとは思わなかったらしく、説明の続きを待っていた。

しかし、一向に続きを言わないゼロに焦れて、先に口を開いたのはディトだった。

「説明、まさかそれだけ？」

「十分だろう。処女のウタヒメってだけで」

「ああ、なるほど。確かに、それ以上の説明は不要だよね。例外なくド淫乱で色情狂のウタヒメのくせに処女？　どんだけ抑圧されてんだか。間違いなく、扱いにくい女だね。賭けてもいい。肉豚女の使徒もうんざりだったけど、こっちも別方向で面倒臭そう。フォウの使徒に同情するね。きっと使徒が逆らえないのを良いことに無理難題ふっかけてるんだろうな。肉豚女よりは頭良いだろうから。てか、肉豚女よりバカって世界中探してもいないと思うんだけど。とにかく、下手に知恵が回る分、余計に厄介って感じ？　欲求不満で、執念深くて、悪知恵が働いて……って何ソレ!?　そんなのアリ？」

もともと口数の多いディトだが、ウタヒメへの悪口雑言となると、いくらでも並べ立てることができるらしい。

「そんな地獄の番人みたいなウタヒメ様とか、ちょっと信じられないんだけど？　っていうか、想像を絶す……」
「ねえねえ。ショジョってなぁに？」
ミハイルが口を突っ込んでくる。話の腰を折られたのが不愉快だったのだろう、ディトがあからさまに不愉快そうな口調で吐き捨てた。
「お子ちゃまにはまだ早いから」
ミハイルが抗議の声を上げようとしたときだった。ゼロがそれに気づいたのは。
「おい！　地上に向かえ」
「なんで？」
「いいから。あそこに人がいるのが見えるだろう？」
遠目にも大柄とわかる男だった。フォウの使徒、だ。あっ、とディトが小さくつぶやいた。同じ使徒同士、顔くらいは知っているのだろう。
「あいつの近くに降りてくれ」
周囲にフォウの姿はないが、ここに使徒がいるということは、そう遠くない場所にいるはずだった。
「近くに降りちゃっていいの？　攻撃してくるんじゃない？　アイツのウタヒメはまだ生きてるんだし。てか、露骨に罠臭いんだけど？」

「罠？　それがどうした？」
　むしろ好都合だ。フォウの所在を知らないこちらとしては。向こうから仕掛けてくれれば、尻尾くらいは掴めるだろう。でなかったら、あの使徒を捕獲して、フォウの情報を洗いざらい吐かせてやる。
「もう少し危機感ってヤツを持とうよ」
　ディトがため息をつく間にも、地上が迫ってくる。フォウの使徒が何事かという顔をしているのが見える。
「だったら、キミはここにいろ！」
　ミハイルの背を蹴って飛び降りた。着地と同時に剣を抜く。男は武器を構えるでもなく、ただ目を丸くして突っ立っている。どう見ても、戦う気があるとは思えない。
「フォウの使徒……だな？」
　抜刀したまま、ゆっくりと歩み寄る。見た目は気弱そうな中年男だが、主がフォウである。良い子ぶっているくせに腹黒い、という主と同じく、使徒もまた気弱そうに見えて残忍だったりするのではないか？
　だから、相手が不意に身を低くしたとき、ゼロは咄嗟に飛び退き、身構えた。すぐにでも斬り返すつもりだった。が、その予想は大きく外れた。
「私、デカートと申します」

身を低くしたのは攻撃しようとしたのではなく、跪くためだった。フォウの使徒、デカートは、どこか遠慮がちな口調で「ゼロ様でいらっしゃいますね？」と言った。
「えっ？　初対面なわけ？」
背後で声がした。罠でないとわかって安心したのか、ディトがミハイルの背から飛び降りてくる。興味津々、という表情を顔に貼り付けて。
「てっきり面識があるんだと思ってた。だって、一目見ただけで、このオッサンが使徒だってわかってたよね？」
「顔は知ってた。それだけだ」
ディトのときと同様、名前までは知らなかった。ディトが物問いたげな顔をしたが、理由を説明するほど暇ではない。ゼロはデカートに向き直った。
「使徒がこんな場所で何をしている？　フォウの命令か？」
「はい……。あの……」
デカートが口ごもった。
「フォウは近くにいるのか？」
「ええと……」
はっきりしない態度に苛立ちを覚え、思わず怒鳴った。
「さっさと答えろ！」

「は、はいっ！」
雷に打たれたようにデカートの背筋が伸びる。
「フォウ様に追い出されました！」
「追い出された？」
再びデカートの背が猫のように丸まった。大柄な中年男がしょげ返る様子は、どこか滑稽でさえある。
「はい。この国から出て行け、と」
今にも泣き出しそうな顔になってデカートが続けた。
「フォウ様はお変わりになってしまわれました。敵の回し者だと仰っては周囲の者達を次々に……。側近の者達も、警護の兵士達も、果ては下働きの者達まで……」
「殺したのか？」
はい、と答える声は震えていた。いったい何人をその手に掛けたのかは知らないが、尋常な人数ではないことは確かだった。
「さすがにフォウ様は私を殺そうとはなさいませんでした。ただ、『敵』にこの国から手を引くように伝えろ、と。もう私には何が何だか、さっぱり……」
「その敵とやらに心当たりはあるのか？」
「いいえ！　いいえ！　心当たりなど、全くございません！　何より、処刑されたのは

フォウ様への忠誠心に厚い者達ばかりです。たとえ大金を積まれても、寝返るような者など！　なのに、フォウ様は疑心暗鬼になられて……。私がどれほど言葉を尽くしてお諫めしても、耳を貸してくださいませんでした」

「なるほど、な」

　フォウは〝花〟の悪影響で狂気に囚われてしまったのだろう。教会都市での戦いから一年。〝花〟にとって、瀕死の重傷を負ったゼロの身体を修復させるのに十分な時間だった。

　それは、妹達の〝花〟にとっても同じこと。この一年で、急速にチカラを増大させた〝花〟に、苗床であるフォウの自我は持ちこたえることができなかった。もしかしたら、ゼロが気づかなかっただけで、すでにファイブも自我の崩壊が始まっていたのかもしれない。所詮、妹達はゼロを写し取っただけの紛い物である。苗床としては不十分なのだろう。

「フォウのところへ案内しろ」

「そ、それだけは……お許しを。追放された身とはいえ、私はフォウ様の使徒です。フォウ様のお命を狙うゼロ様をお連れするわけには」

「楽にしてやると言ってるんだ」

　デカートの口許が苦しげに歪む。誰よりも近くで仕えてきたデカートには、手の施しようもないことがわかっているのだ。もはやフォウを元に戻すことなどできはしない。

「これ以上放置したら、フォウはこの国の人間を皆殺しにするぞ。罪もない人々が大勢死

ぬ。それでもいいのか？」
　両膝と両の手のひらを地につき、デカートはしばらくうなだれていた。その外見と同じく、デカートは穏和な質で根っからのお人好しに違いない。罪無くして殺された人々を悼み、正気を失った主に心を痛めることができるほどに。
　やがてデカートは諦め顔で立ち上がり、歩き出した。無言のままではあったが、その行き先は明らかだった。

## 〈5〉

　フォウが身を隠しているという場所までは目と鼻の先だった。追放されてもフォウから離れ難かったのか、デカートはその周囲をうろうろしていたらしい。
　デカートはそこを単に「山の砦」と呼んだが、複数の砦が山並みに沿って連なる様は、要塞都市群とでも呼びたくなるほど壮観だった。山の国は地形を生かした築城が盛んで、土木技術に優れている。
　そして、砦の内外とも、一見しただけで高価とわかる石材が惜しげもなく使われていた。山の国では、装飾用の貴石から建築資材まで多種多様な石を産出している。その石を使った階段と、急勾配の坂を交互に登り、ひたすら上へと進んだ。警護の兵に見咎められ

ることもなければ、攻撃を受けることもなく。
「妙に静かだな」
人の声もなければ、獣の気配もない。辺りに木霊(こだま)しているのは、ゼロ達の足音とミハイルの翼の音だけである。
「そうだった。兵士達も誰も彼も、フォウが一人残らず殺した……」
鳥や獣の姿までもが消えているのは、フォウに殺されたわけではなく、本能的に危険を察知して逃げ出したのだろう。天変地異を前にすると、鳥や獣が一斉に姿を消すように。
「その後、ウタヒメが乱心したという噂はたちまち国中を駆け巡り、今ではこの砦に近づく者などおりません」
「賢明だな」
「それでも私は、最後までお側に付き従う覚悟でおりました。たとえフォウ様に足蹴(あしげ)にされようと、この身を裂かれようとも！　あの長い爪が私の……を……切り裂いて……その痛みたるや……ううっ」
いつの間にやらデカートが恍惚(こうこつ)とした表情を浮かべている。先刻までの生真面目な様子とは別人である。ディトがゼロの肩をつついてくる。
「ねえ、ゼロ。このオッサン、ちょっと危なくない？」
「ちょっとどころじゃない」

道すがら、少しばかり会話を交わしてみたが、デカートの言葉の端々に「普通でない嗜好（しこう）」が、もっと言ってしまえば「痛めつけられて喜ぶ性癖」が、垣間見えていた。抑圧された欲求が服を着て歩いているような主に仕えていたせいかと思ったが、こればかりはフォウのせいではなく、デカート生来のもののようだ。

「正真正銘の変態だ、こいつは」

うへえ、とディトが嫌悪感をあらわにして後退（あとずさ）った。もっとも、ディトにしても、デカートとは別の意味で普通ではない。性癖ではなく、美的感覚がおかしいのである。行動を共にして幾らも経たないうちに、ゼロはそれに気づいた。

一般的に「美しい」とされるものは、ディトの目には少しも美しく映らないらしい。代わりにディトが愛でるのは、「醜い」「汚い」とされるもの。非の打ち所なく美少年であるディトが、排泄物（はいせつぶつ）や吐瀉物（としゃぶつ）の類をうっとりと眺める。それは何とも異様な光景だった。

まあ、ディトの美的感覚も、デカートの性癖も、誰に迷惑をかけるわけでもない。ゼロ自身もとくに困りはしなかったから、別段、文句をつける気はなかった。

「ねえねえ、ヘンタイってなあに？」

いつもなら、ここでディトがうんざりした顔で「お子ちゃまには云々（うんぬん）」と言い返し、それにミハイルが「えー」と不満を表明し……というやり取りが始まるところだったが、このときだけは違っていた。

二度繰り返して「ヘンタイってなあに？」と言おうとしていたミハイルが、不意に口を噤んだ。翼の付け根がびくりと震えるのが見えた。驚いているわけでも、怯えているわけでもない。ただ、ミハイルが何かの「気配」を察知したらしい、ということはわかった。

　ミハイルの様子から只ならぬものを感じ取ったのか、ディトも突っ込みを入れるのを中断して口を閉ざしている。

　ゼロは、用心深く周囲を見回した。開けた場所だった。飛空艇の発着にでも使っているのか、広々とした石畳の広場を城壁が取り囲んでいる。城壁の上に幾つもの砲台が設えられているのは、上空からの敵を想定しているのだろう。その砲台の近くに人影がある。それが誰なのか、確かめるまでもない。

「ゼロ姉様！」

　聞き覚えのある、だがどこか狂気を孕んだ声が降ってきた。続けて、けたたましい笑い声と。

「ゼロ姉様だわ！　ホンモノのゼロ姉様だわ！　誰よりも強くて美しいゼロ姉様！　ずっと私が憧れてたゼロ姉様！」

　城壁の上、砲台付きの望楼の天辺にフォウが立っていた。逆光のせいで、どんな顔をしているのかはわからない。ただ、その口調はどこまでも楽しげだった。今にも踊り出そうとするかのように、フォウが両手を広げて片足立ちになる。くるりとその場で回ってみせ

ると、フォウは身体を仰け反らせて笑った。
「フォウ様！　お止めください！　危のうございます！」
デカートの悲痛な叫びに、フォウの笑いがぴたりと止んだ。
「ゼロ姉様がそこの役立たずと一緒に現れるなんて！　悲しいわ。『敵』の手に落ちてしまったのね」
「敵？　それは何だ？」
そんなものがどこにもいないことは知っている。フォウが〝花〟に支配されてしまったのは明白である。だとすれば、フォウが「敵」だと思い込んでいるものは……。
「決まってるじゃない。この世界よ！」
やはり、とゼロは独り言ちる。妹達が「世界に調和をもたらすウタヒメ」でいられた時間は束の間だった。
「私とゼロ姉様以外は全部、全部、全部、敵なのよ！　ああ、でも。もう違うわ。ゼロ姉様も敵になってしまったわ。ゼロ姉様だけは私の味方だと思ってたのに。私が泣いていたら、いつも慰めてくれたのに。私がいじめられたら、いつも守ってくれたのに。ねえ、そうでしょう？　一緒に暮らしていた頃、誰よりも私に優しくしてくれたでしょう？」
そんな事実はなかった。何ひとつ。一緒に暮らしたことなどないし、フォウに優しくしてやったこともない。フォウの中にあるのはすべて、〝花〟によって捏造された記憶だ。

「なのに、敵の手に落ちてしまったのね。なんてかわいそうなゼロ姉様。でも、心配しないで。私が殺してあげるから。みーんな、殺してあげるから。みーんな、みーんな、殺すから！」

笑い声が響き渡る。フォウ様、とデカートが悲しげにつぶやき、目を伏せた。そのときだった。

「おいで！　ゾフィエル！」

不意に広場の敷石が白く輝き始めた。光は円形に大きく広がる。魔法陣だった。

「そんな馬鹿な!?　まさか、本当にフォウ様お一人で……」

デカートが目を見開いてフォウと魔法陣とを見比べている。驚くのも無理はなかった。

通常、天使の召喚はウタヒメと使徒とが二人で行う。ファイブがファヌエルを召喚したときがそうだった。ファイブのウタとディトの前口上とがあって魔法陣が展開し、天使が姿を現す。絶対というわけではないが、そのやり方が最も無難で安定する。

しかし、今、目の前ではフォウ単独での召喚が行われている。それまで幾度となく召喚の手助けを行ってきたデカートにとって、信じ難い光景に違いなかった。

やがて展開した魔法陣からさらに強い光が溢れ、ひとつの輪郭（りんかく）を結んでいく。地面からせり上がるようにして「天使」が姿を現す。

フォウが「ゾフィエル」と呼んだ天使は、ドラゴンだった。ミハイルより一回りも二回

りも、いや、それ以上に巨大な。
「あれは、もしやワン様の？」
信じられないというよりも混乱しきった様子でデカートが言った。ゾフィエルは、一年前の戦いでワンが召喚したドラゴンに酷似していたのである。ガブリエル、という名の巨大なドラゴンに。
教会都市でゼロが敗北したのはそのドラゴン、ガブリエルによるところが大きい。それほどまでに強力な攻撃力と、常識外れの防御力を備えていた。
一年前のあの日、ワンは周到に教会都市の守りを固めていた。多数の兵器や亜人部隊を投入して、まずミカエルをゼロから引き離した。その上で、四人の妹達にゼロを攻撃させた。そこまでなら、まだゼロにも勝機はあったかもしれない。だが、そこでワンはガブリエルを召喚した。
それでなくとも竜種は〝花〟の天敵であり、ウタウタイにとっての脅威である。しかも、魔法で強化されたドラゴンとなれば、ウタウタイ一人でどうこうできる敵ではなかった。ゼロは呆気なく敗れ、瀕死の重傷を負った。
ミカエルが最後の力を振り絞ってゼロを連れ出してくれなかったら、間違いなく死んでいただろう……。
「違う！　あれはガブリエルじゃない！　別の個体だ！」

見間違えたりしない。左腕を奪い、相棒を奪っていった敵の姿を。甲冑をまとったような外観と、聳え立つような巨体は同じだが、ゾフィエルはガブリエルではない。

「って、そんなのはどうでもいいんだ！　ディト！　デカート！　キミ達は下がっていろ！」

ゼロはミハイルの背に飛び乗った。騎乗するや否やミハイルが飛び立つ。説明は必要なかった。〝花〟の天敵たる竜種である以上、ここで何をすべきかわからないはずがない。どれほど幼くとも竜種は竜種である。

「なんでフォウが魔獣化したドラゴンを呼べるんだ？」

ミハイルの気を散らすつもりはなかったが、つい声に出してしまった。フォウが使徒の助けなしにドラゴンを呼んだという事実は、それほど驚きに値するし、何より事態の深刻さを示していた。

「フツーは呼べないモノなの？」

「普通は、な」

召喚して使役する天使が強大であればあるほど、それだけ強いウタノチカラを必要とする。呼んで呼べなくはないだろうが、自身の能力を超えたチカラを行使すれば、自我の崩壊を招く。

ワンならば、ドラゴンを使役するだけの強大な魔力も強靭な意志力もある。だが、フォ

ウにはそのどちらもない。いや、なかった。なのに今は、それが可能なだけのチカラがある。フォウの中の〝花〟が勢いを増している、ということだ。
「でも、ゼロはボクを呼べるよね？　ゼロはフツーじゃないの？」
「そうだな」
妹達にしても普通ではないが、その妹達を生み出したゼロはさらに普通からは程遠い。
「けど、キミは魔獣じゃない」
魔獣化したドラゴン、つまり天使はその強さと引き替えに自我を失っている。ガブリエルにしても、魔獣化する前は他の竜種と同じように人間の言葉を理解し、意志の疎通を図ることができた。だが、天使となった後、一切の会話は不可能となった。ガブリエルは言葉も話さず、喜怒哀楽もなく、ただ使い手であるワンの命令に従うだけのケダモノになり果てた。代わりに、それまでとは比べものにならない強さを身につけたとはいえ。
「ボク、マジューじゃないの？」
「いいから、目の前の敵に集中しろ！」
無駄口を叩きながら戦って敵う相手ではない。たったこれだけのやり取りの間にも、フォウの気違いじみた笑い声が迫っていた。そのすさまじい速度は、憎悪と狂気の塊が翼を生やして滑空しているかのようだ。
「ゼロ姉様！　だーい好きなゼロ姉様！　どんなふうに殺して欲しい？」

フォウの言葉が終わるか終わらないかのうちに、刃に似た何かが飛んでくる。ゾフィエルの攻撃だった。

「下へ避けろっ!」

ミハイルの急降下と同時に頭上で風が鳴った。まともに食らっていたら、腕の一本くらいでは済まなかったとわかる音だった。

「あーあ。残念。避けられちゃった」

逃げる鼠を追う猫のつもりでいるのか、言葉とは裏腹にフォウは頗る楽しげである。

「切り刻まれるのはキライ? そーなんだ。ふーん」

わざとらしくフォウが小首を傾げた直後、ゾフィエルがその巨体を大きく逸らすのが見えた。

「炎が来る!」

竜種が炎を吐く前に取る動作をゼロは熟知していた。無駄にミカエルと行動を共にしていたわけではない。

「横だ! 横へ逃げろ!」

炎が真横を走り抜けていった。出会ったその日、ミカエルの吐く炎から逃げ回った。間近に感じたあの炎を今も覚えている。罵り合って、喧嘩して、笑い合った、あの日々を覚えている。だから、わかった。ミカエルの炎と、目の前のドラゴンが吐く炎はまるで違う。

「焼かれるのもキライ？　ゼロ姉様ったら、ワガママばっかり。ワガママ言うのは悪い子なのよ。悪い子にはお仕置きしなきゃ」

きゃははは、と耳障り（みみざわ）な笑い声が響き渡った。その声に紛れるように、ゼロは小声でミハイルに指示を出す。

「あいつの真下に入れ」

えっ、とミハイルが訊（き）き返してくる。

「いいから」

戸惑っている様子がありありと伝わってきたが、それでもミハイルはゾフィエルの真下へと飛んだ。

「ゼロ姉様は、斬られるのがキライ。ゼロ姉様は、焼かれるのもキライ」

童歌（わらべうた）で遊ぶ子供のような身振り手振りをつけてはフォウが笑う。その合間に漏（も）れ伝わってくる思念は、言葉の形を為さないほどに混濁していて、しかもどす黒い。その真っ黒な悪意こそがフォウの真意、今のフォウそのものだった。

「だったら、こうしましょう？　ね？」

ゾフィエルの巨体がミハイルを押し潰そうと、まっすぐに降下してくる。

「すり抜けろ！」

ミハイルが急加速で前へと飛ぶ。ゾフィエルが地響きをたてて、広場の敷石に激突した。

なまじ重量があるせいで、すぐには飛び立てないのか、身体を地面にめり込ませたまま、もがいている。

「今だ！」

ミハイルが反転して炎を吐く。フォウが悲鳴を上げた。ゾフィエルがのたうち回る。思ったとおり、あのドラゴンはガブリエルほどには強くない。見かけ倒しだ。

生長した〝花〟によって底上げされているとはいえ、フォウ本来のチカラはワンに大きく劣る。辛うじてドラゴンを召喚したものの、「強いドラゴン」を召喚することはできなかった、ということだ。

「酷いわ、ゼロ姉様。斬られて焼かれて潰されるのはゼロ姉様のほうなのに！　私じゃなくて、ゼロ姉様なのに！」

広場の片隅から声がした。見れば、いつの間にかゾフィエルの背からフォウの姿が消えている。炎が迫る寸前、飛び降りたのだろう。竜の炎に直撃されればひとたまりもないが、高い場所から落ちたくらいでウタウタイは死なない。

とはいえ、炎でフォウを倒すのは無理だろうと思った。竜が炎を吐く動作はさほど速くない。見切るのも、躱すのも、決して難しくはないのである。他ならぬゼロ自身が知っていることだった。それに、小狡く用心深いフォウは逃げ足が速い。となれば、やはり自らの手でフォウを始末するしかない。

おい、とミハイルに声をかける。
「アイツはそんなに強くない。後はキミに任せる」
「えっ？　ボクだけ？　ボクがゾフィエルをやっつけるの？」
ミハイルが不安そうな声を出す。無理もない。同じ竜種、それも自分より巨大な個体と戦うのは、ミハイルは初めてなのだ。
「キミは強いドラゴンになりたいって言っただろう？」
「言った……けど」
「強いドラゴンっていうのは、何でも一人でできる子です。キミも戦艦を一人で沈めたよね？」
「うん。ボク、一人で戦艦を沈めたよ！　沈めたよ！」
「だったら、そんなに強くないドラゴンくらい、一人でやっつけられるよね？」
「う……うん。やってみる」
「よろしい」
幼いミハイルが魔獣化したドラゴンを倒せるかどうか。いや、倒せなかったとしても、時間稼ぎをしてくれればいい。フォウが死んでウタノチカラが消えれば、召喚された天使も消える。つまり、自分がさっさとフォウを始末すれば何の問題もない。
フォウに向かって飛び降りる。着地するなり斬りつける。

「どうしても私を殺すのね？」
ゼロの刃を掻い潜り、フォウが蹴りを放ってくる。
「殺したいんだ？　私を？」
跳んで避け、そのまま距離を取る。フォウの手数は一年前と変わっていない。格闘用の籠手による近接戦闘のみ。長剣の刃渡りだけ、ゼロに分がある。
斬り払う。フォウの籠手とゼロの剣とがぶつかり合い、甲高い音で鳴る。
「私はこんなにゼロ姉様を大切に思ってるのに。こんなにも！」
横合いから回し蹴りが飛んでくる。物騒な「大切」もあったもんだ、と内心で苦笑しながら避ける。
フォウの踵が行き場を無くして敷石にめり込んだ。粉々に砕けた石が礫になって飛び散る。すさまじい蹴りだった。ただ、威力こそ強力だが、一年前ほどの素速さはない。精神の均衡を完全に失っている今、闇雲に手足を振り回しているようなものだからだろう。
「憧れてたのよゼロ姉様になりたかったのよ強く美しくなりたかったのよ世界中の男がひれ伏す女になりたかったのよ世界中の女が羨む女になりたかったのよ世界中の女なんてみんな死ねばいいのよ私を見ない男なんて死ねばいいのよ全部死ねばいいのよ」
顔を醜く歪ませ、呪詛にも似た言葉を垂れ流しながら、フォウはそれでも笑い続けている。押し殺してきた劣等感と怨恨とをたっぷりと含んだ笑いだった。

これは私だ。私の中にあったモノなんだ……。
生前のゼロも、世界を憎み、呪い、妬んだ。目の前のフォウと同じように、醜い表情を浮べ、どす黒い色を瞳に宿していたに違いなかった。
まっすぐに剣を突き出す。もはや判断力の片鱗すら残っていないのか、フォウは全く避けようとしない。
剣が眉間に突き刺さる。そこで初めて何が起きたのかを理解したのだろう、フォウが目を見開いた。
目の前の羽虫を追い払おうとするかのように、両手を振り回した後、フォウが刃を素手で鷲掴みにした。握りしめた手の間から、血が流れ落ちる。それでもフォウは剣を掴んだまま放そうとはしない。何とかして引き抜こうと必死なのだろう。
「いや……いや……いやあああああああああっ！」
その場を転げ回りながら、フォウが絶叫している。眉間に剣が刺さった程度では、ウタウタイにとって致命傷とはなり得ない。止めを刺さなければ、と思ったときだった。咆哮を聞いた。聞いたこともない声だった。それがミハイルの発したものだと理解するまで時間を要した。思わず振り返る。ミハイルが翼を広げるのが見えた。
疾風が視界を奪った。吹き飛ばされそうになり、ゼロは必死で足を踏ん張った。肉と骨が砕ける音を聞いた。

「いったい、何が？」
目を開けると、フォウはいなくなっていた。剣の落ちる音がした。ミハイルの口許から敷石へと。今の今までフォウの眉間に突き刺さっていたゼロの剣、だ。
「フォウを……食った？　まさか!?」
ミハイルの双眸が爛々と光っている。咀嚼から嚥下に至ったことが喉の動きでわかった。
次の瞬間、ミハイルの身体が変化した。頭部が、角が、翼が、全身が成長していた。いや、変化や成長というよりも、進化と呼ぶにふさわしい。竜種として、より強靱な身体となったのだと一見してわかるほど、それは明らかな変貌だった。
竜種は〝花〟の天敵であると、ミカエルは言った。〝花〟を破壊できるのは竜種だけだと、アコールという女は言った。
「こういう意味だったのか……」
ミカエルはどこまで理解していたのだろう？　竜種が〝花〟を捕食することを知っていたのだろうか？
『約束しようぞ。おぬしが妹達を殺した後、我はおぬしを殺す。必ず最後まで見届ける』
すべてを知った上で、あの約束を交わしたのだろうか？　知っていたにも拘わらず、否、知っていたからこそ、なのだろうか？
唐突に、ミカエルの姿が瞼に浮かんだ。全身に矢を受け、傷だらけになって、それでも

ゼロを守ろうと広げた翼が。
あの日、ガブリエルの業火を受けたミカエルは、最後の力を振り絞って教会都市を飛び立った。瀕死のゼロを口に咥えて。
もういい、約束なんてどうでもいい、私を置いて逃げろ、とゼロは心の中で叫び続けた。だが、それは声にならず、ミカエルの耳には届かなかった。深手を負っていたために、ゼロは呻き声ひとつ立てることができなかったのだ。
人目に付かない入り江の奥で、ようやくミカエルはゼロを下ろし、『案ずるでない』と笑ってみせた。苦しげな息遣いを誤魔化そうとしていたのかもしれない。
『我は死なぬ……。必ず、見届けよう。おぬしとの……約束を……果た……す……』
そんなミカエルに、ゼロは何も告げることができなかった。謝罪も感謝も別れさえも。言葉の代わりに涙ばかりがぼろぼろと零れた。霞む視界の中、ミカエルがゆっくりと目を閉じるのを見たと思った。
そして、ミカエルは転生し、ミハイルとなった。ミカエルとしての意識が消える最期の瞬間に、彼は何を思っていたのか。それは永遠に解けない謎だ……。
「あれ？　ボク、何やってたんだろ？」
ミハイルの声でゼロは我に返った。その眼から異様な光が消えてしまうと、多少外観が変わってもいつものミハイルだった。きょとんとしているところを見ると、フォウを捕食

している間、意識がどこかへ飛んでいたらしい。
うわあっ、とミハイルが素っ頓狂な声で叫んだ。
「何これ!? 何これ!?」
自分の身体が変わってしまったことに驚いているのだ。フォウを捕食したことを覚えていないのなら、何がきっかけでそうなったのかを理解できるはずがなかった。だが、そのほうがいい。
「大丈夫だ。心配するな」
「でも……」
不安そうなミハイルに、ゼロはうなずいてみせる。
「いいんだ。竜種はそれでいい」
竜種が捕食という形で〝花〟を駆除できるのなら、同時にそれが竜の能力を高める糧となるのなら、願ったり叶ったりというものだ。
ファイブを殺した際にミハイルは捕食行動に出なかったが、それはおそらく〝花〟のチカラの差なのだろう。ファイブの言動はまだ正常だった。フォウははっきりと狂気に陥っていた。ということは、〝花〟のチカラが一定以上の強さに達すると、竜種は本能的に捕食に走るのではないか？
そうであればいいと思う。本能のままに捕食できるなら、ミハイルを無駄に苦しめずに

済む。私を殺せ、という残酷な依頼をすることなく、すべてを終わらせられる……。
「あと三人、だな」
自分を入れれば四人、とゼロは心の中で指を折る。道はまだ遠い。

〈6〉

声が聞こえた。最初は誰の声なのか、わからなかった。何も思い出せなかった。ただ、心地よい声だった。うれしくて、なつかしくて、悲しくなった。
もっと聞きたいと思った。その声の主に会いたいと思った。もう一度、と強く願った瞬間、意識が浮上した。深い海の底から引きずり出されるように、明るくなった。
トウ、と呼ばれて、それが自分の名であることを思い出した。そして、自分以上に大切な名を思い出した。
「セン……ト……？」
ああ、セントだ。わたしの大切な大切なひと。なぜ、セントは涙を流しているんだろう？　なぜ、涙を流しているのに笑っているんだろう？
「トウ様！　ああ！」
きつく抱きしめられて、記憶が奔流のように蘇った。そうだった、とトウは声に出さず

につぶやいた。
使徒であり、恋人であるセントと暮らした日々。親を亡くした子供達を引き取って、家族のように世話をした。貧しくとも心優しい砂の国の人々と、命に代えてもウタヒメを守ると誓ってくれた頼もしい兵士達と。怖いほどに幸せだった、あの頃。
「……様って呼ぶ…の……禁止」
はい、はい、とセントが泣きながらうなずいている。よほど長い間、自分は眠り続けていたのだろうとトウは思った。或いは、正気を失っていたか。いずれにしても、セントはもう二度とトウが元に戻らないと絶望していたに違いない。あれほどの悲劇に見舞われた後では。
どれくらい前になるのだろう。自国の兵士達を強化するために、ウタノチカラを使わせてほしいとセントが言い出したのは。子供達の病気や怪我の治療にもウタノチカラは応用できる、と言ったのは。
何もかも、トウのためだった。兵士達を強化したのはトウを守るため。子供達の治療をしたのも、夜も寝ずに看護を続けるトウの負担を軽くするため。
けれども、その兵士達と子供達は一人残らずバケモノになってしまった。ウタノチカラに冒されて。
自分のせいで、自分自身のチカラのせいで、愛する人々が人間でなくなった。その衝撃

でトウの心は粉々に砕けた。……と、セントは誤解したのだろう。それは半分正解で、半分不正解だ。

粉々に砕けたわけじゃない、とトウは胸の内でつぶやく。こうして戻ってくることができたのだから。ほんの束の間ではあるけれども。

「ありがと……。セントの…おかげ」

セントがずっと呼び続けてくれたから。微かな音も光も何もない真っ暗闇の中、大好きなセントの声が聞こえたから。

「何か食べる物をお持ちしましょう。いや、先に飲み物を」

「ううん。もう、時間が……ない」

立ち上がりかけるセントの手を握る。

「話…聞い…て……」

うまく言葉が出ないのがもどかしい。

「セントの…せいじゃ、ない……の。わたし、ずっと言え…なかった」

「トウ？」

「わたし、自分の……チカラと、戦ってた……。苦しかった……ずっと。呑み込まれ…そうで……」

最初は正しいチカラだと信じて疑わなかった。自分に強大なチカラが与えられたのは、

この世界に平和をもたらすため。愛する人々を守るためのチカラが悪いモノであるはずがない、と。

いつの頃からか、チカラは急速に増大した。制御するのが困難になるほどに。それでも、必死で抑えつけた。

これは悪いモノなんかじゃない、きっと心が弱いせいでうまく使えてないだけだ、と自分に言い聞かせた。もっと心を強く持てば、制御できるようになる。それに、自分がチカラに呑み込まれてしまったら、セントは、子供達は、砂の国の人々は、どうなる？

世界中の人々が笑顔になって、愛する人々がみんな幸せになれば、自分の役目は終わる。せめてそれまで持ちこたえなければと、必死だった。

だから、あの日。バケモノになった兵士達と子供達を自らの手で殺した瞬間、トウは持ちこたえていられなくなった。真っ黒いチカラに呑み込まれるに任せた。呑み込まれて、二度と戻ってこられないはずだった。

でも、セントがいたから。セントがわたしを呼び続けてくれたから。もう一度だけ、セントに会いたかったから。

あの日以来、食を断っていたせいで、身体が限界まで衰弱した。その結果、トウの内にあったチカラも弱まったのだろう。それで、セントの声が聞こえた。セントの声を聞いた瞬間、思い出した。自分が命に代えても守りたかった人々のことを。

「このチカラ…は、あってはならない……モノ」
今しかない。身体も、チカラも、共に弱りきっている今しか。
「わたしが死ねば、チカラも……消える。だから」
「いけません！　トウ様！」
ごめんね、セント。悲しませて、苦しませて、ごめんね。でも、セントには生きていてほしいから。
「これ…は……ウタヒメの……命令」
「トウ！　だめだ！　それだけは！」
「みんなを、守って。わたしの…代わりに……」
もう時間がない。早く。急がなければ。わたしが、わたしでいられるうちに。
トウ、と呼ぶ声が遠い。でも、負けない。セントとみんなを守る。
「それから……。セントは死んじゃ、ダメ」
「こっちは……カノジョからの……お願い、だよ」
大好きだよ、セント。わたし、あなたに会えてよかった。もう一度、会えてよかった。
自分を呑み込もうとするチカラに抗い、塗りつぶされていく意識を引き留めながら、トウは精一杯の笑顔を作った。

DRAG-ON DRAGOON3
STORY SIDE

# 参

## 【使徒の章】



## 〈1〉

古来より森には魔が棲むむ。故に人は住まうべきではないと、そんなことが書かれた本を思い出した。

書名は忘れてしまったが、読んだのはさほど昔のことではない。ワンが四人の妹達を率いて各国の領主を倒し、教会都市に凱旋した後だから、せいぜい一年と少し前といったところである。

書物に倣ったわけでもないだろうが、国土の大半が鬱蒼と茂った樹木に覆われているこの森の国では、人外の者が住民の大多数を占めている。妖精、エルフ、そして数多の魔物達。人間の集落があるのは、広大な森のほんのとば口に過ぎない場所だった。

「姉さん、まだ奥に行くの？」

傍らを歩いていた弟の声が不安そうに揺れている。集落のあった場所からずいぶんと離れてしまったからだろう。警護の者も付けずに二人きりだからという理由ではない。行き先がどこであっても、弟がいるときには他の者の同行を許さなかった。

ワンは弟の存在を周囲の者達には秘密にしていた。妹達にも教えていない。弟を造ったのは、ゼロを確実に仕留めるための切り札とするためである。誰かに知られてしまったら、切り札は切り札でなくなってしまう。

「ねえ、もう帰ろうよ」
臆病で、消極的で、依存心が強くて。弟の言動はあまりにもワンとはかけ離れていた。外見のほうは鏡に映したようにそっくりでありながら。自分自身から造ったものなのに と、ワンは常々不思議でならなかった。
「心配しなくていい。何も怖いことはないから」
「でも。この森、何だか変だよ」
弟の足が止まった。怯えきった様子で弟は周囲を見回している。
「そう……思うか？」
弟がこくりとうなずいた。ということは、自分一人の思い過ごしではない。さっきから感じていた、この得体の知れない気配は。
「そうだな。あと少しだけ調べたら帰ろう」
「ほんとに？」
「ああ」
あと少し、というのが「スリイを見つけるまで」だということは敢えて伏せた。そもそも、今回の探索が何を目的としているのか、弟には説明していない。
このところ、森にまつわる異変がたびたび報告されていた。森に生息していない種類の魔物や獣が出没するようになっただの、集落で行方不明者が相次いでいるだの、妖精族が

森から消えただの……。
　決定的だったのが、「何者かが森に毒を撒いた」という噂だった。噂とはいえ、森を脱出するエルフの船団が目撃されていることから、信憑性は高い。
　エルフ族の生活圏を脅かしたとなると、もはや一刻の猶予もならない。毒を撒いた犯人が人間であると判明すれば、エルフ達は間違いなく報復してくる。そうなる前に手を打つ必要があった。
　犯人が何者なのか、エルフ達にも、他の誰にも知られるわけにはいかない。なぜなら。
「スリイ……」
　森の国の統治者であり、世界に調和と秩序をもたらすウタヒメの一人。それこそが、森に毒を撒いた犯人に違いないのだから。
　よもやスリイがこれほど深刻な事態を引き起こそうとは。森の国の統治を任せたのは失敗だったと、ワンは苦い後悔と共に思い出す。スリイの「危険な傾向」には前々から気づいていた。
　それでも、人口の少ない森の国ならば、人と関わる機会も少ないはず、多少の間違いはあっても大事には至るまいと踏んだのだが甘かった。ウタヒメに憧れた民や兵士達のほうからスリイに近づいてしまうとは、想定外だった。
　責任は自分にある。だからこそ、この手で断罪しなければならない……。

「姉さん？　姉さんってば。聞いてるの？」
弟の声でワンは物思いから覚めた。
「すまない。考え事をしていた。どうした？」
「空が変な色をしてる」
弟が生い茂った枝の間から覗く空を指さした。言われるまでもなく気づいていた。黄色みを帯びた、妙にくすんだ色の空に。異変の発生源に着実に近づいている証だった。
弟は気づいていないが、異変の証は空の色だけではない。集落を離れた直後から、鳥や獣が姿を消している。人並み外れた聴覚を持つワンにはわかっていた。獣達の駆け回る音や鳥の囀り、羽ばたきが全く聞こえてこない。本来ならば、集落を離れれば離れるほど鳥や獣は我が物顔に活動をするものなのだ。にも拘わらず、森に彼らがいない理由は……。
「あんな色の空なんて、おかしいよ。もう引き返したほうがいいよ」
「別におかしくはない。この季節には比較的よくある現象だ」
ワンは嘘をついた。普段、弟は人目に付かないように塔の一室に引きこもっている。こうしてワンが連れ出す機会は決して多くはないから、外のことをあまり知らない。
「そうなの？　空って、あんな色になることがあるんだ……」
ワンの言葉を弟が疑うことはない。その様子を見ると良心が痛んだが、仕方がなかった。
異変の発生源が近いということは、スリイの居場所が近いということだ。ここで引き返す

わけにはいかない。
森の毒を除去するには、毒の正体を知る必要がある。どんな種類の毒をどうやって撒いたのか？　知っているのはそれを実行した犯人だけだ。
スリイを捕まえて、毒についての情報を吐かせたら、その後は……この手で処罰しなければならない。
処罰？　そんな生やさしい言い方はそぐわない。殺す、のだ。血を分けた妹を、自らの手で。
皮肉な話だ。妹達を殺そうとしたという理由で、姉のゼロと戦った。その自分が今、ゼロと同じ行為に手を染めようとしている。いや、違う。断じて違う、とワンは自分に言い聞かせる。ウタウタイのチカラを独り占めしようとしたゼロと自分は違う。
これまでにも幾度となく、スリイには警告してきた。それでも止められなかった。もはや、その命を絶つしか止める手立ては残されていないのだ。決して己に利するためではない。ゼロと違って。
ふと疑問が兆した。本当にゼロとは違うと言い切れるだろうか？　もしも、ゼロが目的を偽っているとしたら？　チカラを独占するためなどではなく、何か別の目的で、それも全く利己的ではない目的で、ゼロが動いているとしたら？　ゼロが本当のことを言っている証拠などどこにもないのに、なぜ、自分は彼女の言動を額面どおりに受け取ってしまっ

たのだろう？　もしも、最初の前提からして間違っていたとしたら……。
馬鹿げた妄想だ。浮かび上がる疑念を振り払う。今、考えるべきなのはゼロではなく、スリイ。そして、目の前の危機。
まさしく危機だ。先刻から異臭を感じていた。正確には「臭い」ではなく「気配」に近い。これまでに嗅いだことのない「何か」が森の奥から漂ってきている。
「姉さん、これって何の臭い？　さっきから、ずっと……」
「わかるのか!?」
いつになく大声を出してしまったのは、この微かな「何か」を弟も察知していたからである。だとすれば、これは「臭い」ではない。弟の嗅覚は並の人間と変わらないはずだ。
いったいこれは何なのだろう？　魔物の気配でもなく、魔法による効果でもない。ウタノチカラでもない。ごく当たり前の五感しか持たない弟でも感知可能な異変の正体は。
用心深く周囲を見回したときだった。木の根元に誰かが倒れているのが目に入った。急いで駆け寄り、抱き起こす。幼い子供を連れた女だ。しっかりと腕に抱き抱えているのは、我が子を守ろうとしてのことだろう。
弟がこわごわ覗き込んでくる。
「死んでる……？」
「いや。二人ともまだ息がある。急いで森から連れ出して手当てをすれば」

「助かる？」
「ああ」
こんな森の奥になぜという疑問はすぐに霧消した。女の手足には縄の跡があった。無理矢理に外したらしく、ひどい擦り傷になっている。子供のほうはまだ腕に縄が掛けられたままである。ということは、この親子はどこかで拘禁されていたのだ。
「これもスリイの仕業か」
住民が相次いで行方不明になっている、という噂を聞きつけて調べてみれば、犯人はスリイだった。スリイは自国の民を手当たり次第に拉致しては、人体改造を施していたのである。
スリイは人形遊びが好きだった。ただ、普通の人形ではない。砂の国の元領主が作った人形、人間の皮膚や骨を材料としたそれと出会ってしまったことが、スリイに道を踏み外させた。
最初は、墓場を掘り起こして死体を手に入れ、それを材料に人形を作っていたらしい。やがて「より新鮮な材料」を求めて、スリイは戦場に赴くようになった。戦死した者達の身体を材料にするためである。
それにも飽き足らなくなったスリイは、ついに生きた人間に手を出した。単に人間の身体を使うだけでなく、魔物と掛け合わせることを覚えた。そうやって作り出したモノは、

もはや「人形」の範疇を超え、異形のバケモノと化していた。
初めてその事実を知ったときはまだ、血を分けた妹をどうしても殺せなくて、きつく叱るに止めた。バケモノ達をスリイ自身に処分させ、二度と人形を作らないと約束させた。約束させたつもりだった。
わかっていたはずだ。約束など気休めに過ぎないことくらい。事実、その後も住民達は拉致され続けた。
今、森からは人間は言うに及ばず、鳥や獣の気配すら途絶えている。スリイはいったい何をしでかしたのだろう?
「姉さん、僕、何だか……気持ち悪い」
見れば、弟の顔色が白い。額には脂汗と思しき粒が浮かんでいる。
「息を止めろ！　これ以上、吸い込むな！」
臭いとも気配ともつかない「何か」が有害であろうこと、もっと言ってしまえば何者かが森に撒いた「毒」がこれだろうと、見当は付いていた。ただ、ワン自身はウタウタイである。たかが毒で死ぬとは考えられないから、スリイの追跡を最優先にした。まさか、自分の分身である弟がこれほど毒に弱いとは思わなかった。
いや、自分自身がすでにゼロの紛い物である。弟は、その紛い物から造った紛い物なのだ。単なる人間よりは頑丈にできているかもしれないが、ウタウタイと同等の強さを期待

するのは間違っていた。
それに、今は瀕死の親子がいる。スリイの追跡よりも、この二人の救命が優先だった。
「ガブリエル！」
ドラゴンを呼び寄せ、ぐったりとして動かない母親を担ぎ上げる。子供のほうは弟に背負わせた。飛来したガブリエルの背に乗り、上空へと逃れた。
「あれって何だったの？」
肩で息をしながら、弟が遠ざかる森を振り返っている。上空から見ただけでは何が起きているのか、全くわからない。
「何かの毒……なんだろうな」
ワン自身もひどく気分が悪かった。人間離れした強靭さを持つウタウタイであっても、目眩や耳鳴り、吐き気といった不調は現れる。さらに長い時間、毒を吸い続けていれば身動きができなくなるくらいに衰弱することもあるかもしれない。
「毒を吐く魔物でもいたのかな？」
「いや、違う」
魔物が吐く息に含まれている毒や、体内に持つ毒には特定の性質があるし、種類もそれほど多くはない。だから、森の毒霧は違うとすぐにわかった。
「じゃあ、毒草がたくさん生えたせい？」

「それも違うな」
自然に繁殖している植物の毒は、あんな形で発現したりしない。毒草を摘み取って火にくべたり、水に溶かしたりして毒霧を作ったのかもしれないが、それは何者かの手が加わって初めて可能になることで、「毒草がたくさん生えたせい」ではない。
「うーん。じゃあ、なんだろ？　あ、もしかして、あれかな？　ほら、姉さんがこないだ教えてくれた……。ええと、火の山は岩の割れ目から毒を噴くって」
火山のことだ。弟が退屈しのぎに読んでいた本に「火の山」、つまり火山に関する記述が出てきた。それで噴火や溶岩について話してやったことがあった。
「違うような気がするな。火の山の毒霧は、鼻の中に突き刺さるような強い臭いがすると聞いている。さっきの毒に臭いはあったが、そこまで強くはなかった。それに、厳密に言えばあれは、臭いとも違う」
「どういうこと？」
「臭いのように感じられる気配、かな」
いずれにしても、スリイ本人に問い質さない限り、毒の正体はわからないだろう。
「毒の話はここまでだ。今はそれより、森の国の民を安全な場所に移さないと」
急ぎ教会都市に戻って、救援隊を派遣しなければ。毒霧が広がれば、集落にいる住民達も危ない。彼らの避難先は砂の国、いや、山の国のほうが良いか。

この世界を守り、妹を追跡して断罪し、裏切り者の姉と戦う。それだけではない。海の国でファイブが殺されたという報せが入っている。こちらも早急に手を打たねばならない。そういえば、フォウと連絡が取れなくなっている……。

この先、為すべきことの多さと重さを思うと、目眩がしそうだった。

〈2〉

フォウがミハイルに捕食された後、デカートはその場を動こうとしなかった。

「どうか、私も殺してください。主たるフォウ様がお亡くなりになった今、私の役目はもう……」

「終わってない」

デカートの言葉をゼロは強く遮った。両膝をついて背中を丸めていたデカートが、戸惑ったように顔を上げる。

「キミにはまだ利用価値があるからな」

本来ならば、もっと早くに終わらせていたはずだった。妹達を殺し損ねていなければ、ずっと以前に使徒達は解放されていた。そうならなかったのは、偏に自分の落ち度と力不足だ。

ここにもまた、自分の蒔いた種がある……。

それを思えば、主を失った使徒達は自分が連れて行くべきだろう。どこで彼らを解放するか、という問題は残るが、それはおいおい考えればいい。少なくとも、ここで放り出すよりはお互いのためになる。

「ですが、私には何の価値も……」

「あるでしょ？」

横合いからディトが口を挟んでくる。

「夜の相手とか。できないはずないよね？　使徒なんだから。ああ、そうだ。ゼロの機嫌が悪いとき、八つ当たりされるってのも、オッサンには適任かな。ボッコボコに殴られて蹴られて、みたいな？」

「そっ、そんな……っ。殴られて蹴られて……ううっ」

「ねえねえ。自分のウタヒメを殺された挙げ句、下僕にされるって、どんな気分？」

ディトが楽しくてたまらないという様子で、デカートの顔を覗き込んだ。これが他の者ならば、傷口に塩を擦り付けられるに等しい言葉だろう。しかし。

「股間膨らませて深刻な顔されても、ねぇ？」

「うぅぅ」

「だから、うれしそうな顔してんじゃねーよ！」

この二人なら、かなりうまくやれるに違いない。デカートを同行させることに問題はない、ということだ。
「じゃあ、さっそく案内してもらおうか。森の国へ。あるんだろう？　安全かつ迅速に行ける抜け道、みたいなヤツが」
「ああっ！　主たるフォウ様に殉じることを禁じられたばかりか、なんという無慈悲なご命令！　なんという……なんという…………ご案内いたします」
　これでも、デカートはデカートなりに主の死を悼んでいるのだろうな、と額ずく姿を見ながら思う。
　ただ。その心の痛みさえも彼には甘美に感じられてしまうだけで。

　隧道を抜けると、灼熱の砂漠だった。
「で、これのどこが抜け道？」
　山の砦を下り、デカートの先導で地下に掘られた隠し通路と思しき場所へ入り込んだまでは良かった。まさか、その先が砂漠に通じていようとは。
「だいたい行き先って森の国じゃなかった？　ゼロ、そう言ってたよね？」
「ああ、言った」
「でもこれ、どこからどう見ても砂の国なんだけど？」

「全くだ。私にも砂の国に見える」

不機嫌なゼロとディトとは対照的に、ミハイルは大喜びで砂の中を転げ回っている。泥遊びに水遊びが好きとくれば、砂遊びだけが例外であるはずがなかった。ミハイルが歓声を上げて翼をばたつかせるたびに、大量の砂がゼロ達の頭上に降り注ぐ。不愉快なことこの上ない。

「こらあっ！　クソドラゴン！　いい加減にしろっ！」

たまりかねて怒鳴ると、ミハイルがそのままの姿勢で凍り付いた。以前ならば、驚いて失禁していたところだろうが、さすがにそれはなかった。人間でも竜種でも、子供は日々成長する。

「ゼロ様、どうかお鎮まりを。この道はですね……」

「鎮まれ、だと？　このクソ暑くて砂だらけでクソ暑くてクソ暑くてクソ暑い中をか!?ああ？」

照りつける日射しと頭から浴びた砂のせいで、ゼロの機嫌は極限まで悪化していた。

「お、お言葉ですが、これが森の国へ至る近道なのです。安全で迅速な経路を、とのご命令でしたから」

山の国から森の国へとまっすぐに向かおうとしても、高い山がそれを阻んでいるため、どうしても迂回しなければならないらしい。しかも、森の国との国境付近には、フォウが

多数の兵を配置していた。森を棲み処とする人外の者達の進入を防ぐ目的だという。たとえ距離的に近くとも、そんな場所へ突っ込むのは自殺行為であり、「安全な経路」とは言えない、というわけだ。

「逆に、我が国と砂の国との国境には、ほとんど兵を割いておりません。砂の国からの侵攻など、まず考えられませんから」

また、砂の国の国境は森の国側へと大きく張り出しているため、実際にはたいして遠回りにはならないのだと、デカートは説明した。

「仰るとおり、暑さだけは如何ともし難いものではありますが。しかしながら、この灼け付くような暑さと、ちくちくと肌を刺す砂粒こそがむしろ最高のプレイ……」

「それ以上言ったら殺す」

ディトと同じく、一睨みでデカートもおとなしくなった。ただ、ディトとは異なり、何やら物足りないといった表情が浮かんでいる。睨むだけでなく、もっと罵倒して欲しいらしい。

「キミのプレイとやらに付き合う気はないからな」

それだけ言い捨てて、大股に歩き出す。背後でぼそりと「放置……プレイ」と声がした。

デカートの言葉どおり、砂漠の端を森に向かって南下するのは、暑さを除けば安全かつ

迅速な経路と言えた。途中には休息をとるオアシスもあり、野営に適した遺跡もあった。
砂地に生息する魔物に出くわした他は、軍隊にも亜人部隊にも遭遇することはなかった。兵士ばかりか、旅人や商人も見かけない。山の国と森の国に挟まれている一帯は、砂の国でも辺境に当たる。ウタヒメの守る神殿からも遠い。故に人の往来も乏しいのだろう。
誰にも出会わないまま、そろそろ砂漠を抜けるという頃だった。偶然なのか、必然なのか、その人物との邂逅が待ち受けていたのは。
ずっと自分達以外の誰かを見かけることがなかったから、最初は目の錯覚だろうと思った。陽炎のせいで他の何かが人影に見えているのだろう、と解釈した。
そんなふうに考えたのは、ゼロだけではなかったらしく、ディトもデカートもその人影を見ても何も言わなかった。ただ、ミハイルは違った。
「ねえねえ！　誰かいるよ！　誰かいるよ！」
「気のせいじゃなかったのか……」
ミハイルが騒がなかったら、三人が三人とも「気のせい」で片付けていたに違いない。他の二人が何も言わないのだから、と。幼い子供の言葉は時に真実を言い当てる。おとぎ話でも、現実でも。
「人には見えないって。あの歩き方じゃ」
ディトが肩をすくめる。確かに、歩くというよりも漂うといったほうが近い。そんな身

体の揺れ方だった。おまけに頭を覆っている黒髪のせいでますます影のように見えてしまったのだ。
「あれは……」
ゼロは目を凝らした。右に左にと揺れながら、ふらふら歩いている人影に、どこか見覚えがあるような気がした。
「おい！　そこのキミ！」
うつむき加減だった男が顔を上げる。やつれてはいるが、整った目鼻立ち。「砂漠のバカップルの片割れがなんで？」とディトが不思議そうにつぶやく。ということは、間違いない。
「トウの使徒だろう？」
男がゆっくりと近づいてくる。妙な揺れ方をしていたのは、足許が覚束ないせいらしい。ひどく衰弱していることは、間近に見てわかった。長いこと砂漠をさまよっていたのかもしれない。
「トウはどうした？」
「それはヒミツですぅぅぅぅ」
巫山戯た物言いだったが、腹は立たなかった。トウと離れて、かなりの時間が経過しているのはその気配で明らかだった。そして、ディトの「砂漠のバカップル」という言葉。自分とは凡そ正反対のトウの性格。何が起きたのか、推測するのはさほど難しくなかった。

ディト達には聞こえないように、相手の耳許でそっとささやく。
「……後を追おうとは思わなかったのか？」
ほんの一瞬だけ、黒い瞳に狼狽の色が走った。が、すぐにそれは消え去り、道化じみた色だけが残った。
「はあぁぁぁ？　何のことやら。何せ私は大馬鹿者ですからぁぁぁぁ」
「そうか……」
やはり、トウは死んだのだ。おそらく、自死だろう。
自然死はあり得ないし、トウの強さであれば殺害されたとも考えにくい。ゼロは自害に失敗したが、妹達は〝花〟の苗床としては不完全である。〝花〟に支配される前ならば、そして条件がうまく揃えば、自ら死を選ぶことも不可能ではないはずだ。
「キミ、名前は？」
「セントと申しますぅぅぅ」
ゼロが知っているのは使徒の姿形だけである。使徒の名前も性格も、また主との関係まではわからない。だが、その言動から推し量れることもある。
「どうする？　私と共に来るか？　それとも、トウの使徒のままでいるか？」
共に来いという命令ではなく、問いの形にしたのは、このまま放置してやったほうがいいのではないかと思ったからだ。その言葉とは裏腹に、セントはトウに殉じたがっている

ように見える。しかし、セントは首を横に振った。
「ウタヒメならば、誰でも構いません。ええ。私は大馬鹿者ですから」
投げ遣りな言い方だったが、それでいてどこか寂しげな響きを感じた。わかった、とゼロはうなずく。
「というわけで、この素晴らしい魅力を持った私セントが、次に仕えるのはゼロ様ということですねぇぇぇ」
うって変わって、大仰な仕種でセントが頭を下げる。うつむいた顔に果たしてどんな表情が浮かんでいるのか。
「うわ。自分で素晴らしいとか言っちゃってるよ。ゼロ、ほんとにこんなバカを仲間にするわけ？」
トウの後を追わないとセントが決めたのならば、連れて行くだけだ。使徒はウタヒメから離れて存在することは、決してできないのだから。

〈3〉

セントが合流した直後に砂漠を抜けて、国境を越えた。砂混じりの乾いた道が湿った土に変わると、ディトがやれやれと息を吐いた。

「やっと砂漠終わった？　今度こそ森の国だよね？　オッサンが言うほど近道でも何でもなかったじゃん。てか、たいした遠回りにならないって、あれ絶対ウソだろ。もううんざりだ。靴の中も服の中も、髪の中まで砂でじゃりじゃりだしさ」

　砂漠を歩く間、意外に不平不満が少ないと思っていたが、暑さのせいで口を開くのも億劫(おっくう)だっただけらしい。暑さが和らぐなり、ディトの言葉数は一気に増えた。

　すると、それを待っていたかのように、セントが口を開く。ひどく芝居じみた仕種で前髪を掻き上げながら。

「いるんですよねぇぇぇ。自分の能力の無さを環境や状況のせいにするヒトってぇぇぇ」

　ディトの眉がきりきりと吊り上がった。

「殺す！　このバカ、絶対殺す！」

　合流直後からディトはセントに対して臨戦態勢だった。相手を小馬鹿にするような、語尾を妙に伸ばした喋り方は、ディトならずとも神経を逆撫でされる。穏和なデカートでさえ、むっと押し黙ることが多々あったほどだった。

　トウの側にいた頃は、もう少しまともな喋(しゃべ)り方をしていたに違いないのだが、今のセントからそれを推し量るのは不可能に近い。それほどまでに、セントにとってトウを亡くした喪失感が大きかったということだろうか。

「すみませぇぇぇん。私の鋭すぎる言動が愚者共のぉぉ、いや、皆さんの痛いところを突

きまくってしまうんですよねぇぇぇ」
しかし、理由はどうあれ、苛つくものは苛つく。
「少し黙ってろ」
ぴしゃりと言い放って、ゼロはデカートに向き直った。
「で、ここから先の道は？」
申し訳ございません、とデカートがその場にひれ伏す。
「私にご案内できるのはここまでなのです」
「まあ、そうだろうな。それと、いちいち土下座しなくていいから」
本人は楽しんでやっているに違いないが、見ている側としては鬱陶しいだけだ。
「森の中の道となると、私では不案内なものですから。ただ……」
「ただ？」
「い、いいえ。確信があるわけではないのですが、以前とは森の様子が異なっているような。フォウ様と共に森の国をお訪ねしたのは一年以上前のことですから、私の記憶違いかもしれませんが」
デカートの話によれば、フォウはワンに命じられて、森の国の様子を報告したことがあったという。要するにスリイのお目付け役だ。変わり者のスリイを統治者に据えるのは、ワンとしても不安だったのだろう。

「ねえねえ。あの森の奥に、スリイさんがいるの？」
楽しげに足踏みをし、尾をぶんぶんと振りながらミハイルが口を挟んでくる。砂遊びに未練たらたらかと思いきや、彼の興味はすでに森に移っているらしい。
「だと思うが。ずいぶんとうれしそうだな」
「だって、ゼロの妹さんと会えるんだもん。楽しみだなあ。楽しみだなあ」
「殺し合いもできるよ。ああ、楽しみだなあ。楽しみだなあ」
口真似をしてみせると、ミハイルは困ったように言葉を詰まらせた。だが、それだけだった。以前とは異なり、「きょうだい殺し反対」とは言わなかった。
世の中が正論ばかりで動いているわけではないと学習したのか、或いはゼロに何を言っても無駄だと悟ったのか。その両方かもしれない。
「ゼロはさあ、昔っから妹達と険悪だったわけ？」
ふと思いついた様子でディトが尋ねてくる。
「肉豚女は生まれたときからバカで下品で強欲だっただろうから、険悪だったとしても納得だけど。スリイとかは、小さい頃、どんな子供だった？　殺したくなるようなクソガキだった？」
ディトはミハイルとは別方向で興味津々らしい。ゼロを見上げる目が期待の二文字で輝いている。瞬時にその期待が裏切られるとも知らずに。

「さあ。知らないな」
「何それ？　実の姉が知らないとか言う？　ちょっと今、スリイが不憫になったよ」
知らないものは知らない。幼女だった姿なら見ているが、言葉を交わすことすらなく逃げられてしまったから、どんな子供だったのかという問いには答えようがなかった。
その辺の事情をディトは知らないから、実の妹に対して無関心な姉の言葉と受け取ったのだろう。
そして、ディトは自分自身にも「小さい頃」がなかったことを知らない……。
「お喋りはここまでだな。敵のお出ましだ」
森の中から兵士達が走ってくるのが見える。だが、どうもおかしい。遠目に見ても不自然とわかる走り方をしている。なぜだろう、と思った直後に答えがわかった。風に乗って腐臭が漂ってきたのである。
「ゼロ！　見てよ！　アイツら！　体の中から蛆が湧いてる！」
武装して剣を振り上げている兵士達は、屍だった。すでに全身が腐乱しきっている。奇妙な走り方をしていたのはそのせいだった。肉が腐り落ちているせいで、手も足もうまく持ち上がっていないのだ。なのに、本人達は生前と同じように身体を動かしているつもりなのだろう。
「ぐっちょぐちょに腐ってるとか、最高だよね！」

最高じゃなくて最悪だろう、と訂正したいところだが、ディトの趣味に照らせば「最高」は強ち間違いではない。先陣を切って屍の兵士に向かっていくディトの様子は、今にも踊り出しそうである。

「ほらほらほら！　腸がドロッドロに溶けてるよ！　きったねー！」

斬られたところで痛みなど感じないのだろう、屍の兵士達は、ぱっくりと開いた傷口から腐った肉と臓物を撒き散らしながら、それでもゼロ達に向かってくる。

吐き気を催す、という言い方では到底間に合わないほどの光景だった。何より悪臭がすさまじい。苦痛がご褒美のはずのデカートでさえ顔を蒼白にしていたし、鬱陶しいほどお喋りなセントも言葉少なになっている。

そんな中で、ディト一人だけが楽しげに剣を振り回していた。とはいえ、生きた兵士と違って、斬れば終わりというわけではない。すでに死んでいる彼らの動きは、その身体を跡形なく破壊するまで止むことがないのである。つまり、きりがない、ということだ。

「クソドラゴン！　こいつらをまとめて焼き払え！」

楽しみを邪魔するなと言わんばかりの顔でディトが振り返ったが、ゼロは無視を決め込んだ。こんな場所で時間を無駄遣いするわけにはいかない。

不満そうな顔でディトが屍達から距離を取ると、ミハイルの炎が辺りを舐め尽くし、屍の群れを一掃した。正直なところ、森に入る前で助かった。そう考えたところで、何やら

いやな予感がした。
逆に言えば、炎攻撃が使えない狭い場所や森の中で、屍共に囲まれたら厄介なことになるのではないか……。
ゼロの危惧は不幸にも的中した。森の中には、屍の兵士達が至る所で徘徊していた。兵士だけではない。魔物の屍もいた。オーガやギガースといった大型の魔物が屍となって襲ってくる。それでなくても大型の魔物は頑丈で、倒すのに時間がかかる。それが屍となれば、通常の手順では倒せない。厄介どころではなかった。
「ああもうキリがない！　面倒くさい！　鬱陶しい！」
ディトが楽しげに剣を振り回しているのが余計に苛立たしい。
「私はご覧のとおり、非常に恵まれた肉体と非常に麗しい顔面を持っておりますからぁぁぁ、本当はこんな敵、一瞬で倒せますけどぉぉぉ」
「じゃあ、やれよ！」
「やりませんけどねぇぇ。今はぁぁ」
「てか、顔面は関係ないだろ！」
セントの語尾を伸ばした喋り方が更に苛立たしい。
「ゼロ様、どうぞお鎮まりを……」
「うるさいっ！」

デカートのおどおどした物言いがますます苛立たしい。
「おい！　クソドラゴン！　キミは空からスリイを探せ！　今すぐ探せ！　一刻も早く探せ！」
「でも、ボク、スリイさんの顔、知らないよ？」
「ドラゴンなら、ウタウタイの気配くらいわかるだろッ！　さっさと行けッ！」
「わかったよ！　わかったよ！」
「二回言わなくていいッ！」
声を限りに怒鳴りつけると、ミハイルは慌てたように飛び立っていった。実際、相当慌てていたのだろう、ミハイルの巨体と翼がぶつかって折れた枝がばらばらと降ってくる。
「ゼロってば、優しーい。お子ちゃまをわざわざ安全な場所へ逃がしてやってさ」
ばらばらに斬り捨てた屍の四肢を踏み潰しながら、ディトが茶化すように言う。
「適材適所だ。こう狭くちゃ、あの巨体は邪魔なだけだからな」
「ふーん。ま、そういうコトにしとくけど」
今ばかりは、ディトの生意気な言葉に切り返す気力もなかった。次から次へと湧いて出る屍達を斬り、叩き、踏み潰すという一連の作業を延々と続けて、疲労困憊していた。
「適当にあしらったら、さっさと進むぞ。全部相手にしてたんじゃ、こっちがもたない」
鼻が馴れたのか、腐臭がさほど気にならなくなっている。ということは、自分の身体に

あのひどい臭いが移ってしまったのだろう。洗ったくらいで落ちるだろうか、と考えただけで気が滅入った。

〈4〉

屍達を追い払い、やり過ごし、時には叩き潰し、ひたすら森の奥へと進んだ。もっとも、どちらが「奥」で、どちらが「手前」なのか、全くわからなくなっている。闇雲に動き回るうちに、方向感覚がすっかり狂ってしまった。

おまけに、木々の梢（こずえ）から覗く空はどんよりと曇っていて、太陽の位置で方角を知るという手段が使えない。

「あの女……こんな面倒な場所を棲み処にしやがって。絶対、殺す。ギッタギタに殺す」

ようやく屍の群れが途絶えて、一段落したところだった。荒い息が治まってくると、恨み言のひとつも言いたくなる。ただ、一カ所に止まっていたのでは、また屍共が集まってきてしまう。方角が怪しくても、当てずっぽうでも、とにかく進むしかない、と思ったときだった。

何かがひらりと目の前に舞い降りた。身構えようとして、やめた。というよりも、相手を見て気が抜けてしまった。

目の前に降り立ったのは、小柄な老人だった。珍妙な履き物に、些か風変わりな服をまとい、どこか笑いを誘う顔をしている。

そうやって無遠慮に眺め回すゼロに、老人は恭しく一礼した。

「我が名はオクタ」

全く聞き覚えのない名前である。何者だろう？

「森に棲みしウタヒメ、スリイ様の使徒にございます」

「キミがか？」

ゼロはまじまじとオクタと名乗った老人を見つめる。ディトもデカートもセントも顔だけは知っていた。残る一人もそうだったはずだ。だが、その顔はもっと若い男の顔だったように記憶している。

「スリイの使徒はまだ若いはずだが？」

左様で、と老人がうなずく。

「私、これでもまだ二十代でございます」

嘘っ、と背後でディトが叫ぶ。ゼロも全く同じ言葉を叫びたい気分だった。真っ白な髪と髭、深い皺の刻まれた顔。どこから見ても老人としか思えない。

「この地上に棲まうあらゆる存在を、毎日毎日イカせまくったところ、外見の精気を奪われたようでして」

改めてオクタの顔を凝視する。顔から皺を取り除き、たるんだ皮膚をぴんと張り、白髪に色をつければ……確かに、ゼロの知る使徒の顔になった。
「外見の精気を奪われるって……。どれだけヤッたらそうなるんだ？　幾ら何でもあり得ないだろう」
「いえいえ。このオクタ、絶倫だけが取り柄。絶倫だけが存在意義。絶倫だけが……」
聞いているだけで気力を奪われそうで、ゼロはオクタの言葉を遮った。
「あー、わかったわかった。もういい」
主であるスリイも変わり者だが、使徒のほうも負けてはいない。
この付近にスリイが潜んでいて、様子を窺（うかが）っているのだろうか。先触れ、ということかもしれない。ならば好都合だ、と思う。
「で、スリイの使徒が何の用だ？」
「さっきから、クソッタレな屍共のせいでムカついてるんだ」
ほっほっほ、と笑うと、オクタが武器を両手に持って掲げる。この使徒は、戦輪と呼ばれる円形の刃の使い手らしい。至近距離の敵にも遠距離の敵にも攻撃可能だが、扱いが些（いささ）か難しいとされている武器である。
「面白い。ヤルか？」
剣をオクタの鼻先に突きつける。

「はい。降参でございます」
オクタが両手を開いて頭上に挙げる。がちゃん、と耳障りな音をたてて戦輪が地面に落ちた。
「え？」
何が起きたのか、理解できなかった。
「降参でございます」
ミハイルが相手ならば二回言わなくていいと答えたところだが、今度ばかりは二回言ってもらってもまだ意味が飲み込めない。いや、言葉の意味はわかるが、行動の動機がわからない。
「ゼロ様の仲間にしていただきたく思い、馳(は)せ参じました」
「あー。そうか」
やはり動機はわからないが、話の趣旨だけはわかった。仲間にしてくれと言われて断る理由はない。
「ちょ、ちょっと待ちなよ」
異論を唱えてきたのは、ディトだった。
「罠なんじゃないの？　てか、あからさまに怪しいでしょ。だって、ここって森の国だよ？スリイのナワバリだよ？　敵の陣地のど真ん中にいて、敵の使徒が降参するって、おかし

くない？」
「男はすべて迎え入れる。難しいことはヤッてから考える」
「ヤッてからって……このジジイと？」
「私はそういう主義なんです」
それに、スリイを殺した後はオクタを連れて行く。オクタが使徒である以上は。その予定が少しばかり繰り上がったに過ぎない。
呆れたのか、諦めたのか、ディトは小さくため息をついたものの、それ以上は反対してこなかった。ただ、「納得がいかない」とつぶやいた。
「そこのオッサンはウタヒメに追い出されて、そっちのバカはウタヒメと別れて、ジジイはウタヒメを裏切って。なんか、みんな好き勝手なことばっかやってない？　なんで僕だけ肉豚女に自由を奪われてたわけ？　こんな不公平な話ってないよ」
「たいした違いはないだろう。途中はともかく、結果は同じだ。ウタヒメは全員殺すし、男は全員私のモノにする」
「仰るとおりでございますな」
拗ねたように黙り込んだディトの代わりに答えたのはオクタだった。
「というわけで、みなさま。よろしくお頼み申しますぞ」
「よろしく頼まれたところで、さっそくだが、スリイのところへ案内してもらおうか」

これ以上、無駄に歩き回りたくない。屍共がお手々繋いで闊歩するような森の中はもう、真っ平御免だった。

〈5〉

オクタの案内する道には、さほど屍は出没しなかった。全くいないとは言わないが、遭遇しても数が少ないとか、数が多くても囲まれる前に駆け抜けられるとか、明らかに歩きやすいとわかる道を選んでいる。

ゼロ達にとっては迷路も同然で、方角も何もかもさっぱりわからなかった森だが、オクタにとっては自分の庭のようなものなのだろう。

道中のつれづれに聞き出した話によれば、スリイは神殿に閉じこもって、人形を作っているか、昼間から眠りこけているかのどちらかだという。

「スリイ様は薄暗い場所がお好きですので。少しは日光浴でもなされればよろしいのですが、そちらには全くの無関心。このままではお身体を損なうのではないかと……」

「心配か？」

オクタが慌てたように首を左右に振る。離反したと言いながら、元の主を案じる言葉を口にしては疑われると考えたのだろう。

「おお、そうでした。それから、鋏（はさみ）を振り回すのもお好きなご様子でしたな」
「相変わらず迷惑な女だな」
「ですが、身体の感度は抜群に良いヒメですぞ」
「なら、なぜ裏切った？」
話を聞く限り、フォウのように乱心したわけでも、ファイブのように不当に使徒を虐げたわけでもなさそうである。
「先ほども申し上げましたが、このオクタ、絶倫だけが取り柄、絶倫だけが……」
「絶倫絶倫うるさい！　それはわかってるから、さっさと先を言え」
「ですから、私はとにかく毎日ヤリまくりたい！　シまくりたい！　なのに、スリイ様の関心は人形ばかりに向けられ、私めとはイタシてくださらず……」
「もういい。よーくわかった」
要するに、相手をしてもらえなくなったから乗り換えた、ということらしい。欲求不満の人妻か、と内心で突っ込みを入れる。
「ところで、この屍だらけの森もスリイの趣味なのか？」
「いえ、決してそのようなことは。スリイ様は腐乱死体にはさほど興味はお示しにならないかと」
「だったら、この状況は？」

「私めにも謎でございます」
「いつから、こうなった？」
「森の様子がここまでおかしくなったのは、最近のこと。少し前まで、緑深きこの森は憩いの場でもあり、野外でのアレにうってつけの場でもございまして……」
最近ということは、やはりスリイの〝花〟の影響と考えるのが妥当だろう。
「もっとも、それ以前から毒が撒かれたり、妖精族が姿を消したりと、何やら不穏な気配はございましたが」
「毒？　森の中にか？」
「はい。毒の撒かれた場所がエルフの里にも近うございまして、エルフ族はついに里を捨てる羽目に陥ったとの由」
エルフ族には強力な魔法の使い手が多く、里の周辺には幾重にも結界が張り巡らされている。当然、多少の毒など寄せ付けないはずだが、それでも里を捨てなければならなかったとは。
「いったい何者が？」
「さあ……。私めにはわかりかねます」
どこか歯切れの悪い返答だったのは、スリイの仕業ではないかと疑っているからに違いない。エルフの結界を越えて汚染するほど強力な毒となれば、〝花〟のチカラ以外に考え

にくい。
「早いとこスリイをブチ殺すしかないな。つくづく迷惑な女だよ」
「僕はそうでもないけど？」
ディトにしては珍しく寛大な物言いだった。
「肉豚女に比べたら、可愛いもんだって。それにさぁ、グッチョグチョに腐ったヤツらを殺しまくれる場所なんて、そうそうないよ。異変の原因がスリイだっていうんなら、僕は大歓迎だね」
ディトの意見をゼロは一言を以て切り捨てた。
「それはキミだけだ」
そんなことより、どうも引っ掛かる。この広大な森全体に及ぼすほどの異変となれば、スリイが単独で引き起こしたとは考えにくい。他のウタウタイも噛んでいる可能性がある。ファイブもフォウも殺した。トウはすでに死んでいる。となると、後は簡単な引き算である。ワンとスリイが結託して、森で「何か」をやらかした、となる。
問題は、このやり方がどうにもワンらしくないように思える、ということだった。〝花〟の苗床の分際で、ワンの正義感は際だっている。そのワンが住民達を脅かすような真似をするだろうか？
「ゼロ様。いかがなされました？　もうすぐ神殿にございますぞ」

オクタの声で我に返った。
「あ？　ああ、すまない。考え事をしていた」
「すぐそこの広場を抜ければ、スリイ様のおわす神殿までは目と鼻の先……」
言いかけて、オクタが不意に言葉を切った。
「これは何やら、妙な？」
オクタの疑念は同時にゼロの、いや、その場にいる全員の疑念でもあった。
「何の臭いだ？」
木々の向こうに目をやれば、オクタの言う広場が見えていた。異臭はそこから漂ってきている。屍の腐臭にも似た、それでいて妙に甘ったるい臭いだった。オクタはもちろん、デカートもセントも鼻をひくつかせながら眉根を寄せている。不快感を示していないのはディトくらいのものだった。
急いで広場に足を踏み入れてみると、大きく開けた空間が毒々しい黄色の花で埋め尽くされていた。それもただの花ではない。オーガの頭ほどの大きさの、巨大な花である。
「はて？　面妖(めんよう)な。このような花は今まで見たことも……」
オクタが戸惑った様子でつぶやく。そうだろう。これは森に咲く花ではない。ゼロには一見しただけでわかった。ウタウタイが咲かせた花だ。屍の臭いを放つ黄色い花。
咲き乱れる花の向こうから、ゆらゆらと近づいてくる人影がある。腐り落ちた肉を引き

ずる、屍特有の歩き方だ。ただ、その屍は兵士ではなかった。
「おとなしく死体でいればいいものを」
ファイブである。海の国の闘技場で、ゼロにめった刺しにされた挙げ句、ディトに切り刻まれて死んだはずの妹。よほど己の生に執着していたのだろう。〝花〟のチカラを使って無理矢理に再生したのだ。
しかし、ファイブのチカラは姉妹の中でも最も貧弱で、苗床としての能力は低かった。結局、再生できたのは、どす黒く変色した腐肉の身体。ファイブの面影は残っているが、醜悪な屍に他ならない。
「しかし、何故、ファイブ様が森の国に？」
そうつぶやいたデカートだけでなく、オクタも頻りと首を捻っている。
「私を追ってきたのかもしれないな。死してなおご執心とは。有り難いねえ」
オクタの話では、屍が森に出没するようになったのは、最近のことだという。つまり、ファイブの死後。ここから先は推測でしかないが、屍を引き連れてファイブはゼロを追いかけてきたのではないだろうか。その結果が、この死臭漂う森。
いや、逆かもしれない。森に異変が生じたのが先で、屍として蘇ったファイブは異変の気配に引き寄せられた。そこへたまたま、スリイを追うゼロがやって来た……。
やはり、正義感の塊のようなワンが住民達の生活を脅かすはずがなかった。スリイと一

緒になって事態を悪化させていたのはファイブだったのだ。
そのファイブがよろめきながら歩み寄ってくる。泥を掻き混ぜるような音がその口から漏れ始める。口の中も喉の奥も腐りきっていて、そんな声しか出せないのだろう。
「蠢け……ガルガリエル」
地面にいくつもの魔法陣が開く。屍のウタヒメが召還したのは、屍の天使だった。何体もの屍がファイブの周囲に集う。
突然、ディトが狂ったように笑い始めた。両手を広げ、上体を仰け反らせて笑い転げている。
「素敵だよ、ファイブ！　上っ面だけ取り繕ってた頃なんかより、ずっとずっと綺麗だ！」
ディトがファイブのほうへと駆け寄っていく。屍達へと斬りつけたときと同じ、今にも踊り出しそうな足取り。そして、排泄物や吐瀉物を眺めていたときと同じ、恍惚とした表情を浮かべつつ。
「今のファイブになら、抱かれてもいい！」
ディトの指先が悪臭を放つ肉に触れる。手のひらで撫でる仕種は、この上もなく愛おしげだった。
「望んでいたよ。こういう狂った世界を。僕の望むモノ、僕の愛するモノで満ち溢れた世界を！」

ゼロ、とディトが振り返った。
「殺し合おう！」
ファイブのウタノチカラによって縛り付けられていたディトが、自由を取り戻した後、自らファイブを主として選び直した瞬間だった。やはり使徒は、主と定めたウタウタイからは離れ難いものなのかもしれない。
「出でよ！　ファヌエル！」
ディトの頭上に魔法陣が展開した。フォウが一人で天使を召喚した現場にディトは居合わせている。ウタヒメと使徒の二人が揃わなくても召喚は可能だと知ってしまった。それで自力での召喚を試みたのだろう。だが。その代償をディトはまだ知らない……。
「セント！　オマエもこっちに来いよ！」
ディトが楽しげにセントを呼ぶ。
「私がぁぁぁ？」
「そうだよ！　だって、オマエはこっち側だろ？　そっちの世界が嫌いだったろ？　当たり前すぎる、つまらない世界なんて、大っ嫌いだったろ？　僕は気づいてたぞ」
「バレてましたぁぁぁ？　ええ。そうかもしれませぇぇん。でも、そっちに行ったからってぇぇぇぇ」
ふっとセントの顔に影が差す。

「トウ様は生き返らない」

いつになく真面目な声色だった。その静かな表情も初めて見るものだった。これが、トウの前で当たり前のように見せていた顔に違いない。ウタヒメと使徒という関係を超えて、トウとセントは愛し合っていたと、一目でわかる姿だった。

ゼロから生まれた存在でありながら、ゼロにないモノばかりでできていたトウは、ゼロが決して手に入れられなかったモノを手に入れた。なのに、結果は同じだった。結局、消えてしまった。何もかも。

「何だよ、それ。まさかの純愛？　吐き気がするね」

ディトが顔を歪めて吐き捨てる。しかし、セントは全く意に介さずに続けた。

「私の居場所はトウ様のお側にしかなかったのです」

そんなセントの言葉をかき消そうとするかのように、魔法陣から光が溢れ、ファヌエルが現れた。海の国で戦ったときと寸分違わぬ姿形と大きさだった。あのときはミハイルに乗って倒したが、折悪しく今はミハイルがいない。どうやって倒したものかと考えたときだった。

ゼロ様、とセントが振り返った。その顔は、いつもどおりの巫山戯た表情に戻っている。

「こっちは私が殺りますからぁぁぁ、ゼロ様はファイブを殺ってもらえますぅぅぅ？」

「セント！　ちょっと待……」

前へと進み出たセントを止めようとしたが、間に合わなかった。
「踊れ！　エグリゴリ！」
光に包まれた巨人が二体、魔法陣から現れた。もはや止める術はない。いや、止めようとは思わなかった。使徒自身が選んだ結果であれば、何も言うことはない。自分に何も言う資格がないことくらい、弁えている。
巨人達が連携の取れた動きでファヌエルに向かって突進していく。対を為す天使という辺りが、まるでトウの願望を投影しているかのようだ、と思う。
ゼロは剣を抜き、ファイブに向かって走った。周囲の屍達をデカートとオクタが薙ぎ倒し、道を開く。
「お美しかったファイブ様が、よもやこのようなお姿になろうとは。惨いことにございますな」
戦輪を振り回して屍を振り払いながら、オクタが嘆いた。背中合わせに立っていたデカートがうなずき、襲いかかってくる屍に蹴りを入れる。
「全くです。なんと痛ましい」
一年前、教会都市に妹達が集合した折、使徒達も顔を合わせていたはずだ。その頃はまだ、妹達は〝花〟に侵されていなかった。それを覚えているデカートやオクタにとって、変わり果てたファイブには同情せずにいられないのだろう。たとえ今、敵対すべき相手に

なっていたとしても。
ゼロはもちろん、同情したりはしない。間違っても自分自身を憐れんだりはしない。ただ、愚かだと思うだけだ。生への執着に囚われた自分の分身も、その分身を殺そうとしている自分も……ただただ愚かだ。
何度も名を呼ばれた。人の声とは思えない声だった。「かなしい」という言葉を聞いた。気のせいとしか思えなかった。強烈な悪臭と共に吐き出される音に、意味を見出すほうが難しい。本人にしても、自分が何を喋っているのか、もはや理解していないだろう。
足許も覚束ないファイブを斬るのは別段難しくはなかった。ただ、屍の兵士達と同じく、普通に斬っただけでは止められない。何度も剣を叩きつけ、その身体をばらばらにして、さらに原形を留めないほどに破壊しない限り。
逃げられないように両脚を切り飛ばした。それでもファイブは、腕と膝を使って這おうとする。その腕を肩から落としにかかったときだった。
突然、ファイブが跳んだ。人間では考えられない動きだった。両腕を力一杯突っ張って、その反動でゼロの頭上を越えて逃げた。
「くそっ！」
追いかけ、剣を振り上げる。が、そこでゼロは剣を取り落としそうになった。
「な……!?」

ファイブが、着地した先には屍がいた。ファイブはそれを押し倒し、肉と臓物とを貪り食っていた。肉食の獣のように這い蹲って、蠢いている屍の腹に顔を埋めて。切断された両脚を再生させるために違いないが、理由がわかっていても目を背けたくなる光景だった。

ここまでして生きていたいのか？　これほどの執着心が自分にもあったのか？　妄執という言葉では到底足りない、底無しの欲望が……。

切り落とされた付け根から再び両脚が生えてくるのを見て、ゼロは我に返った。ぼんやり見物している場合ではなかった。

生えてきたばかりの両脚を斬り飛ばし、続けて両腕を落とす。屍の肉に向かって這おうとする身体に剣を突き立てる。何度も突き刺す。その身体が完全に動きを止めるまで、何度も。

「ぜろ……おねえ……さ……ま……」

声を無視して、さらに斬りつける。腐った肉の塊をひたすら分断していく。まだ何か言いたげにファイブが口を動かしたが、もはや声にすらなっていなかった。ぐじゅぐじゅという不愉快な音だけが青黒い唇から漏れたかと思うと、やがて静かになった。

「また、地獄で会おう」

剣を引き抜くと、ファイブの身体はぐずぐずに溶けて崩れた。ディトが切り刻んだときの比ではない。今度こそ、再生は叶わないはずだ。

そして、もうひとつの戦いも決着しようとしていた。巨大な天使達、ファヌエルとエグリゴリ二体とが組み合っている真ん前にディトとセントがいる。ゼロは彼らに目をやった。もうそろそろ、だった。

「何だ……？　何だこれ!?」

先に悲鳴のような声を上げたのはディトだった。その両手が白い光を帯びている。光はみるみる全身へと広がった。ディトが困惑の視線をゼロに向けてくる。何が起きているのか、と問いたげに。

「ウタウタイのチカラ無しに天使を召喚すれば、それなりの代償を払う必要がある」

ゼロの答えに、ディトが目を見開いた。その顔が崩れ落ちるかのように歪む。

「なんで……なんだよ!?」

強大なチカラを持つウタヒメならば、一人でも召喚は可能だ。チカラの暴走や自我崩壊の危険と背中合わせではあるものの。しかし、ウタノチカラを持たない使徒が一人で召喚を行えばどうなるか？　召喚のためのチカラをどこから持ってくることになるのか？　自分自身から捻り出すしかない。自分自身を人間たらしめているチカラを。

「酷いじゃないかっ！　やっと、僕が待ち望んでいた世界になったのに！　やっと、僕が愛せる世界……」

光に包まれたディトの身体が輪郭を失い始めていた。これ以上の説明は不要かもしれな

い。それでもゼロが言葉を続けたのは、肝心なことを告げていなかったからだ。
「キミ達使徒はウタノチカラがなければ、人の形を維持できない。そういう存在なんだ。そういうふうに造った。私が」

一年と数カ月前。妹達はチカラを大暴走させた。教会都市に封じられていた〝花〟をそれと知らずに解き放ってしまったのが原因だった。

ゼロに寄生したのが唯一の個体というわけではなく、それ以外にも〝花〟は存在していた。どこの誰かは知らないが、その脅威を察知した者の手によって、そのひとつが教会都市の奥深くに封じられたらしい。それも、遠い昔に。

おそらくゼロから逃れた〝花〟は、記憶を捏造したのと同じ要領で、妹達に偽りの情報を植え付け、封じられていた〝花〟を解放させようとしたのだろう。

解き放ってしまった〝花〟に支配されて、自我を失った四人の妹達は、それぞれに天使を呼び出し、破壊の限りを尽くした。五人の中で最も強い魔力を持つワンだけは正気を保っていたが、妹達を止めるには至らなかった。

ゼロがミカエルと共に駆けつけたとき、教会都市は酷い有り様だった。妹達の暴走はゼロの予想を遥かに上回り、手が付けられなかった。現場を目の当たりにするまでは、殺してしまえば何とかなると思っていたのだが、そんな生易しい状況ではなかった。殺すどこ

ろか、近づくことさえ難しかった。
とにかく暴走を止めなければと、咄嗟にゼロが作ったのが四人の使徒だった。使徒の身体を受け皿にして、暴走するチカラを受け止め、吸収し、制御可能な状態に戻す。受け皿にするのは、生き物ならば何でも良かったのだが、その場ですぐに調達可能だったのは白い鳥達しかいなかった。
その時点では、ちょっとだけ鳥達にカラダを貸してもらうつもりだった。ほんの一時の間、鳥かごに入れるようなものだ、と。妹達の暴走を止めて、殺害可能な状態にまで持って行けば、それで使徒の役目は終わる。四羽の鳥は自分達が何をされたか、気づくこともなく、再び空へと飛び去っていくだろう。……飛び去っていくはずだった。
誤算だったのは、ゼロがそこで妹達を始末できなかったことである。単純なチカラ不足だった。〝花〟が五人の妹達となって逃れる際、根こそぎに持って行かれたゼロのチカラは、やっと回復し始めたばかりで、とても本調子とは言い難かった。使徒を作り、妹達の暴走を止め、解放された〝花〟を破壊したところで、ゼロのチカラは尽きた。
妹達を仕留める絶好の機会でありながら、果たせないまま、その場を離脱しなければならなかった。離脱したことさえわからないほど、ゼロは消耗していた。目を開けたら、ミカエルに咥えられて上空を飛んでいたのだ。
四人の妹達は何事もなかったかのように生き延びた。使徒達はそのまま妹達の側でチカ

ラを制御する装置として機能し続けた。

使徒達がどの時点で姿を変えたのかは知らないが、ウタノチカラを受け続ければ、いずれ人の形に成長することはわかっていた。彼らを造っている最中、人間となった使徒の姿が瞬間的に「視(み)えた」のである。初対面でありながら、ゼロが使徒達の顔を知っていたのはそういう理由だった。

人の姿に変わった使徒達は、妹達に仕え、使役されることとなった。これもゼロには誤算だった。鳥達の自由を奪うつもりなどなかったのに、結果的に鳥かごに閉じこめたままにしてしまったのだから。

しかも、彼らは人としての自我を得た。彼らを再び鳥に戻すことは、人としての自我を殺すことでもある。彼らにしてみれば、理不尽な話だろう。望んで人になったわけではないのに、人で居続けることも叶わない。

妹達を殺した後、ゼロが使徒を仲間として連れていくことにしたのは、そうしないと彼らが人でいられないからだった。

使徒が人の姿に変わる前に妹達を殺していれば、こんなことにはならなかった。何もかも、自分の落ち度で自分の罪だ……。

「こういう事ですか。ちっとも気づきませんでした。私はバカですからね」

鳥の姿で空へと羽ばたいていくディトを見上げて、セントがつぶやいた。その身体もやはり白い光に包まれている。

「でも、いいです」

セント、と口を開きかけたゼロを制するように、セントが微笑んだ。

「トウ様のいない世界で生きていても、仕方ありませんし。これで、トウ様との約束を違（たが）えることなく、楽になれる……」

「約束？」

「ええ。トウ様は私に、死んではならない、と」

それで、と思い出した。トウの後を追わないのかと問いかけたとき、セントは動揺を隠しきれなかった。セント自身は主に殉（じゅん）じたかったに違いないが、トウがそれを望まなかった。セントは己の望みを押し殺し、トウの最期の言葉を守り続けた。初対面のゼロにまるで不意討ちのように自身の本心を言い当てられたとき、巫山戯（ふざけ）た言葉ではぐらかすしかなかった。そういうことだったのだ。

すまない、と言いかけてやめた。謝罪の言葉ひとつで己の過ちをなかったことにはしたくない。

セントの晴れやかな笑顔が光の中に消える。白い鳥がゼロの傍らをすり抜けて飛び立っていった。

## 〈6〉

ファイブの身体が土に還った後、広場を埋め尽くしていた花々はみるみる萎れ、枯れていった。辺りに立ちこめていた甘ったるい腐臭も消えた。まだ何やら妙な気配が残っているのは、スリイが生きているためだろう。

「ディトとセントがいなくなったと知ったら、ミハイルが寂しがるでしょうね」

デカートがそう言ってうつむいたが、感傷に浸っている暇はない。

「スリイを捜すぞ。神殿……だったな？」

踵を強く鳴らして歩き出したときだった。そのミハイルの声が上空から降ってきた。

「ゼロ！　ゼロ！　見つけたよ！　きっとスリイさんだよ！」

ミハイルが広場に急降下してくる。いつもなら、ここで「まーたお子ちゃまの早とちりってヤツじゃない？」と混ぜ返す声があったはずだった。

「ウタノチカラを感じたもん！　感じたもん！」

「どこでだ？」

ミハイルがウタノチカラを察知したというのなら、スリイに間違いない。再生したファイブはすでに始末した。残るウタウタイは二人。ワンは教会都市だろうから、消去法でスリイしかいない。

「あっちだよ！」
ミハイルが翼をばたつかせて上空を示した。
「空？　しかし、スリイに飛行能力なんてなかったはずだが」
「でも、ウタだったよ！　いるよ、絶対！」
ゼロはオクタを横目で見やった。
「スリイは薄暗い場所が好きなんじゃなかったのか？」
「はい。ですが、スリイ様は高い場所もお好きでいらっしゃいます」
「それで空か」
スリイ自身に飛行能力はないが、飛空艇に乗っているという可能性はある。
「わかった。案内しろ」
デカートとオクタをその場に残し、ゼロはミハイルの背に飛び乗った。幸い、ミハイルはスリイの気配を察知したことで高揚しているのか、ディトとセントの不在には気づかなかった。
森の中からは見えなかったが、上空に出てみると、ワイバーンが飛び交っていた。ドラゴンによく似た翼竜だが、単独で行動するドラゴンに対して、ワイバーンは群れる習性がある。目の前のワイバーン達も、結構な大群だった。
「なんだこれ。キミ、よくこんなところを飛んでたな」

「ワイバーンはドラゴンと違って下等な翼竜だからね！　低い知性で喋ることもできないし！　運動能力なんてたいしたことないし！　あんなヤツら、どんどん燃やしちゃえばいいから、ぜんっぜんへイキ！」
「キミ、ワイバーンのこととなると、性格変わるな」
ゼロから見れば、ドラゴンもワイバーンも似たような生き物で、違いといえば喋るかどうか、くらいの認識だったが、ミハイルにとってはそうではないらしい。以前から、ワイバーンに遭遇するたびにミハイルは容赦（ようしゃ）なく炎を吐いてきた。
人間を殺すことさえ嫌がるミハイルが、同族とよく似た姿形の生き物に対して、「どんどん燃やしちゃえば」などと言っている様子は驚きでもあり、意外でもある。
今も、スリイの追跡という目的がなければ、せっせとワイバーン駆逐（くちく）に励んでいただろう。ひょっとしたら、空の上でウタノチカラを感知したのは単なる偶然で、ミハイルはワイバーンを追いかけ回すことばかりに熱中していたのかもしれない。
「待て！　あれだ！」
ワイバーンの群れの中にスリイがいた。複数のワイバーンに鎖を付け、それにぶら下がって飛んでいるのは、紛れもなくスリイだった。
「スリイさんって、こんな下等生物を使役してるの？」
がっかりだな、とミハイルがつぶやくのが聞こえたわけでもないだろうが、スリイがゼ

ロ達のほうへと顔を向けた。
「ゼロ姉さーんっ！」
いつも気怠そうにしているスリイにはあり得ないほど､その声は弾んでいた。おまけに、満面の笑みを浮かべているのが遠目にもわかった。何事かと訝る間にも、スリイをぶら下げたワイバーン達が近づいてくる。と、スリイが高く片手を挙げた。
「贖え！　イズライール！」
スリイの真下の空間が光り輝いた。巨大な火球が爆発するかのように、魔法陣が驚くべき速さで展開していく。フォウやファイブとは比べものにならない強力なチカラである。
「ゼロ……。あれ……」
魔法陣から現れた光が輪郭を結ぶ。竜種とよく似た形に見えるが、大きさはミハイルよりもずっと巨大である。もちろん、ワイバーンでもない。何が現れるのだろう、とゼロが目を凝らすなり、ミハイルが震え声でその名を告げた。
「エンシェント……ドラゴン？　ほんとに？」
強い魔力の気配が感じられた。次の瞬間、かき消すようにエンシェント・ドラゴンがその場からいなくなった。かと思うと、全く別の場所から唐突に現れる。魔力を使って瞬間的に移動したのだろう。
「面倒くさいヤツだな」

思わず舌打ちをする。あんな変則的な動きをする敵と戦わなければならないと考えただけで、うんざりした。しかし、うんざりしたのはゼロ一人で、ミハイルの反応は全く異なっていた。

「ゼロ……。あのドラゴン、怖いよ」

ミハイルがひどく怯えているのが伝わってくる。

「すごく、すごく……怖い目をしてる」

幼い子供が怖がるのとはまるで違う。たとえ齢を重ねたとしても、ミハイルはエンシェント・ドラゴンを前にすると震え上がるだろうとわかる怯え方だった。

「アレと戦っちゃ……ダメなんだ……。ボク達ドラゴンは、アイツとは……」

ワイバーンを下等生物と蔑んだのと同じく、性格や好みに関係のない本能的な「何か」が警告を発しているのかもしれない。エンシェント・ドラゴンを目の当たりにしたのは初めてでありながら、それを「怖い」と感じるのは。

だからといって、はいそうですかと引き返すわけにはいかない。ゼロはきっぱりと言い放った。

「気にするな」

しかし、いつになくミハイルが強硬に反論してくる。

「だって！　だって、ゼロ。あれは！」

「大丈夫です！」
なおも「だって」と言い募るミハイルに、ゼロは重ねて「大丈夫」と言い聞かせた。白銀の鱗を軽く叩いてやる。叩いた後で、赤ん坊を抱いた女がよくする仕種に似ていると気づいた。
「私は、嘘は言わないよね？」
うん、と肯定の答えが返るまでに、しばしの沈黙があった。
「ゼロは乱暴で乱暴で乱暴だけど。嘘は言わないね」
「だろう？　だから、信じろ。私が大丈夫だって言ってるんだから大丈夫です」
さっきよりも沈黙は短い。
「わかった」
種族的な本能に根ざす「何か」を理屈で抑えつけさせる。いや、理屈ですらない。自分に対する信頼などというあやふやで頼りないものを使って丸め込んだのだ。以前であれば、ひどく嫌悪したに違いないやり方なのに、なぜか今はさほど抵抗感を覚えない。なぜだろう？
その疑問はひとまず仕舞い込み、ゼロは努めて明るい声を出す。
「返事は二回！」
「わかったよ！　わかったよ！」

「よくできました」
ミハイルの翼が力強さを取り戻すのを目にした瞬間、何かが胸の内に湧き上がるのを感じた。だが、その感情の名を探すことをゼロはしなかった。名付けることにためらいを覚えた。だから、考えるのをやめて、ミハイルと共にエンシェント・ドラゴンを見据えた。今はたぶん……そのほうがいい。
しかし、エンシェント・ドラゴンの魔力は底無しだった。瞬間移動を繰り返しては、その合間に火球を吐いてくる。ミハイルの飛行能力では攻撃を躱すのに精一杯、とても反撃に出るどころではない。
「くそっ。デカい図体の割にチョロチョロチョロチョロチョロと……」
何とかして、あの動きを止める方法はないものか。このままではミハイルが消耗するばかりである。
「ゼロ様ぁぁぁぁぁっ！」
不意に、あらぬ方向から叫び声がした。どさり、と何かに背中を直撃され、ミハイルが「痛っ」と悲鳴を上げる。が、すぐにその落下物が何であるのか気づいたのだろう。悲鳴が疑問符だらけの言葉に変わった。
「なんで!?　なんで!?　いったいどうやって!?」
ミハイルの背に落下してきたのは、地上で待機していたはずのデカートだった。

「オクタに放り投げてもらいました。ゼロ様がお困りのご様子でしたので」
大柄なデカートを上空まで放り投げるとは尋常な腕力ではない。性豪を自称するオクタにそんな特技があるとは知らなかった。自分が造った使徒とはいえ、知らないことは多い。
「ヤツの動きを封じれば良いのですね？　私が召喚する魔獣を以てすれば、造作もないこと……」
それの意味するところがわからないゼロではなかった。
「じゃあ、ちょっとヤッてくれるかな」
だからこそ、あっさりと告げた。いいのか、などと愚かしい確認はしなかった。
「うぅぅ。召喚を行えば、私は鳥に戻ってしまうというのに。なんという無慈悲なお言葉！　なんという……なんという……プレイ！」
「イヤなら止めるか？」
「今度は止めるプレイ！　ううっ。た、たまらない……っ。いいえ！　いいえ、やります！　これはご褒美なのです！」
デカートが両腕を大きく広げた。
「防御ろ！　アルマロス！」
それは、魔獣というよりも巨大な要塞だった。自分を守ろうという意識の強いフォウらしく、使役していたのは防御に特化した天使だったらしい。

アルマロスの魔法障壁が広がって、エンシェント・ドラゴンを捕らえる。底無しだったはずの魔力が吸い取られたのか、アルマロスの魔力のほうが上回っていたのか、明らかに動きが変わった。

それだけに、要したチカラは相当なものだったのだろう。ディトとセントが召喚から鳥に戻るまで、多少なりとも猶予があったのに対し、デカートとは一言も言葉を交わすことができなかった。

それがどうした、と思う。

今更何を話す？　別れを惜しむ資格が自分にあるとでも？　仲間を失うのが辛い？　何を言っている。彼らは仲間などではない。自分が勝手に造って、勝手に妹達に使役させて、勝手にまた奪って……そんなものを仲間とは呼ばない。だから、間違っても悲しんだりしない。

ただ。一言くらいは許されるだろうか。決して相手に届くことのない、自分だけの一言であれば。

さよなら、とつぶやくゼロの背後で鳥が羽ばたく音がした。

「……行くぞっ！」

気を取り直して前を向く。魔法障壁の効力が消える前に仕留めなければならない。

ミハイルが炎を吐く。直撃した。しかし、その程度で倒れるエンシェント・ドラゴンで

はなかった。竜種が恐れるだけのことはある。
「ゼロ姉さん……。こん…にちは……」
エンシェント・ドラゴンに騎乗したスリイがいつもの気怠(けだる)そうな表情で話しかけてくる。ミハイルに攻撃されるなり、飛び降りて逃げたフォウとは違って、スリイは落ち着いていた。単に危機感というものが欠如しているだけかもしれないが。
「キミ、狂いもせずに〝花〟と共存できてるんだ？」
「ええ……何となく」
ミハイルの炎がまた命中した。エンシェント・ドラゴンが不規則に揺れたが、落ちるには至らない。スリイはまだ薄笑いを浮かべている。
フォウのときとは比べものにならないほど、地上からは距離がある。飛び降りたかったとしても我慢するしかない高さだった。まあ、この妹ならば、高さのことなど考えずに、飛び降りたいときには飛び降りてしまう気がしないでもない。
「キミはもともと頭がおかしいようなものだったな、そういえば」
ふふふっ、と笑うなり、スリイの口調が変わった。
「ゼロ姉さん！　見て見て！　ワタシ、エンシェント・ドラゴン呼べるのよ！　〝花〟のおかげ！　ゼロ姉さんと一緒！」
口調に加えて、顔つきまでもが別人のように明るい。

「おいおい。キミ、そんな明るい女じゃなかったろ？」
戦いの最中だというのに、つい突っ込みを入れてしまう。そこでスリイの顔つきがまたも変化した。
「そう？　ワタシは……やっぱり……？」
いつものスリイに戻るのか、と思ったが、そうではなかった。
「なあんてねッ！　死んでッ！　ゼロ姉さんッ！」
壊れた楽器を打ち鳴らすような、妙に甲高いスリイの声を合図にして、エンシェント・ドラゴンが火球を吐いた。魔法障壁が緩んで、動きが戻りつつあるのだろう。急がなければ、と思う。
「早くトドメを刺せッ！　クソドラゴンッ！」
「やってるよ！　やってるよ！」
ミハイルが立て続けに炎を吐いた。魔法障壁の効果があと少し早く切れていたら、間に合わなかったかもしれない。だが、エンシェント・ドラゴンが再び瞬間移動を始める寸前に、その一撃が翼を抉った。ぐらり、と空中で巨体が揺らぐ。
「ゼロ姉さぁぁぁぁんっ！」
叫ぶスリイの笑顔は少しも崩れない。すでにエンシェント・ドラゴンが落下を始めているにも拘わらず。言動も精神状態も常と変わらないように見えたが、やはり〝花〟のチカ

ラによる浸食は進んでいたのだろう。
「もう一度だッ！　あのデカブツの背中を狙えッ」
エンシェント・ドラゴンもろともにスリイを焼き払ってしまえば、そこで終わる。ミハイルが大きく息を吸い込む。ミカエルに匹敵するかに思われる業火がエンシェント・ドラゴンに襲いかかった。だが。
「ゼロ姉さーん！　ゼロ姉さーん！　あっははははは！」
スリイが飛んだ。炎が直撃する寸前だった。滑空する鳥を真似るかのように大きく四肢を広げて、スリイが笑っている。
炎に包まれたエンシェント・ドラゴンが爆発した。スリイが命じて自爆させたのか、もともと体内の何かが爆発するようにできているのか、そこはわからない。だが、その爆発はスリイにとってまたとない防壁となった。爆風と熱に遮られて、ミハイルが追撃しきれなくなったのである。
冷えた風が吹き抜け、視界が戻った。黒焦げになったエンシェント・ドラゴンが落下していくのが見える。やがてそれは空中でばらばらになり、まるで雨のように地上に降り注いだ。
「スリイはどこだ？」
「あっ！　あそこにいるよ！　いるよ！」

あの高さから飛び降りたというのに、スリイはまだ動いていた。立ち上がり、背中を丸めて歩いていくのが見える。その姿勢は怪我のせいではない。もともとスリイはひどい猫背だった。
「急げ！　逃がすな！」
ミハイルが、急降下しながらスリイに向けて炎を吐こうとしたときだった。スリイの行く手に回り込んだ者がいた。オクタである。慌てたように、ミハイルが炎を引っ込めた。この位置から炎を吐けば、オクタまで巻き込んでしまう。
そんなミハイルに全く気づいた様子もなく、オクタがスリイに話しかけている。
「スリイ様。もうお止めください」
その悲痛な表情は、ミハイルの背にあってもはっきりと見えた。スリイが立ち止まる。ゼロに促されるまでもなく、ミハイルが降下していく。
「止める？　何を？　何のこと？　意味がわからない」
背中を丸めたままで首を横に振ったからか、スリイの身体がゆらゆらと揺れる。
「どうして、おまえがここにいるの？　どうして、ゼロ姉さんと一緒に現れるの？」
「裏切ったからです。罪もない人々を残虐な方法で人形に変えて弄ぶ……そんな貴女様の所業に嫌気が差したのです！」
そうだったのか、とゼロはつぶやいた。オクタの本心はそこにあったのか。多少の欲求

不満はあったかもしれないが、相手にしてもらえないからという離反の理由は口先だけのものに過ぎなかった。

行動を共にしたわずかな時間だけでも、オクタの為人（ひととなり）は良くわかった。下半身の節操のなさはともかくとして、オクタは十分に常識人だった。離反した主であるスリイの健康状態を気に掛ける優しさもあった。それだけに、「人間を人形に変えて弄ぶ」というスリイの所業に深く心を痛めていたに違いない。

思い起こせば、森に毒を撒いた犯人に心当たりはと尋ねたときのオクタの表情がすべてを物語っていた。オクタは裏切りたくて裏切ったわけではない。己の無力さを思い知らされ、居たたまれなかった。だから、スリイの許を離れた。

「貴女様をお止めすることが叶わぬのなら、いっそ……いっそ……」

くすりと笑う声が聞こえた。後ろ姿からは、スリイが今どんな顔で笑っているのかわからない。

「何か勘違いしているようだけど。使徒が自らの意思で、主たるウタウタイを変えることなんて、できはしないの」

ぐうっ、とオクタが呻（うめ）いた。スリイはウタノチカラで無理矢理オクタを操ろうとしているのだろう。

「だよね？　ゼロ姉さん」

スリイがゼロを振り返った。吊り上がった口の端、異様な光を放つ双眸は、もはや「もともとおかしい」という域を超えていた。

だが、振り返ってゼロに話しかけたことで、ほんの一瞬だけスリイの注意がオクタから逸れた。その一瞬をオクタは見逃さなかった。苦しげな、しかし確固たる声が響き渡った。

「侵せ！　アルミサエル！」

スリイと二人で行った召喚ではない。オクタが自らのチカラだけを使った。光に包まれた身体から、それは明らかだった。

魔法陣が開き、やたらと頭の大きな人形が現れた。オーガより一回り小さいそれは、思いのほか素早い動きでスリイに襲いかかり、その手足を押さえ込んだ。間髪を容れずにミハイルが向かう。

「ゼロ様！　後はよろしく頼みましたぞ！」

「オクタ……」

「できることなら、もう一度、ゼロ様とヤリたかっ……」

言葉が途切れ、光が消える。スリイに向かって口を開けるミハイルを確かめるかのように、その鳥は周囲を旋回した後、高く飛び去っていった。

〈7〉

いつの頃から人形が好きだったのか、もう覚えていない。それくらい昔から、好きだった。人形という言葉を覚える前から、好きだった。

人間の皮膚と骨で作った人形を初めて見たときには、身体が震えた。なんてステキなモノがこの世にあるんだろうと思った。それを作ったヒトがいることにも驚いた。

他のヒトに作れるなら、ワタシにだって作れる……。

墓地の死体を使って人形を作った。戦場の死体を使って人形を作った。その場で殺した死体を使って人形を作った。生きたままの人間を使って人形を作った。複数の人間を使って人形を作った。人間と獣を使って人形を作った。人間と魔物を使って人形を作った。何体も何体も何体も何体も何体も何体も何体も何体も何体も何体も何体も何体も何体も何体も何体も何体も!

なのに、ワン姉さんは認めないと言った。二度と作ってはならないと言った。せっかく作った人形達を処分しろと言った。

ワン姉さんはわかってない! ワタシの人形は良い人形なのに! とっても強くて可愛い人形なのに!

ワン姉さんはいつもワタシから人形を取り上げようとする。いつもワタシの邪魔をす

る。ワン姉さんは酷い！
ワン姉さんはワタシの森に毒を撒いた。ワタシが二度と人形を作れないように、ワタシの森を毒の霧に沈めてしまった。解毒しようとしたけれど、ダメだった。毒の正体がどうしてもわからなかった。毒にやられて、オーガもギガースもトロルも死んだ。人間も死んだ。ワタシの人形の材料がみんな死んでしまった。
だから、ワン姉さんを殺そうと思ったのに。森に誘い込んで殺そうと思ってたのに。ワン姉さんを殺したら、また人形を作ろうと思ってたのに。もっと強くて可愛い人形が作りたかったのに。人間と何を混ぜようか、わくわくしながら考えてたのに。
トロルよりもオーガよりもギガースよりも強くて大きいモノ、なあんだ？
なんだろ？　ドラゴン？　うん、ドラゴンがいい。次に作る人形は、人間とドラゴンを混ぜて作ろう！　うんと強くて大きくて、どこまでも飛べる人形を作ろう！
そう思ってたのに。
嫌い嫌い嫌い！　ワン姉さんなんて大嫌い！　ワタシの人形を返してよ。ワタシの人形の材料を返してよ。
ゼロ姉さんも嫌い！　早くワン姉さんを殺してよ。エンシェント・ドラゴンも嫌い！
さっさとゼロ姉さんを殺してよ。ドラゴンも嫌い！　だって……。

真っ赤な口蓋（こうがい）と白い牙。それがスリイの見た最後の光景だった。

DRAG-ON DRAGOON3
STORY SIDE

# 肆

【花の章】



〈1〉

此処(ここ)が終わりの場所になる。
姉のワンからそう聞かされたとき、彼は何やら奇妙な感慨に捉えられ、聖堂内に視線を巡らせた。
扉から祭壇まではひたすらに遠く、天井はひたすらに高い。咳払いひとつが幾重にも反響するほどに、広い。そして、強い魔力の気配で満たされている、この場所。
「どうした？　何を見ている？」
「ううん。何も」
彼にとって、教会都市の聖堂は始まりの場所だった。この静けさと魔力の中で、彼は造られた。母を持たず、名を持たず、過去を持たない彼にとって、自分を造ったワンがすべてだった。
「姉さん……」
「なんだ？」
「ここで姉さんはゼロを殺すんだね」
ゼロはこの世界に災いを為(な)す者。故(ゆえ)に殺さなければならない。それが、世界に調和と秩序をもたらすウタヒメの役目。

幾度となく、そう聞かされてきた。世界を護るため、人々を護るため、弱き者達を護るため……。ワンは口癖のように言った。姉さんの頭の中には何かを護ることしかないみたいだ、と思ったことさえある。

けれども、それは正しいことなのだろう。だから、ゼロを殺すことは正しい。ゼロを殺さなければならない。

「でも、どうして聖堂なの？」

他にも戦いに適した場所はありそうなのに、なぜ、この静かな場所を選んだのだろう？

「此処の魔力を使えば、強力な結界を張ることができる」

「ゼロを逃さないため？」

「そうだ。まずは逃げられないようにして、その上で戦う」

一年前は逃げられたからな、とワンは苦々しげに言った。あと少しというところまで追いつめたのに、ゼロは逃げてしまった。正確には、ドラゴンが瀕死(ひんし)のゼロを咥(くわ)えて飛び去ったのだという。

「それだけじゃない。此処を選んだ理由は」

ワンはゆっくりと首を巡らせて、聖堂内を見回した。

「聖堂内に毒を撒く。森の国の毒霧を覚えているだろう？」

「あ……」

ひどい息苦しさと不快感がまざまざと蘇った。魔獣でも植物でも魔物でもなく、魔法でもウタノチカラでもない、奇妙な毒の霧。安全な上空へと運んでくれたガブリエルの翼がなかったら、いったいどうなっていたことか。

「ゼロは強敵だ。だから、毒で弱らせる。それで死ぬようなことはないが、ウタウタイでも毒を吸い続ければ身体が思うように動かなくなるし、五感も狂う。当然、注意力も判断力も低下する」

「そうだったね。あのとき、姉さんは顔を真っ青にしてた。僕もすごく気分が悪かった」

「何より、毒は竜種の脅威となる。無理が利くウタウタイと違って」

一年前と同じ轍を踏まないように、ということなのだろう。ゼロも、ドラゴンも、どちらも逃げられないように結界内に閉じ込めて、毒を吸わせて……。そこまで考えて、大変なことに気づいた。

「待って。姉さんは結界の中で戦うんだよね？　その中に毒を撒くんだよね？　それだと、ゼロもドラゴンも弱るけど、姉さんも毒にやられちゃうよ？」

「大丈夫だ。その前に仕留める」

「本当に？」

できるのだろうか？　ゼロは強敵だと、ワンは言った。毒で弱らせなければならないほどの敵を、そんなに早く倒せるのだろうか？

「それに、私なら多少五感が鈍くなっても問題ない。人並みになるだけだ」
そこでようやく理解した。姉さんはゼロと刺し違えるつもりなんだ、と。最初から自分だけ生き残ろうなんて考えていないから、ゼロを殺した後は自分も死ぬつもりだから、全然心配していないんだ……。
そんな彼の心の内を読んだかのように、ワンが「そうだな」とつぶやいた。
「大丈夫だが、万全ではない。この世界には、完璧も絶対もあり得ないからな。物事すべてに失敗と誤算がつきまとう。だから」
ワンが一振りの剣を取り出した。
「私が仕留め損ねたら、これでゼロを殺せ」
「この剣は……？」
剣が手渡される。刀身の細さの割に、ひどく持ち重りのする剣だった。
「竜の牙から作った剣だ。ウタウタイを殺すには竜のチカラが要る」
「ガブリエルの牙？」
「いや。ガブリエラに貰った牙で作った」
ガブリエルは天使になる前、ガブリエラという名のドラゴンだった。ワンが弟を造ったことを知っている唯一の存在で、ワンにとって無二の友……だった。
天使となってしまえば、使役はできても対話はできなくなる。なぜ、ガブリエラが自我

を捨ててまで天使になったのか、その理由は知らない。少なくとも、ワンはそれを望んでいなかったはずだ。ガブリエラがガブリエルになってからというもの、ワンの口数は極端に減った。

『もっと笑いなさいよ。アンタ、昔はよく笑う子だったわよ？　笑いなさいってば』

そんなふうに言ってくれる相手がいなくなったからか、あの日以来、心から笑うワンを見ていない。苦笑や失笑、或いは相手に合わせて笑い声をたてることはあっても、少しも顔が笑っていない……。

「僕がこの剣で……ゼロを倒す？」

「そうだ。できるだろう？　稽古してきたとおりにやればいい」

ゼロを殺すために剣を教えられた。ワンに連れられて魔物狩りにも出かけた。並みの敵には負けない。そう言い切れるだけの技は身に付けた。

しかし、ゼロは強い。隙を見て背後から襲ったとして、それでも倒せるかどうか。

そんな不安を察してくれたのか、ワンはそっと肩に手を乗せて言った。

「心配しなくていい。ゼロは私が倒す。万にひとつ、仕留め損ねることがあったら、という話だ」

そして、ワンは段取りを説明し始めた。

〈2〉

「またボクたちだけになっちゃったね……」
焚き火を見つめながら、ミハイルがぽつりと言った。ほんの数日前まで、この焚き火の周りにはゼロとミハイル以外に四人の使徒がいた。
うるさいほどお喋りなセントと、いちいち突っ込みを入れるディトと、話の最中にあらぬ妄想に耽るデカートと、何かにつけては話題を下半身に向けたがるオクタと。
森の国での戦いで、使徒は全員、鳥に戻ってしまった。
「ゼロは寂しくないの？」
「別に」
元より二人の、いや、一人と一体の旅だった。あの四人は束の間の同行者に過ぎない。それに、ミハイルとの旅にしても、ほんの一年余り。竜種の長い寿命に照らせば、自分もまた束の間の同行者だ、とゼロは思う。
「ボクは寂しいよ。とっても寂しいよ」
「そうか……」
何気なく視線を上げると、ミハイルが所在なさげに尾を動かしていた。スリイを捕食した後、ミハイルの身体はまたも進化を遂げ、ミカエルそっくりの外見へと変わっていた。

もっともそれは姿形だけで、こうして話をしていると、声音は明らかにミハイルのものだし、首を傾げる仕種や尾を振る動作はまだまだ幼い。黙ってじっとしていれば、ミカエルと見分けがつかないかもしれないが。

ミカエルに酷似した外見と、全く異なる所作。それはひどく胸を突かれるようでもあり、どこか安堵を覚えるものでもあった。

フォウのときと違って、スリイを捕食した際、ミハイルは意識を保っていた。スリイのウタノチカラがフォウに比べて劣っていたからではない。エンシェント・ドラゴンを召喚して使役していたのだから、むしろフォウよりも強い。にも拘わらず、ミハイルは本能のままに襲いかかりはしなかった。スリイを捕食対象と見定めての行動だった。

フォウを襲ったとき、ミハイルはまだ幼かった。外見も能力も未熟な竜種だった。しかし、フォウを捕食したことで外見だけでなく能力も成長した。意識が飛ぶほど本能に引きずられることがなくなったのは、その能力の現れだろう。

続くスリイの捕食によって、ミハイルはさらに成長した。最強の名に恥じなかったミカエルに、今のミハイルなら引けを取ることはないはずだ。

つまり、ミハイルはもう「気がついたらゼロを食べてしまっていた」という捕食行動を取れない……。

「ゼロ、ゼロ、どうしたの？」

ミハイルが心配そうに覗き込んでくる。よほど深刻な顔をしていたらしい。
「右目のお花が痛むの？」
「……気づいていたのか」
ゼロの体内の〝花〟は、このところ急速にチカラを増していた。制御するのに苦労することも少なからずあった。残り時間が尽きようとしているのだ。
「たまに、ぎゅって手を握ってることがあるでしょ。ゼロは平気な顔してるけど、きっと苦しいんだろうなって。そんなときって息が止まってるんだもん。今だって……」
「大丈夫だ。心配するな」
ゼロの様子だけでなく、〝花〟の気配からもわかるのだろう。機は熟した。ミカエルと同じ言葉を告げる時が来たのだ。
「頼みがある」
ただならぬ気配を感じたのか、ミハイルが沈黙した。身じろぎひとつせずにいる、その姿。さっきまで、黙ってじっとしていればミカエルと見分けがつかないと思っていたが、違う。たとえ石のように沈黙していても、ミハイルだとはっきりわかる。少なくとも、ゼロの目にはそう映る。
「私を殺してくれ」
ミハイルはまだ黙りこくっている。今まで言葉にしたことはなかったけれども、ミハイ

ルが何も察していないはずがなかった。竜種は〝花〟の天敵であり、ゼロはその〝花〟を宿している。
それだけではない。〝花〟のチカラの増大によって、妹達は狂気に囚われ、殺戮者（さつりくしゃ）となり破壊者となった。ミハイルはそれも目の当たりにしている。最初は妹達との戦いを嫌がっていたのに、いつしか何も言わなくなった。なぜ妹達を殺したいのか、と問うこともなくなった。
ミハイルはすでに理解していたのだ。ゼロとミカエルが何を為そうとしていたのか。そして、ミカエルが何故（なにゆえ）、転生してまでゼロとの約束を守ろうとしたのか。
「教会都市でワンを殺したら。その後に」
明日、日の出と共に飛び立てば、暗くなる前に教会都市に着く。
「……わかった」
返ってきた言葉は声こそ違っても、ミカエルと同じものだった。

## 〈3〉

教会都市は、魔法発祥の地と呼ばれている。この世界に当たり前のように存在している魔法の源流は、教会都市に端（たん）を発している、と。ただし、それを言い出したのがどこの誰

で、いつの時代の人物なのか定かではない。
最初にそれを言った人間は、相当な知恵者か、逆に相当な愚者かのどちらかに違いない。こんな場所を「教会都市」と名付け、ご大層な由来まで拵えたのだから。
「ねえ、ゼロ。すごい数の建物だね」
教会都市上空を飛びながら、ミハイルが驚きの声を上げる。眼下には、巨大な石造建築物が林立している。
「建物と呼んでいいものやら、判断に迷うところだが」
その建築物は非常識なまでに巨大で、奇妙な形をしていた。やたらと縦長だったり、角張っていたり、凹凸がほとんどなかったり、或いは妙に装飾過多であったり。しかも、どれもが壊れ、崩れかけていた。
「どんな人が住んでるんだろ？」
「誰も」
この廃墟がかつて、どんな目的に適う建築物だったのか見当も付かないが、少なくとも住居ではないだろう。無駄に高く、無駄に広い建物は日常生活には適さない。建物内を移動するだけのために転移魔法を使うなど、非効率極まりない話だ。
「この地は、とっくの昔に死んでいる」
人が住み着くこともなく、かといって雑草が蔓延ることも野生の獣が棲息することもな

い。ここに足を踏み入れるのは、せいぜい「学術的価値のある遺跡」に興味を持つ学者連中くらいのものか。

「でも、ワン……は、ここにいるんだよね？」

ここを本拠地と定めたワンもまた、酔狂な学者連中の同類だった。教会都市には、「旧世界」と呼ばれる古代文明の痕跡(こんせき)が残っている。ワンはその痕跡のひとつである書庫にこもって、ひたすら書物を読み耽(ふけ)っていると風の噂に聞いた。

かつてこの地には、高度な知識と技術を持つ人々が存在していたという。教会都市の建築物が奇妙な形をしているのは、旧世界の人々が旧世界の技術を使って建造したから、らしい。

らしい、としか言えないのは、旧世界の人々の痕跡はあっても、その後の行方は辿(たど)れないからである。彼らは唐突に出現し、同じ唐突さで消滅したとされている。この教会都市という広大な廃墟を残したまま。

今更そんなものを調べて何になるのかと思う。調べたところで、消えた文明が復活するわけでもないし、旧世界の人々に会えるわけでもない。

やはり、ワンだけは理解不能だ。スリイもよくわからなかったが、それでもスリイは自分自身だと思えた。だが、ワンは違う。とても自分の中にあるモノから生まれたとは思えない……。

「ワンの気配はわかるか？」
やたらと広く、また障害物だらけの教会都市は隠れるに易く、探すに難い。ウタウタイの気配を感知できるという竜種の能力に頼るしかなかった。
「うん。すごくはっきりしてる。他の妹さん達とは比べものにならないくらい。やっぱりチカラが強いから？」
「いや、気配を絶つくらい、ワンには息をするくらい簡単なことだ」
他の妹達でさえ、気配を消すことができた。それ以上に強い魔力を持つワンなら、完全に気配を絶つばかりか、逆に自分の気配を偽装することも可能に違いない。ただ、今、ミハイルが感知している気配は偽装ではなく、本物だという確信がある。
「じゃあ、なんで？　なんで気配を消さないの？」
「挑発してるんだろう」
自分は逃げも隠れもしない、だから早く来い、決着をつけよう、と。
「たいした自信だよ」
出来損ないの苗床のくせに、世界を護るなどと大口を叩き、正義の味方を気取る。いずれ〝花〟のチカラに呑まれて、人類に災いを為すことになるというのに。それを知ってもワンは自信たっぷりに振る舞っていられるだろうか？
「ゼロ！　近いよ！　すごく近いよ！」

ミハイルが叫ぶ。ワンの気配かと尋ねるまでもなかった。不意に建物の陰から巨大な影が現れた。ワンが使役しているドラゴン、ガブリエルだった。

「ワン！」

騎乗する姿が視認できる距離ではなかったが、それでもワンの気配はゼロにも察知できた。それほどまでにワンのチカラは強くなっている。

「ここで決着をつけてやる！」

鎧のような装甲に覆われたドラゴンが急速度で接近してくる。その背に騎乗するワンの姿が今度ははっきりと目視できた。

「うるさい。そんな大声を出さなくても、私には聞こえている」

そうだった。ワンの五感は異常なまでに鋭い。ゼロからは全く視認できない距離であっても、ワンのほうからは髪の毛一本に至るまで見えていたに違いない。おそらくミハイルとの会話も聞かれていただろう。

あまりに遠くまで見えすぎる目に、常人には聞き取れないほど微細な音まで拾ってしまう耳。それればかりか、嗅覚も触覚も味覚も尋常でなく鋭敏だと聞いている。鋭すぎる五感は、当たり前の日常にはただただ邪魔で、苦痛をもたらすものでしかない。その苦痛を完璧に抑えつけているワンの精神力は桁外れに強いに違いなかった。

しかも、ワンが制御しているのはそれだけではない。

「そのドラゴン……。呼び出すための使徒はどこに隠れてる？」
ガブリエルはフォウが召喚した天使ゾフィエルと酷似した外見だが、その能力には雲泥の差がある。それほど強力な天使を召喚するには、使徒の助力があったとしても、どれだけのチカラを要することか。ワンのチカラが暴走寸前だったとしても不思議はない。
「使徒なんか、いない。私には必要ない」
その言葉を鵜呑みにする気はなかった。ゼロが造った使徒は四人。教会都市で暴走していたのは、トウとスリイ、フォウ、ファイブの四人だったから、四羽の白い鳥を使徒にした。ワンのための使徒は造っていない。
しかし、あれだけ強力なドラゴンをウタウタイ一人で召喚できるはずがない。となると、ワンが自分で使徒を造るしかない。強いチカラを持つワンなら、それくらいは可能だ。
「道具のようにウタヒメに使われるだけの……。そんな悲しい存在は要らない」
「造り方がわかりませんでした、って正直に言えば？」
もちろん、ワンはそんな挑発に乗ってはこなかった。それに、やり方がわからないということもないだろう。ゼロにしても、誰かに教わったわけではない。人間の赤子が誰に教えられずとも立って歩き、やがて走り始めるように、チカラの増大と共に使い方も覚えていった。だから、使徒を造るだけのチカラが備わった時点で、やり方は知っていた。
逆に、教わらなければわからないような使い方はゼロにはできない。歩いたり走ったり

と違って、泳ぎは教わるか真似るかしなければ覚えられないのと同じで。
いずれにしても、ゼロに匹敵するだけのチカラを持つワンである。使徒の造り方くらいわかっていただろうし、何より使徒を持たずにチカラを行使する危険を理解していなかったはずがない。
ならば、造って当然、居て当然の使徒はどこに……？
「ゼロ！　来るよ！　来るよ！　どうする!?」
余計な考え事はそこまでだった。
「どうするもクソもねーよ！　さっさと撃ち落とせッ！」
返事の代わりにミハイルが息を吸い込んだ。いつもと違うな、と感じた直後、単なる炎ではなく巨大な火の玉が膨れ上がるのを見た。ミハイルもまた、竜種としての進化と共に新たな戦い方を覚えたのだろう。
火の玉はガブリエルの翼を掠めて飛び、眼下の建造物を粉々に吹き飛ばした。すさまじい破壊力である。直撃していたならば、ガブリエルがいかに強靱とはいえ、無事では済まなかったはずだ。
しかし、ガブリエルも自我を失っているとはいえ、判断力までなくしたわけではない。回避と同時にその口から炎が吐き出された。
「来るぞ！　迎え撃てッ！」

ミハイルの火の玉がガブリエルの吐いた炎へと襲いかかる。両者がぶつかり合い、空中で爆ぜる。

「休むな！　もう一度ッ！」

二体のドラゴンの吐く炎が空中で幾度となく衝突する。そのたびに爆風と熱波とが押し寄せてくる。互いに回避と攻撃とを繰り返した後、先に命中したのはミハイルの火の玉だった。

ワンを背に乗せたまま、ガブリエルが墜落していく。よし、とゼロが声を上げかけたときだった。地上近くまで落下したところでガブリエルが大きく翼を広げた。

「逃げる気か！」

墜落に見せかけた離脱だった。ガブリエルが態勢を立て直し、低空を滑るように飛ぶ。

「追えッ！」

ミハイルが急降下の態勢に移ったときだった。ガブリエルを守るかのように何かが視界を遮った。翼を持つ者達の群れだった。ミハイルが苛立ちの声を上げる。

「くっそー！　下等種のワイバーンめ！」

ワイバーンの大群が一斉に向かってくる。ミハイルが炎を吐く。ゼロが指示を出すまでもなかった。

「ぶっ潰してやる！　虫けらのくせに！」

出すまでもないどころか、指示を出したとしても聞く耳を持たないだろう。
「落ちろ！　落ちろ！　落ちろーっ！」
「キミ、ワイバーンの事となると、本当に人が変わるなあ。人じゃなくて竜だけど」
ミハイルはワイバーンを焼き払うのに夢中になっている。ガブリエルは逃げてしまったが、行き先を追うのは容易い。ワンは本気で逃げるつもりではなく、場所を変えて仕切り直そうとしているだけだ。
「このっ！　このっ！　この下等種め！　さっさと死ねっ！」
しばしミハイルのワイバーン狩りに付き合うことにした。無理に止めさせるより、少しばかり遊ばせてやるのも悪くないだろう。

〈4〉

ミハイルのワイバーン狩りは「しばし」どころではなかった。結局、ワイバーンの大群を殲滅するまで、ミハイルはあの場を動こうとしなかったからだ。
ワンは単に離脱のための防壁としてワイバーンを配置しただけなのだろうが、結果的には、ゼロ達に余計な体力を使わせ消耗させることになった。それればかりか、態勢を立て直し、ガブリエルを回復させるのに十分な時間まで得たわけである。

セコい手を使いやがって、とゼロは内心で毒づいた。
「さっさとワンのところへ行くぞ、クソドラゴン！」
相変わらず、ワンは気配を隠そうとはしていなかった。ミハイルの翼は少しの迷いもなく進んでいく。その先には、廃墟の中でも一際目立つ巨大な建物があった。教会と名が付くからには、あれが大聖堂なのだろう。
「よし。あの窓に突っ込め」
ステンドグラスの大きな窓を指さす。旧世界の様式らしからぬ、目に馴染みのある建築物だった。
「割れちゃうよ？　いいの？　いいの？」
「いちいち降りて扉を開けるとか、面倒くさい」
それに、ミハイルの巨体ではどうせ扉を壊すことになる。同じ壊すなら、堅牢な扉よりも割れやすい窓のほうが楽だ。
「ゼロって、ほんとにらんぼう……」
「いいから行け！」
はぁい、と今ひとつ気乗りしない返事の後、ミハイルが窓に体当たりをかけた。色とりどりの破片が煌めきながら飛び散る。もちろん、ミハイルは傷ひとつ負うでなく、頭を一振りしただけで破片を払いのけた。

突入してみると、中はやたらと広い。天井から床までは十分過ぎるほどの高さがあり、ミハイルが勢い余って床に身体をぶつけることもなかった。
しかも、着地した場所からワンのいる場所までかなりの距離がある。大広間、などという言葉では追いつかないほどの広さだった。
ミハイルの背から飛び降り、ワンのほうへと歩く。少し遅れてミハイルがゆっくりと後をついてくる。
椅子に座って本を広げていたワンが顔を上げた。その周囲にはワンを守るかのように、ゴーレムの石像が三体並んでいる。魔物の石像とは教会にはそぐわない装飾品だな、とゼロは思う。
「何を読んでるんだ？」
呼びかける声が足音と共に幾重にも反響した。
「教会都市についての記録だよ」
ワンが学者連中の真似事をしている、という噂はどうやら本当だったらしい。教会都市、つまり旧世界の遺跡など調べて何が面白いのやら。さっぱりわからない。
「この地には、かつて〝花〟が封印されていた」
覚えているだろう、とワンがゼロを見る。覚えているも何も、その〝花〟を破壊したのは他ならぬゼロとミカエルだった。

「封印したのは誰か？　なぜ、この地だったのか？　そもそもこの地は何なのか？　それがわかれば、ウタノチカラや私達ウタウタイについての疑問が解消するかもしれない。私達は何なのか？　私達にはなぜ、このチカラが与えられたのか……」
「それを知ってどうする？　知る必要なんてないだろう？　そういうのを時間の無駄、と言うんだ」
本を閉じ、ワンが小さく息を吐いた。
「或いは、愚行と呼ぶべきか。そうだな。必要か必要でないかと問われれば、確かにそのとおりだ」
けれど私は、とワンが続ける。
「知りたかった。私達の記憶の齟齬に気づいたそのときから」
妹達は〝花〟によって偽りの記憶を植え付けられていた。ワンも例外ではなかった。それぞれの統治国に入るまで妹達は五人揃って行動していたから、何かの折に「思い出話」が出ることもあっただろう。そこで互いの記憶に食い違いがあることにワンは気づいた。
「トウは優しい両親の記憶を持ち、スリイは両親を嫌っていた。フォウは両親を憎悪し、ファイブには父親が死んだという記憶だけがあり、そして私には……次女であるはずの私には、両親の記憶が全くなかった。私達が六人姉妹で、共に暮らしていたことを覚えているというのに」

変わらぬ足取りで、ゼロはワンに向かって歩く。足音がやけに耳障りに響いた。
「だから、私は調べた。教会都市に残された膨大な書物を片っ端から読んだ。私達が何者であるのか、私達はどこから来たのか、私達の存在に意味はあるのか、私達がこの世界で果たすべき役割は何なのか、この世界は私達に何を求めているのか、世界は……」
それで、とゼロはワンの言葉を遮った。気がつけば、ワンの間近にまで来ていた。
「わかったのか？」
「納得のいく答えは得られなかった。でも」
ワンが立ち上がる。
「ひとつだけ、確かなことがある。私達は、この世界には不要だ」
「それなら話は早い」
剣を抜き、ワンに向ける。
「死んでもらおうか」
ワンの表情は動かない。怒るでもなく、笑うでもなく、嘆くでもなく。ただその唇だけが静かに動いた。
「歌え。アブディエル」
その言葉を合図に、三体のゴーレムに光が走る。床に魔法陣が展開していく。教会という場所には不似合いだと思った魔物の石像は、ワンの使役する天使、アブディエルだった。

巨大な拳が迫る。咄嗟に飛び退く。ゼロが立っていた場所に拳がめり込む。それがワンの出した答え、ということだ。

「ゼロ！　早く乗って！」

ミハイルの背に飛び乗ると同時に、ゴーレムの放つ赤い光が周囲を切り裂いた。ミハイルが炎で応戦する。ゴーレムとは幾度か戦ったことがあるが、天使として使役されているゴーレムを目の当たりにするのは初めてだった。

ミハイルの吐く炎がゴーレム達をすっぽり覆い尽くす。すさまじい高熱に晒された石が真っ赤に焼け、膨れ上がり、爆ぜる。

「やった……か？」

ばらばらに砕けた石像の手足が吸い寄せられるように集まり、再び形を成した。あの程度で倒せるような容易い敵だとは思っていなかったから、さしたる驚きはない。

むしろ、大聖堂の頑丈さに驚いていた。複数のゴーレムとドラゴンが暴れても、あれほどの炎と爆風に晒されても、柱一本折れることなく、天井や壁が崩れることもない。おそらく内側からの衝撃に対しては、何らかの魔力で保護されているのだろう。外側から窓を破って突入するのは簡単だったのだから。

「やっつけたのに！　元に戻っちゃうなんて、ずるいよ！　ずるいよ！」

倒したと思ったゴーレムが元どおりになったのがよほど悔しいのか、ゼロが何も言わな

いうちにミハイルは再び炎を吐いた。またも石の手足が砕け飛ぶ。それらが再び集って形を成す瞬間、ゼロは気づいた。赤く光る何かを中心に、ばらばらになった石が吸い寄せられ、集まっていくのを。
「あの核を狙え！」
「えっ？　どれ？　どれのこと？」
「とにかく、もう一度ブッ壊せッ！　壊せばわかるッ！」
三体の石像のうち、一体に隠されていた赤い核。あれが石像を動かしている魔力の源であり、アブディエルの本体に違いない。
三たび業火の中でゴーレムが砕け散る。ばらばらになった手足が空中を走り、渦を巻く。
「あれだ！　叩き潰せっ！」
今度はミハイルも赤く光る核に気づいたのだろう。石の手足が集まる前に核に体当たりをかける。核が弾き飛ばされ、行き場をなくした手足が空中で動きを止めた。
「焼き払えッ！」
赤い核めがけて、ミハイルが火の玉を吐き出した。巨大な火球が核を呑み込み、押し潰す。だが、そこで空中に浮いていた石の手足が防壁のように核の周囲を取り巻いた。かと思うと、それらはまたも寄り集まって、ゴーレムに戻ろうとする。
「もっと強く！　アレが元に戻る前に焼き尽くせ！　早く！」

ミハイルが続け様に火球を吐く。石の手足が弾き飛ばされる。赤い核の周囲に障害物がなくなったところで、一際強力な炎が襲う。今度こそ、赤い核は粉々に砕け散った。

床に展開していた魔法陣がかき消される。アブディエルの本体が破壊された後には、石の塊が転がっているばかりだった。意外に呆気ない幕切れだが、ガブリエルを使役した直後であれば、使える魔力もこんなものかもしれない。

「ワン！　次は……」

貴様の番だ、と言いかけたゼロはぎょっとした。いつの間にか天井近くに魔法陣が展開している。

「祝福せよ、ラファエル！」

ワンが高く右手を挙げる。魔法陣が開く。

「馬鹿な⁉」

悲鳴にも似た言葉が漏れる。あり得ない。ウタウタイに召喚可能なのは、せいぜい一体。使徒の詠唱(えいしょう)がなければ、その一体でさえ自我崩壊の危険と背中合わせである。それほどまでに、天使の召喚はウタウタイに負荷をかける。フォウなどはその負荷に耐えられず、一気に精神の均衡を崩した。

ワンは精神状態を正常に保ったまま、単身でアブディエルを召喚した。それだけでも十分驚きに値するのに、この上さらに別の天使を召喚するとは。

「バケモノか、ワンは……」

光に包まれて魔法陣から現れたのは、蜘蛛の姿の天使だった。毛むくじゃらの脚が床を這う。決して動きは速くないが、ゼロの本能が危険を告げた。

「避けろ！」

ミハイルが空中を横滑りする。同時に、ラファエルの口から何かが吐き出されるのが見えた。不愉快な音をたてて、白い網状のものが壁に貼り付いた。

「蜘蛛の糸、か」

獲物を捕獲するために、現実の蜘蛛は糸を吐く。ということは、蜘蛛の天使が吐くあの糸には、ドラゴンの動きさえも封じる強い拘束力があるに違いない。

「ヤツの正面には行くな！　横か後ろに回り込め！」

「わかった！」

ミハイルが横へ横へと回り込みながら、ラファエルに向かって炎を吐く。その形状と習性が現実の蜘蛛に酷似しているのだから、炎に弱いという虫特有の弱点も共通しているはずだ。

その狙いは過たず、炎がその胴体を掠めるなり、ラファエルは甲高い声を上げた。白い網を滅茶苦茶に吐き出し、のたうち回る。

「いいぞ！　これなら……」

ただ、前後左右への動きこそ鈍かったものの、体の向きを回転させるのは予想外に速い。炎が何度か掠めたものの、直撃には至らない。また、背後を取ろうとしても、すぐに向きを変えられてしまう。正面を避けるのが精一杯、横に回り込むことさえ難しい。

白い網以外にも、時折、黒い霧のようなものが吐き出されている。現実の蜘蛛は霧など吐かない。だとすれば、あれは何なのか？

「また逃げられたっ！　あんなの、ひきょうだよ！　ひきょーら……れれ？」

不意にミハイルの呂律が怪しくなった。

「どうした？」

「なんか……カラダ…が……ヘン」

視界が不自然に揺れる。ゼロもまた身体の不調を感じた。

「くそっ！　毒か！」

時折、ラファエルの口から吐き出されていた黒い霧は毒だったらしい。霧を吐く蜘蛛は現実にいなくても、毒を持つ蜘蛛ならいくらでもいる。

「おい！　大丈夫か？」

「うん……らいりょーぶ……ぜろ…は？」

ミハイルの返事は、少しも大丈夫ではなかった。ひとまずこの場を離れて、体勢を立て直したほうがいい。幸い、ラファエルに飛行能力はない。突入時に破った窓から外へ出れ

ば、邪魔をすることも追ってくることもできないだろう。そう考えて、天井近くの窓に目をやったゼロは愕然とする。

破壊したはずの窓は結界らしきもので塞がれていた。アブディエルと戦った際、内側からの衝撃に対する耐久性に驚かされたが、それは単に建物を守るという目的のためではなかった。ゼロ達を逃がさないこと、それこそが目的だったのだ。

「この程度のザコ、とっとと倒すぞ！　グズグズするなっ！」

離脱するのが無理なら、毒の源であるラファエルを倒すしかない。

「うん……。わかっ…た……」

弱々しい声だった。フォウとスリイを捕食する以前のミハイルであれば、この時点でやられていたかもしれない。幸い、今のミハイルは体力も防御力も格段に上がっている。急げばまだ間に合う。

「行けッ！　クソドラゴン！」

ミハイルの炎と同時に、ゼロも全身からウタノチカラを絞り出す。視界が切り替わった。喉の奥が激しく震え、魔力がミハイルと一体化するのがわかる。

この一撃で仕留める。何としてでも。

揺らぐ視界いっぱいに炎が広がった。業火の中、ラファエルが燃え上がるのが見える。尻餅でもつくように、ミハイルが着地した。魔法陣が光を失い、ラファエルの姿が消滅

する。
ずるずると滑り落ちるようにして、ゼロはミハイルの背から降りた。大丈夫か、と声をかけたかったが、荒い息が吐き出されるばかりである。〝花〟の桁外れな再生能力があっても、苦しいものは苦しい。
「ゼロ……っ！」
押し殺したような声がした。部屋の片隅に、ワンが立っている。顔を白くしているのは、結界内で同じ毒を吸い続けたせいだろう。
「貴様だけは……許さない」
目を疑った。ワンの背後にまたも魔法陣が展開している。アブディエル、ラファエルに続いて、さらに天使を召喚するつもりらしい。
「来い！　ガブリエル！」
いったいどれだけの負荷に耐えているのか。ワンの思念からは何の乱れも感じられない。伝わってくるのは、ただただ強烈な意志だけである。ワンは途方もなく強い意志で以て体内の〝花〟を抑えつけ、理性を保ったままでチカラを使いこなしている。
バケモノだ、と思った。自分から生まれたとは思えないワンは、やはり理解不能のバケモノだった。足許がぐらつくのがわかった。驚きのせいなのか、毒による不調なのか、まっすぐに立っていられない。

背中がミハイルの身体にぶつかった。そうだ、ミハイルだけでも安全な場所へ逃がさなければ、と考えたときだった。
「ゼロ……。ボクね、がんばるから」
ゆっくりとミハイルが立ち上がった。
「ガブリエルは、ボクにまかせて。ゼロは……ワンを」
ミハイルがガブリエルからゼロをかばうように翼を広げる。不意に、ミカエルの声がその姿に重なった。
『ゼロッ！　貴様は妹達を倒しに行けっ！』
思わず目を見開く。萎みかけていた気力が再燃する。繰り返すわけにはいかない。一年前のように失いたくない。もう二度と。今度こそ。
ミハイルには未来がある。この先、数千年を超えるであろう長い寿命がある。それを奪わせはしない。
剣をきつく握りしめ、しっかりと足を踏みしめる。
「わかった！　クソドラゴン！　さっさと終わらせてここを出るぞっ！　いいな！」
剣を振りかぶり、ワンに向かって走る。一刻も早くミハイルを安全な場所へ連れ出すために。
ワンの手から戦輪が放たれるのが見えた。ワンもオクタと同じ戦輪使いだった。扱いこ

そ難しいが、身長が低いという体型的な欠点を補うには最良の武器だからだろう。
唸りを上げて回転する刃を剣で受け止める。弾き返したかったが、わずかに動作が遅れた。戦輪は弧を描いてワンの手許へ戻っていった。
再び戦輪を構えたワンが口を開いた。毒のせいか足許は覚束ないが、その目には強い怒りの色がある。
「さっさと終わらせるだと？　笑わせるな！　私達を生み出した元凶の分際で！」
知っていたのか、と思う。だが、驚きは薄い。教会都市の書庫にこもって、あらゆる書物を読み耽り、無数の知識を吸収していくうちに、ワンが自力で辿り着いたであろうことは、推測がついていた。自分達が〝花〟によって生み出された存在であり、姉だと思い込んでいたゼロの中にあったモノだという結論に。
「たとえ造られた存在であっても、妹達は生きていた！　トウも、スリイも、フォウも、ファイブも、生きていたんだッ！」
叩きつけんばかりの勢いで、ワンが戦輪を放つ。
「妹達の魂に誓って、私は貴様を許さない！」
長剣全体を使って、回る刃を受ける。強く足を踏ん張っていないと薙ぎ倒されてしまいそうなほど、その威力はすさまじい。ワンの怒りそのものだ。
「おとなしく殺されてなんかやるものか！　勝手に造られて、勝手に殺されて……。そん

なの、納得できるはずがないじゃないか！」
　納得できない……。
　ああ、そうだったのか。つい先刻、ワンは「納得のいく答えは見つからなかった」と言った。ワンはずっと「納得のいく答え」を探していたのだ。ワンは真実を知りたかったわけじゃない。ただ、納得したかっただけだ。自分自身に、自分の運命に、自分の死に。
　私がいた、ワンは私だ、と初めて思った。
　罪人として裁かれ、刑場で死に瀕していたとき、世界のすべてを憎みながら思った。納得がいかない、と。裏切られ続け、奪われ続けた自分の一生に納得がいかなかった。正しい者が報われるとは限らない、狡い者ばかりが得をする、そんな世間に納得がいかなかった。誰よりも高潔で優しい心根の少女が虫けらのように殺される、そんな世界に納得がいかなかった。
　なぜだ？　誰か私に教えてくれ！　私に答えを与えてくれ！
　生死の狭間でそう願った。声にならない声で叫び続けた。世界を呪いながら、同じ強さで世界に問うた。理解できないと思っていたワンの正体はそれだったのだ。
　そこがわかってしまえば、簡単な謎解きだった。ワンは正義感が強かったわけではない。正しくないものは納得できなかった。ただそれだけだ。民を虐げる領主の存在も、腐敗しきった貴族達も、理屈で「納得できない」から排除した。

自分を納得させたいから、生真面目に物事に取り組み、自分を取り巻くあらゆるものに納得したいから、書物を読み耽(ふけ)った。理解し難いと思えた性格や行動も、その動機はひとつだった。

「そうだな。私が元凶だ」

ワンの双眸(そうぼう)に炎の色を見た。赤い瞳が憤怒(ふんぬ)と憎悪で燃えている。ゼロが手に掛けてきた者達の血を集めたかのような瞳の色だった。それが炎となってゼロを焼き尽くそうとしている……。

償え、とワンの唇が動いた。その命で償え、と。贖罪(しょくざい)を求める刃が襲いかかってくる。剣を盾に変えてそれを受け止める。おとなしく殺されるわけにはいかないのはゼロも同じだった。

何度も打ち合った。ワンの操る戦輪と、ゼロの振るう剣とが何度もぶつかった。唸(うな)りを上げて襲ってくる戦輪を打ち返し、戦輪を掻い潜って振り下ろした剣が躱わされた。

「キミ達を生み出した。私が。だから」

目の前に迫る戦輪を剣で受け止め、弾き返す。間髪を容れずに剣を突き出す。まっすぐに。自分の分身へと。

「許されるつもりなんか、最初から無い！」

握る手許に強い手応えを感じた。ワンの額を剣が抉(えぐ)っている。ワンが絶叫する。ウタノ

チカラが叫びとなり、衝撃波となり、大聖堂全体を揺るがす。
同時にゼロもウタノチカラを解き放つ。剣に乗せて、ワンの頭蓋内（ずがいない）へと、体内へと叩き込む。
背後でガブリエルの咆哮（ほうこう）を聞いた。そして、倒れる音と。
剣から伝わる反動が消える。ウタが止み、沈黙が訪れた。ゆっくりとワンが倒れ、その身体から黒い靄（もや）が立ち上り、やがて薄れていった。動かなくなったワンを残して。
「終わったよ」
振り返ったゼロは凍り付いた。目を疑った。倒れていたのは、ガブリエルだけではなかった。その傍（かたわ）らにミハイルが倒れている。
「ウソ……だろ？」
炎の直撃を受けたらしく、ガブリエルの死骸は胸から頭にかけて黒焦げになっている。対するミハイルは喉元を大きく抉られていた。倒れる音は一度しか聞こえなかった。相討ちだった、ということか。
いや、相討ちなんかじゃない。ミハイルは死んでなんかいない。気を失っているだけだ。ゼロはミハイルに駆け寄り、その胸に手を当てる。しかし。
「そん……な……」
石のように静かで冷たい胸から手を離し、今度は閉じたままの瞼（まぶた）に手を触れる。

「起きろ！　いつまでも寝てるんじゃない！」
顎の下を殴りつける。寝ぼけて蹴りを入れては嫌がられた場所だ。何度も殴った。何度も、何度でも。
「起きろって言ってんだろ！　クソドラゴン！　何を勝手に……勝手に……死んでる！」
瞼は閉じられたまま、動かない。殴っても、蹴っても、揺さぶっても。ただ静けさだけがある。
「また私を置いていく気か！　また……私を……っ！　どうして……」
ミハイルの姿が、声が、脳裏をよぎった。共に過ごした日々が浮かんでは消える。
転生したばかりの頃、ミハイルは何も知らない赤子同然の竜だった。幾つかの言葉は話したけれども、「なぜ？」「どうして？」「これなあに？」ばかりを繰り返していた。世界のすべてがミハイルには新しく、驚きに満ちていたのだろう。話す言葉はすべて問いの形をしていた。
毎日のように泥だらけになって遊んではゼロを怒らせた。ゼロにじゃれつこうとして道を突き崩し、真っ逆様に海に墜落したこともある。傷の痛みに苦しむゼロのために食べ物を探しに行ってくれたこともあった。
わずか一年。振り返れば束の間だった。邪険にしたこともある。優しくしてやったことなど数えるほどしかない。なのに、雛が親鳥を慕うように、ミハイルはゼロから離れよう

としなかった。ミカエルの記憶もなく、約束を覚えていたわけでもないのに、ずっとゼロの側にいた。

共にエンシェント・ドラゴンに立ち向かった。本能的な恐怖をゼロの言葉ひとつで乗り越えた。それほどまでにミハイルはゼロを信じていた。ゼロはその重さに戸惑い、しかし、その重さを心地よく感じた。

ミハイルは決してゼロを裏切らなかった。ミハイルだけではない。ミカエルもそうだ。騙され、裏切られ続けてきたゼロにとって、初めて信用してもいいと思える相手は同じ人間ではなく、種族を異にするドラゴンだった。

「ミハイル……」

とうとう名前を呼んでやらなかったという後悔が胸を灼いた。意地悪をしていたわけではない。ただ、怖かったのだ。ミカエルのように名前を呼んで、ミカエルのように心を許して、そして失うことが。

「なんで私じゃないんだッ！」

なぜ、自分ばかりが生き残り、大切な仲間ばかりがいなくなる？　死んでしまえばいい自分ばかりがいつもいつも生き延びるのは、なぜだ？

「こいつのせいだ！」

この〝花〟があるばかりに、死にたくても死ねない。この〝花〟の気違いじみた再生能

力のせいで。
「こんな……こんな花ッ！」
右目の〝花〟を力任せに引き抜こうとしていた手が止まる。
「花……」
このチカラを使えば、ミハイルを生き返らせることができるのではないか？　この非常識な再生能力があれば。
やり方はわかる。必要なチカラが育っていれば、誰に教えられずとも使うことができる。歩き、走り、そして飛び跳ねて、やがて様々に身体を動かす術を覚えていく子供のように。
今の自分なら、それができる。
ただ。このチカラを使って蘇らせるということは、同時にミハイルをも〝花〟の呪いに引きずり込むことを意味する。ミハイルはそれを望むだろうか？
わかっている。これは過ちで、自分勝手な行為で……罪だ。また置いて行かれるのが怖くて、一人にされたくなくて、自分はミハイルを道連れにしようとしている。
「……ごめん」
それでも死なせたくない。これほどまでに誰かに生きていてほしいと願ったことはなかった。
「我は命じる！」

鼓動を止めた胸に手を当てる。
「ウタノチカラをもって、この竜の命を救うため……」
チカラの使い方は正確に把握している。使徒を造ったときもそうだった。初めて実行することであっても、手順は理解していた。
「ここに〝契約〟の誓いを立てん！」
聖堂内の魔力とウタノチカラが混ざり合い、渦を巻く。魔法陣が展開する。
「東方の神、西方の女神……」
光が噴き上がる。チカラが迸る。
「我が代償に捧げるのは、この生命の焔。彼が代償に与えられるのは、呪われし花の……呪縛」
チカラが全身を駆け巡り、奔流となる。向かう先はただひとつ。
「ミハイル……」
真っ白に塗り潰された視界に意識が吸い取られていった。

〈5〉

大聖堂の中は清浄な気に満ちていた。蜘蛛の吐き出した毒も、ウタノチカラによる結界

も、すべて跡形もなく消え去った。割れたステンドグラスから陽光が射し込んでいる。もう夕刻なのだろう。その光は赤みを帯びて柔らかい。

ゼロは背伸びをしてミハイルの胸に耳を押し当てた。ゆっくりと、だが力強く脈打つ音がある。安堵の息を吐いた途端、足許に服が滑り落ちた。慌てて拾い上げ、身体に巻き付ける。子供の身体に大人の服は無理があった。

まさか、身体が子供に戻ってしまうとは想定外だった。〝花〟にチカラを奪われて妹達が生まれたときには、体型は変わらずにただ動けなくなっただけだった。だから、今回も似たようなことになるのだろうと思っていた。

どうやら、他者を生かすためにチカラを分け与えた場合は、身体的な変化となって現れるらしい。

「おーい!」

呼びかける声は幼い子供のもので、何やらひどくきまりが悪い。視点が低くなったせいか、ミハイルがやたらと大きく見える。それが少しばかり癪に障り、ゼロはミハイルを蹴飛ばした。もっとも、子供の脚力では蚊に刺されたほどの痛みも感じないに違いない。

それでも、いくらかは振動が伝わったのだろう。むくりとミハイルが身を起こした。

「ゼロ?」

頭よりもずっと高い位置にあったミハイルの頭が降りてくる。ゼロの姿を見たミハイル

が戸惑ったように左目だけで瞬きをした。
「ええと……。ゼロだよね？」
その右目には花が咲いている。わかってはいたが、胸の奥が鈍く痛んだ。ミハイルが生き返ったという喜びがみるみる萎んで、苦い後悔が広がった。それを悟られまいと、殊更に胸を張り、口を開きかけたときだった。
「ゼロ！」
ミハイルが叫んだ。何が起きたのか、わからなかった。気づいたときには、床に転がっていた。
「よくも……よくもゼロを……！」
ミハイルが鉤爪を振り上げているのが見える。激怒しているとわかる動きだった。振り下ろされた先にいた何者かが、慌てたように飛び退く。
いったいどうしたんだと問いかけようとした口の中が妙な具合に渇いている。唾を飲み込むと、血の味がした。息ができないほど苦しいことに今更のように気づく。
ここに至って、ようやく理解した。斬られた、と。噴き出す血が見えた。ミハイルが見えた。炎を吐こうと大きく胸を反らせている……。
誰だ？　自分は誰に斬られた？　ミハイルは誰を焼き殺そうとしている？
疑問の答えを探して、必死で首を巡らせ、目を凝らした。

「ワ……ン……!?」
両の瞼が全開になるのがわかった。なぜ、ミハイルがワンに向かって炎を吐こうとしている？
しかし、炎がワンに襲いかかることはなかった。ミハイルの身体が傾いた。倒れる振動が冷たい床からゼロの全身に伝わってくる。
なぜ、ミハイルが倒れる？　なぜ、自分は倒れている？　なぜ？
わけがわからない。頭の中がぐちゃぐちゃにかき混ぜられているようだ。なぜ、殺したはずのワンが立っていて、生き返ったはずのミハイルが倒れている？
「違う。ワンじゃない」
男の声が降ってくる。
「俺は弟だよ。ワンの、弟だ」
うるさい、私が知りたいのはそんなことじゃない、と叫びたかった。しかし、それは一言たりとも声にはならず、また男も見当違いな答えしか投げ返してこない。
「アンタが妹達を造ったように、俺はワンに造られた」
聞きたくもなかったが、その言葉で理解した。一瞬で、頭が冷えた。
ワンは使徒を造らなかったと言った。それは嘘ではなかった。ワンは自分自身の分身、「弟」を造り、使徒の代わりを務めさせていた。

ここから先は推測に過ぎないが、ワンは他の生き物をチカラの制御装置として使うことに抵抗を覚えたのではないか。自分自身であれば、どんな使い方をしてもいい。そう考えて、使徒ではなく「弟」を造ることにした……。

ワンの弟を名乗る男が傍らに何かを放った。その乾いた音はおそらく剣だろう。たった今、ゼロを斬ったばかりの剣、だ。

「ワン姉さんがアンタに殺されたときの切り札。それが俺だ」

ゼロ、ゼロと苦しげな声がした。荒い息遣いは死に瀕した者のそれだった。

生き返らせたはずだった。ミハイルを死なせたくない一心で、〝花〟の再生能力を使って〝契約〟という新たな魔法を編み出した。チカラを分け与え、一心同体となり、〝花〟の呪縛に引きずり込んでまで果たしたミハイルの蘇生だった。

それが裏目に出た。幼い子供に戻ってしまったがために、ゼロは呆気なく斬られ、最期を迎えようとしている。そのゼロと一心同体になっていたがために、ミハイルは反撃することさえ叶わず、せっかく取り戻した命を再び失おうとしている……。

ワンそっくりの男はまだ何か喋り続けていたが、もうゼロには聞こえなかった。

「ミハ…イル……ごめ……」

謝罪の言葉すら満足に伝えられない。俄に辺りが暗くなる。せめてミハイルの姿を目に焼き付けようと、残る気力を振り絞って視線を動かしたときだった。視野の片隅に信じら

れないものが映り込んだ。
あの女。海を見下ろす崖の上で殺したはずのアコールが柱のそばに立って、じっとゼロを見ている。
まさか生きていたとは。あの高さから海に落ちたのだから、確実に死んだと思っていたのに。
殺そうと思った女は死なず、生きてほしいと願った友は死んだ。宿命だの運命だのという薄ら寒い言葉は大嫌いだが、皮肉な巡り合わせにばかり終始した自分の生前と死後とを他にどんな言葉で表せばいいのか。
アコールが踵を返すのが見えた。ゼロの死を見届けるためだけにここへ来た、ということか。すぐにその背中が闇に紛れて見えなくなった。倒れているミハイルも、大聖堂の冷たい床も、何もかも。
これで終わるんだ、と思った。許されても、許されなくても。救われても、救われなくても。ようやく、すべてが無に帰る。
死の闇に安らぎなどないことは知っていたが、それでも、ゼロはひたすらにその瞬間を待った。

今でも時々、夢に見る。ワン姉さんがゼロに殺されたその瞬間を。そう、僕はずっと見ていたんだ。

ワン姉さんの計画に抜かりはないはずだった。ゼロとドラゴンを聖堂に誘い込み、結界を張った。自分の命を使って、姉さん自身にも決して解けない結界を。結界が解けるのは、姉さんが死んだときだけ。

たぶん、姉さんは自分が死ななかったときのことも考えてたんだろう。もしも死ねずに〝花〟に支配されてしまっても、結界の中に閉じ込められていれば、世界は災厄に見舞われずに済む。

そんな強力な結界の中で、姉さんはまずアブディエルを召喚して、ゼロとドラゴンを疲れさせた。その程度では倒せなかったから、次に毒を吐くラファエルを呼んだ。ゼロとドラゴンは毒に苦しんだけど、やっぱり倒せなかった。

姉さん自身も毒に侵されながら、最後に召喚したのはガブリエルだった。最後の最後まで召喚しなかったのは、ガブリエルにはなるべく毒を吸わせないようにするため。毒で弱ったドラゴンと、たいして毒を吸っていないガブリエルなら、勝敗は明らかだ。だっ

て、一年前、転生前のドラゴンはガブリエルに敗れていたんだから。
それに、ガブリエルは特別な天使だから、姉さんへの負荷はほとんどない。それまでの召喚で消耗していても問題なく呼べる。
でも、姉さんが予想した以上に転生後のドラゴンは強かった。毒にやられて弱っているはずなのに、ガブリエルと互角に戦った。
ゼロも強かった。ガブリエルとドラゴンは相討ちだったけど、姉さんは負けてしまった。僕は結界の外側で、姉さんが殺されるのを見ていた。ゼロの剣が姉さんの額に突き刺さる瞬間から、倒れて息絶えるまでの一部始終を。
そして、結界は消滅した。僕がゼロを殺さなければならなくなった。姉さんの誤算は、僕が弱虫だったこと。姉さんの死を受け止めるには心が弱すぎたこと。ほんの少しの間だったけど、僕はその場から動けなかったんだ。姉さんが死んで悲しくて、姉さんを殺したゼロが恐ろしくて。
僕が動けずにいる間に、ゼロはドラゴンの命を救うために〝花〟の再生能力を使った。この世界における最初の〝契約〟だった。
その結果、自分がどうなるか、何が起きるか、ゼロも正確なところは把握していなかったんだろう。もしも、すべてを知っていたとしたら、ゼロは〝契約〟を実行しなかったんじゃないかと思う。

でも、ゼロは〝契約〟によってドラゴンを蘇らせた。ウタウタイのゼロと白いドラゴンは、この世界で最初の契約者となった。

その姿を目の当たりにしたとき、僕は本当にびっくりしたんだ。だって、あの悪魔のようなゼロが小さな子供になってしまったんだから。あれなら僕でも殺せると思った。姉さんを殺されて怖じ気付いていた僕は、勇気を取り戻した。

ゼロとドラゴンは、僕が間近に迫っても全く気づかなかった。たぶん、ドラゴンは子供に戻ってしまったゼロに驚いたんだろうし、子供に戻ったゼロは能力全体が低下していたんだろう。迫る殺気に気づくことができないほどに。

僕は難なくゼロの背後に回り込み、ガブリエラの牙から作った剣でゼロを斬り殺した。全く反撃されなかった。ゼロは無抵抗のまま、死んだ。ドラゴンは反撃してきたけれど、間に合わなかった。〝契約〟によってゼロと一心同体になっていたせいで、炎を吐く前に力尽きた。

皮肉なものだね。ドラゴンが生き返ったのは、ほんの束の間だった。ゼロが何をやっても、ドラゴンが死ぬという結果を覆すことはできなかったんだ。

もしも、ゼロが子供の姿にならなかったら、僕はゼロを殺せなかったかもしれない。柱の陰で剣を握りしめたまま、ぶるぶる震えるばかりだったかもしれない。

呪われたウタウタイの分際で誰かを救おうとしたことがゼロの命取りになった……。

そういえば、死に際のゼロが名前を呼んだら、ドラゴンがうれしそうな顔をしたような気がした。死にかけているのに喜ぶなんて、おかしな話だから、僕の錯覚かもしれないけれども。

ゼロを殺して、ドラゴンが死んで、僕はしばらく呆然と立ち尽くしていた。僕はこれ以上ないくらい、打ちのめされていた。姉さんとガブリエルは死んでしまった。誰が世界を、誰が僕を護ってくれる？

あのとき、僕は少しおかしくなっていたのかもしれない。何もかもが恐ろしくて、何も考えずに逃げ出した。

たぶん、姉さんは僕がその場で死ぬことを望んでたんだと思う。結界が解けてゼロを殺したら、残っていた毒を吸って僕は死ぬ。そうすれば、〝花〟の影響を受けた者は一人もいなくなる……。

まさかゼロが〝契約〟を行ったことによって、聖堂の毒が浄化されてしまうなんて、想像もしていなかったんだろう。〝契約〟はゼロの誤算でもあり、姉さんの誤算でもあったんだ。

そこから先の話は、きみも知ってのとおり。塔の一室に逃げ込んで、ずっと閉じこもっていた僕は、教会の人々に発見された。僕は「ワン」と名乗って、姉さんになりすまし、新しい教会を作った。ワン姉さんと、姉さんのために死んだガブリエルと、姉さんのため

に天使になったガブリエラを讃える「天使の教会」を。
その後、ふとした偶然で、きみは僕の正体を知ってしまった。いや、責めてるんじゃないよ。感謝してるんだ。僕一人では、抱えきれない秘密だったから。きみが共犯者になってくれて、僕は救われた。
もしも、きみが助けてくれなかったら、これほど長い間、教会の宗主として振る舞っていられたかどうか。
そういえば一度だけ、教会都市から外に出たことがあったね。きみは不思議がっていたけれど、今までの話で理由がわかっただろう？　なぜ、僕が森の国へ行きたがったのか。
確かめなければと思ったんだ。あの後、森がどうなったか。
驚いたことに、森はすっかり元の姿を取り戻していた。毒の霧なんてどこにもなかったし、妖精もエルフも戻ってきていた。姉さんと僕は揃って夢を見ていたんだろうか、なんて思ったよ。
でも、そうじゃなかった。異変は確かにあった。あれは夢なんかじゃなかった。
なぜ、それがわかったかって？　同じ異変が教会都市を襲ったからだよ。きみも覚えているね？　まだ五年しか経っていないんだから。
西暦一〇一二年。あの日、大聖堂で同じ異変が発生した。誰もが世界の終わりが訪れたと思った。あれが森の国で発生した毒霧と同じモノだと知っていたのは、僕一人だった。

毒の強さは少しばかり違っていたけれども、気配は同じだからすぐにわかった。
その場に集った信者達がばたばたと倒れ始めたとき、何とかしなければと思った。僕はホンモノのウタヒメじゃないから、ウタノチカラは使えない。けれども、ただの人間でもないから、少しばかり強い魔法が使える。
毒霧を自分自身に引きつけて、その間に人々を逃がす。それくらいなら、僕にもできると思った。
慢心していたんだ。今にして思えば。ワン姉さんになりすまして、人々から宗主様と崇められ、それで世界を救った気になっていた。自分にはそれだけのチカラがあると、思い上がっていた。
ワン姉さんでさえ、森の異変を止めることはできなかった。異変は勝手に始まって勝手に広がり、そして勝手に消えた。人がどうこうできるものじゃない。僕はそれを知っていたはずだったのに……。
異変を止められずに、巻き込まれかけた僕を救ったのは、信者の一人だった。信仰心の厚い彼女は、身を挺して「宗主様」を助けようとしたんだ。そして、代わりに異変に巻き込まれた。
驚いたことに、それで異変が止まった。僕の使った中途半端な魔法と、そこに身を投げた女性とが絡み合い、何らかの変化を遂げたことによって。

ああ、そうだったね。きみもその場にいたんだった。でも、一部始終を見ていたきみにも、何が起きたのかさっぱりわからなかっただろう？　僕もそうだ。何がどうなったのか、まるっきり理解できなかった。

理由はわからなかったけれど、とにかく異変は止まった。森の国のときと違って消えたわけじゃない。止まっただけだ。いや、ひょっとしたら、森の国の異変も消失したのではなく、場所を移しただけだったのかもしれない。森の奥から教会都市の大聖堂へと。

ただひとつ確かなことは、あれを止めていられるのは、生きた人間だけ。あの女性信者が苦しみながら死んでいった後、再びあれは動き始めた。そう、誰かがその身を投げ出さない限り、止められない。彼女の犠牲と死によって、それがわかっていた。

だから、きみが名乗りを上げたとき、誰もが安堵した。これで、きみが死ぬまで自分達は安全でいられるって。勝手なものだね。

なぜ、僕がそれに反対したのか？　理解できないって？　姉さんが命懸けで護ろうとした世界を代わりに僕が護りたいって、口癖のように言っていたのにって？

そんなの綺麗事だよ。僕は……姉さんさえ生きていてくれたら、世界なんてどうでもいいんだ。でも、姉さんはもういない。僕には「姉さんの護ろうとした世界」しか残されていなかった。ただそれだけのこと。言ってみれば、世界は姉さんの代用品なんだ、僕にとっては。

……ごめん。悪かった。きみの前で言っていいことじゃなかった。でも、だからこそ。きみが犠牲になる必要なんかないと思った。世界なんかのために、きみ一人が苦しむ必要なんて、ない。だから、反対したんだ。
けれど、僕一人が反対したところで何も変わらなかった。天使の教会の宗主が反対したというのに、揉み消された。なかったことにされてしまった。僕の知らないところですべてが決まり、僕の名で実行に移されるようになっていた。いつの間にか僕は、何の権限も持たないお飾りになり果てていたんだ。
一握りの神官達が実権を握り、それと知らないまま信者達は、民衆は搾取されていく。姉さんがあれほど嫌った領主達と同じことをする連中を、僕は作り出してしまった。この教会の中に。
連中はあらゆることを仰々しく飾りたて、権威をでっち上げて、自分達の利益に変えている。何が正義で、何が真実で、なんてことはどうでもいいんだ、奴らにとっては。
あの異変にしたって、何ひとつ解明されていないというのに、連中はさも知ったふうな顔で「大いなる時間が云々」なんて言い出した。あれが止まったのだって単なる偶然なのに、自分達の手柄であるかのように喧伝をした。
連中がきみを何て呼ぶつもりか、知っているかい？　封印の女神、だそうだ。きみが二代目の女神で、五年前に異変を止めた彼女が初代女神。〝封印〟なんてご大層な言葉だけ

ど、元を辿れば僕の出来損ないの魔法なんだからね。笑わせてくれるよ。
この先、幾人もの女神達がこの世界を護るために、苦しみながら死んでいくんだろう。彼女達の家族や恋人は皆、悲しむだろう。運命を呪うだろう。世界を憎むだろう。世界を護るはずの女神が数多の憎悪と悲劇を生むことになる……。
それに、何だか「女神」っていう言葉そのものが不吉な符合に思えてならないんだ。ほら、例の言い伝え。「遠い昔、五人の女神がこの地に降り立った」っていうあれだよ。結局、女神達は、五人のウタヒメは、世界を救わなかった。その強大なチカラに翻弄されて死んでいった。
もしかしたら、女神という名を冠した者達に世界を委ねるのは、危険極まりない選択なんじゃないだろうか。きみにそれを言うのは、残酷なことだと思うけれど。

さて。僕の話はこれで終わり。苦しむきみのために、僕がしてあげられることはもう、何もない。
ああ、ひとつだけ。きみの苦しみを止める術がある。そう、僕がこの手で。この手を汚すことで。言っただろう？　僕にとって、世界の価値なんてそんなもの。目の前で苦しんでいる誰かより重いなんてことは、断じて、ない。
さあ、どうする？　きみは、それを望むだろうか？

DRAG-ON DRAGOON3
STORY SIDE

# 終わりの雨と始まりの花



雨の日は、いつも最悪だった。

しつこいほどに降り続く雨をぼんやりと眺めながら、そんなことを考えた。不意に笑いが込み上げてくる。

だったら、晴れた日が最悪じゃなかったとでも？

「どうした……の……？」

傍らから問う声があった。雨の音に容易くかき消されてしまうほど、か細い声だった。何が、と訊き返して少しだけ後悔した。質問を質問で返してくる人間が私は嫌いだった。そんな奴は二度と口が利けないようにしてやった。いつも。

「だって、あなた……泣いてる」

「キミの勘違いだ。笑ってたんだ、私は」

無理もない。彼女には私がどんな顔をしているのか、わからないのだ。彼女は視力を失っていた。両の瞼をこじ開けられて、眼球に針を突き立てられたのだという。しかも、彼女に対して行われた拷問はそれだけではなかった。手のひらと

足の裏は何度も焼き鏝を当てられたせいですでに腐臭を放っていたし、四肢の関節はどれも破壊されていて寝返りすら打てない。

年端の行かない少女に惨いことをする、とは言わない。領主なんてそんなものだし、だからこそ彼女と彼女の仲間達は蜂起しようとしたのだろう。愚かしくも。

そう、愚かだ。蜂起するどころか、武器を手に取ることすらできずに事は露見した。仲間の密告によって。他人なんて信用するからだ。裏切らない人間なんているわけがない。

首謀者であった五人が捕らえられ、拷問にかけられた。企ての全容と加担した者達の名を言えば解放してやると言われたらしいが、もちろん、嘘っぱちだった。騙される人間というのは何度でも騙される。

もっとも、すぐに白状した者も、彼女のように頑として口を割らなかった者も、ぼろ布のようにずたずたにされて、こうして石畳の広場に転がされている。騙されようが騙されまいが、結果は同じだったわけだ。領主の彼らに対する扱いは、公正とは言い難いものの公平だった。

ひとつだけ、公平でないことがあるとすれば、民を虐げる領主を討とうとしたご立派な五人と、ケチな人殺しの私とがこうして並べて鎖に繋がれていることだ

ろうか。これはどう考えても理に適っていない。
私は彼らと違って、拷問にかけられることもなかった。ご大層な計画もなければ、仲間なんて一人もいなかったから。白状することなど何もなかったおかげで、骨を砕かれたり、爪を剥がされたりすることもなかった。ただ、背中の皮が跡形もなくなるくらい、鞭で打たれただけで。
背中一面に火の手が上がったかのような痛みも今は消えていた。何の感覚もなかった。冷たい雨に打たれているというのに寒さも感じない。もうすぐ死ぬからだとわかっていても、それはひどく奇妙だった。
「ろくでもない人生だったな……」
笑いが止まらない。最良の日なんて一日たりともなかった。雨の日も晴れの日も最悪だった。物心ついたときから、いや、生まれ落ちたその瞬間から最悪だったに違いなかった。
一番古い記憶は母親の怒鳴り声で、その後も殴られた覚えしかない。満足に食べさせてもらっていたかどうかも怪しい。言葉を覚えるより先に、私は食べ物をかすめ取ることを覚えていた。きちんと食事を与えられていたならば、盗む必要などなかっただろう。

私の母親が特段にひどい女だったわけじゃない。温かい食事と寝床を用意してもらえる子供など、幸運な一握りだ。どこぞの貴族様のお家にでも生まれなければ、そんな生活は望むべくもない。何かの間違いで生まれてきて、厄介者扱いされながら育ち、真っ当じゃない大人になって、考えなしに子を孕む。ほとんどの女がそんなものだろう。私の母親は自分が育てられたのと同じやり方で私を育てたに過ぎない。

曲がりなりにも男の相手ができる年齢になると、当然のように母親は私を売り飛ばした。後になって振り返れば、情けなくなるほどの端金で。行き先はお決まりの淫売宿。母親とよく似た女達がしみったれた男達の相手をしていた。

年上の女ばかりではなくて、私と同じくらいの少女達もいた。そのうちの一人と私は仲良くなった。彼女は私を「薄紅」と呼び、それで私は自分の瞳の色を知った。私がそう言うと、彼女は「鏡を見たことがないの？」と呆れた。そのとおりだった。私は自分の顔に興味などなかった。

私は彼女を「紫紺」と呼ぶことにした。自分の顔はどうでもよかったが、彼女の瞳の色は綺麗だと思った。薄紅と紫紺。それが私達二人の間だけの呼び名だった。

あるとき、紫紺が「金を盗んで逃げよう」と言い出した。二人でなら、何でも

できそうな気がしたから、私はうなずいた。どこへ逃げるとか、逃げた後どうするとか、そこまでは考えなかった。

この企ては思いのほかうまくいき、私達は持てるだけの金を持って、町の外に出て橋を渡り、川向こうまで逃げた。そこでは、男が馬を用意して待っていた。男の顔には見覚えがあった。紫紺にご執心だった客だ。なるほど、紫紺が「川向こうまで逃げれば、後は何とかなる」と言っていたのはこういう理由だったのかと納得した。

てっきり私も連れて行ってくれるのだと思っていたが、それはとんでもない勘違いだった。最初から、二人は私を殺すつもりだったのだ。紫紺一人では運べる金も限られているから、私にも声をかけた。それだけのこと。

「悪く思わないでね、薄紅」

そう言って紫紺はにっこりと笑った。いつもと変わらない微笑みだった。ああそうか、この笑顔の下で紫紺は私を殺す算段を付けていたのだと、ようやく気づいた。

そのとき、追っ手がやって来なかったら確実に私の命はそこまでだった。二人は慌てて逃げ出し、私は捕らえられた。

紫紺を恨む気持ちはなかった。自分自身の間抜けさ加減に腹が立った。なぜ、他人の言葉など信用したのか。騙された私のほうが悪いに決まってる。やりようによっては、川向こうで死んだのは紫紺とあの男で、逃げ延びたのは私のほうだったかもしれないのに。次はうまくやらなければ、と私は思った。

その機会が訪れたのは、幾月か後のことだった。金を持ち逃げするのはうまくやった。たぶん、紫紺よりもずっと。追っ手がかからないように、女衒も下働きの連中も女達も皆殺しにしたのだ。難しくはなかった。皆が寝静まった頃を見計らって、一人ずつ殺せばよかった。

真っ先に女衒を殺し、次に殺したのは荒事のために雇われている男達だった。酒樽に毒を投げ込んでおいたおかげで、男達は半分死んだようになっていた。非力な私であっても、動かない男に止めを刺すくらい造作もない。

男達を片づけてしまえば、残りはあっという間だった。女は血の匂いに鈍感だ。寝ている真横で夥しい血が流れたからといって、それで目を覚ます女はいない。誰もが悲鳴ひとつ上げずに死んだ。

持てるだけの金を持って、夜明け前に私は町を出た。もちろん、追っ手は来なかった。が、追っ手よりも厄介なものが出た。野盗だ。連中はいともあっさりと

私を捕らえ、持っていた金を大喜びで奪い取った。命までは奪われずに済んだとはいえ、またしても「うまくやれなかった」ことが悔しかった。
売り飛ばされて娼婦に逆戻りする前に、どうにか連中の隙を見て逃げ出した。今度は金を持ち出す余裕などなかった。いや、下手に金など持ち歩かないほうがいいと考えた。持っていれば奪われる。必要な品は購うのではなく、盗めばいい。何も持たずにいれば、誰も私から奪えない。
ただひとつ、奪われるものがあるとすれば私自身だ。母親が私を売ったように、野盗の頭が私を売ろうとしたように、女である以上、常に略奪の対象となる。これればかりはどうしようもなかった。置いていくことも捨てることもできないのだから。
紫紺のように男を作って自分を守らせるという選択肢もなかったわけではない。が、他人は嘘をつく。他人は裏切る。だったら、守ってもらえなくてもいい。自分の身は自分で守る。
いや、たった一度だけ、一人だけ、共に暮らした男がいた。あの薄汚れた淫売宿の客と再会したのだ。遠い遠い、見知らぬ町で。男は私の顔を覚えていて、私も男の顔を覚えていた。早く殺さなければ、と思った。女街も女達も皆殺しにさ

れたはずなのに、私一人が生きているということの意味がわからないほど、頭の悪い男ではなかったからだ。

　なのに、なんとなく殺せなかった。見知らぬ町の片隅で、私はその男と暮らした。頭の悪い男ではなかったが、もちろん真っ当な人間でもなかった。男は錠前破りを得意とする泥棒だった。二人で荒稼ぎをしては面白可笑しく日々を過ごした。こんな暮らしも悪くないか、と私は男への殺意を捨てた。

　その暮らしも長くは続かなかった。病に罹ったのだ。ゆっくりと、しかし確実に身の内を蝕み、決して治ることはないという死病。しかも、人から人へと感染るという。

　死病を恐れた男は私を捨てた。気持ちはわからないでもないから、それだけなら私は男が去るに任せただろう。だが、それだけではなかった。男は私を役人に売ろうとした。あの淫売宿に押し入った「賊」には賞金が掛けられていたらしい。

　バカな男だ。私は病に罹っていることが判明したばかり、まだまだ症状は軽いものだった。寝起きがひどく悪かったり、夕刻になると寒気がしたり、思い出したように嫌な咳が出たり……。その程度だったから、人を殺すのに何ら支障はなかった。

寝入ったところを見計らって捕縛しようとした男を返り討ちにするのは容易かった。病のせいで眠りは浅く、何より私は殺気というものに過敏な質だった。考えるよりも早く、私は男の首を掻き切っていた。何が起きたのかわからない、という顔をして男は死んだ。

そのときになって、男に気を許していなかった自分に気づいた。寝食を共にする日々を重ねて、殺意を捨てたつもりでいたけれども、そうではなかった。いつでも手の届くところに刃物を隠していたのだから。

こうして、また私は一人になった。食べ物や衣服を手っ取り早く盗みながら、当てもなく旅を続けた。話に聞いたとおり、病の進行は遅く、旅も略奪も殺人も十分に可能だった。盗んだ品の持ち主はその場で殺した。女であろうと、年寄りであろうと。

「食べ物もお金も差し上げます。だから、殺さないで。助けて……」

何度もそんな言葉で命乞いをされた。不思議だ。殺されそうになったとき、誰もが同じ表情を浮かべる。私もこんな目で紫紺を見ていたのだろうか。いや、私は命乞いなんてしなかった。

「もしも助けたとしたら？　キミ達は間違いなく私を恨む。いつか私を殺そうと

する」

「そんなことない……」

「はずないじゃないか。目の前で母親を殺されてるんだ」

それも、私の母親のような女じゃない。きっといい母親だったのだろう。身を挺して娘達を守ろうとしたのだから。

「悪く思わないでね、なんて身勝手なことは言わない」

そして、私は身を寄せ合って震えている姉妹を殺した。命を奪う瞬間には恨まれ、憎まれたに違いないが、これで復讐の刃を向けてくる人間はいなくなった。

中には、命乞いをしなかった者もいた。私よりいくつか年下の少女だった。瞳に怒りを滾らせて、彼女は私に食ってかかった。

「どうして!? どうして、こんなことするの!?」

「腹が減ったから、かな」

「ふざけないで!」

「ふざけてなんかないよ。私は死にそうなくらい空腹で、なのに食い物を買う金がない」

「だったら、こんなことしなくても!」

彼女の目の前には父親と兄の死体が転がっていた。少し離れたところに料理人と思しき女の死体も。手の掛かる者から先に片づける。結果、最後に残るのはいつも子供か年寄りになる。
「お金だけ取って逃げればいいじゃない！」
「ああ。うん、そうだね。以前は自分を恨む人間を増やしたくないって思ってたけど、そういう問題でもないような気がしてきた。どうしてだろう？」
疑問を呈しつつも、私は少女の首を刎ねた。息絶えた後も彼女は目を見開いていた。その両眼に怒りの色を残したまま。
「どうして？　訊きたいのは私も同じだ」
少女の視線を背中に感じながら、私はテーブルからパンを取った。ひどく空腹だったのは嘘ではない。だから、この家に押し入った。裕福そうな家で、しかも食事時だったから、すぐに空腹を満たせるだろうと踏んだ。それだけの理由だ。でも。
「どうしてだろうな」
皿の料理を手づかみで食べ、水差しから直接水を飲んだ。この家の料理人は腕がいい。

「なぜ、私は殺すんだろう？　これだけ殺してきたのに、わからない」
床に転がった少女の首に話しかける。自分が殺してきた人数などいちいち覚えていない。数えるつもりもなかった。とにかく数え切れないほど殺した。それだけの命を奪ってきたのに、こんな単純な問いにさえ答えられない。
なぜ殺すのか？　なぜ？
「もしかしたら、それが知りたくて殺しているのかもしれないな」
その答えに全く納得した様子もなく、少女の両眼は私を睨んでいた。

その後も私は同じ暮らしを続けた。いつしか、理由や答えを探すこともなくなった。あたかも呼吸をするかのように奪い、殺した。
ただ、殺した人数がおそらく三桁を超えた頃から、私の存在は人々の知るところとなっていった。押し入った家の者は皆殺しにしていたから、何の痕跡も残っていないはずだったにも拘わらず。まあ、隠す気もなかったから、誰かに姿を見られていたのだろう。
子供や年寄りに至るまで容赦なく殺しているのが若い女で、それも一人きりだということがわかってしまうと、そこから先は早かった。たちまち私の人相書き

が出回った。旅の商人たちが噂を広め、どこの町でもどこの国でも人々は「薄紅色の目をした魔女」を捜した。捕らえれば遊んで暮らせるほどの賞金、情報だけでもそれなりの報奨が約束されていたからだ。

そして、私は捕らえられた。病で動けずにいるところを囲まれたのだ。その頃にはさすがに病状は重篤になっていて、逃げるどころか、抵抗することもできなかった。仰々しく武装した兵士達がバカみたいに大騒ぎして、私の手足に縄を掛けた。

どうせ病で死ぬほうが先だろうという読みは外れ、私は刑場に引き出された。殺した人数と同じ数の鞭打ちというのが私に下された刑罰だった。我ながらしぶといもので、背中の皮がずたずたになり、肉が裂けるまで鞭で打たれても死ななかった。

もっとも、「殺した人数」が正確なものだったら、私は死んでいただろう。実際の数よりもずいぶん少なく見積もられていたせいで、死に至る前に刑は終わった。

もちろん、それで許されるはずもなく、私は鎖で繋がれ、広場に放置された。五人の謀反人達と共に。私の隣に繋がれていたのが、例の少女だった。他の者達が呻き声すらたてられずにいる中、彼女だけは毅然とした口調で「私達は間違っ

ていない」と繰り返していた。
その声も次第に弱々しくなっていった。ここに引き出されたとき、彼女は誰よりも衰弱していた。気力だけで命を長らえているのは明らかだった。
相手が視力を失っているのをいいことに、私は無遠慮に傍らの少女を眺め回していたのだ。正義感が強くて、生真面目な、凡そ私とは正反対の少女。こんな場所で隣り合っているのが不思議に思えてならなかった。
やがて彼女は私に名を尋ねた。私がうっかり咳き込んでしまったせいだ。この病特有の嫌な音の咳だったから、彼女は隣にいるのが仲間ではないと気づいたのだろう。
「あなたは誰？　名前は？」
名前なんてない、と私は答えた。私には何もない。金もなければ家もない。家族も友人も恋人も。何ひとつ、ない。見事なまでに何ひとつ。残っているのはこの命だけだが、もうすぐそれも消えてなくなる。何もかも。差し引きゼロだ。くだらない。
そうだ、くだらない一生だった。生きてきた意味なんて何もない、空っぽの日々。振り返ってみればバカバカしくて、笑いが止まらない。

泣かないで、とまた声がした。

「笑っ……てる、んだ」

まともに息ができないせいで、しゃくり上げているようにしか聞こえないのだろう。今すぐにでも呼吸が止まっても不思議はないな、と思う。

「ほんとに？」

「ああ」

安堵（あんど）したような吐息が聞こえた。いつしか雨は小降りになっていた。次の瞬間、彼女の体が痙攣（けいれん）した。それはほんの束の間のことで、すぐに動かなくなった。

「おい……」

答えはなかった。

「私が最後の一人、か」

最後の一人だけは、残り五人の死体と共に生きたまま焼かれることになっていた。それを聞かされたとき、一人はその場で舌を噛み切った。広場に引き出された時点でもう一人死んだ。雨が降り出す前にまた一人が死に、土砂降り雨の中でさらに一人が死んで、私と少女の二人が残った。

この雨で火炙（ひあぶ）りは無理だろうから、私は五人の死体と共に生き埋めにでもされ

るのだろう。それが彼女でなかっただけ、良しとすべきなのかもしれない。最後の最後まで他人を気遣った少女が一番惨い死に方をするなんて、間違っている。
間違っている？　何が？　誰が？
私達は間違っていない、という少女の声が耳に蘇った。そう、彼女は間違ってなんかいなかった。間違っているとしたら、この世界のほう。人を人とも思わない領主がいて、平気な顔で人殺しができる私がいて、弱い者達のために立ち上がった人々が虫けらのように殺される、この世界。
こんなの、おかしいじゃないか。道理に合わないじゃないか！
唐突に怒りが湧いた。いや、唐突にではなく、私はずっと怒っていたのだ。自分では気づかなかったけれども、怒っていた。私はこの世界を憎んでいて、呪っていた。もう思い出せないほど遠い昔から。
叫びが喉を震わせたように感じた。ごぼり、と生温かいものが口からこぼれた。私が吐いたのは絶叫ではなく血だった。このクソッタレな世界に私は殺されようとしている。許せない。許すもんか。おまえが死ね！　おまえ達のほうが死んでしまえ！　死ね死ね死ね死ね死ね死ね……！
気がつくと、目の前に花があった。私と少女の骸の間に、薄紅色の花が咲いて

いる。

いつの間に？　こんなところに花なんて咲いていたっけ？

花が雨に打たれて揺れている。全く知らない花なのに、どこかで見たような気もする。自分の瞳とよく似た色だから、そんなふうに感じるのかもしれない。それとも、これは天国に咲くという花で、もしかして、私はもう死んでいたりするんだろうか？

違う。私が死んでも天国になんて行けるはずがない。死にかけているせいで、私は幻覚を見ているに違いなかった。

幻覚でもいい。もっと間近に見たい。この手で触れたい。花を贈られたことなんて一度もないし、花を欲しいと思ったこともないけれども、この花は好きだ。

視線ごと絡め取られる気がした。瞼（まぶた）を閉じることすらできず、私はただただ花を見つめる。なんて綺麗なんだろう……。ろくでもない人生だったけれども、こんな花を見ながら終わるのならば、悪くない。

視界いっぱいに咲く花へと、私は静かに微笑んだ。

DRAG-ON DRAGOON3
STORY SIDE

# 鏡よ、鏡



僕は此処(ここ)に居なければならなかった。
僕は此処に居てはならなかった。
僕は此処に居続けなければならなかった。
僕は此処に居続けてはならなかった。
ただ姉さんのためだけに。

僕は此処に居なければならなかった。
この塔の一室に。目に映るものといえば、石の壁と鉄の扉。窓はうんと高いところにひとつきり。小さな寝台と小さな椅子。部屋の端から端まで十三歩。
空の色さえ見えない塔の中。それが僕の世界だった。
此処を知っているのは、姉さんだけ。他は誰も知らない。この部屋には、姉さんしか来ない。だから、僕は姉さん以外の人間と言葉を交わしたことがなかった。
僕が会話したことがあるのは、姉さんとドラゴンのガブリエラ。ただ、ガブリ

エラは姉さんとばかり喋っていたけど。ガブリエラは口が悪くて、僕にはちょっと意地悪で。
それでも、僕はガブリエラが嫌いじゃなかった。だって、姉さんはガブリエラが大好きだったから。
時々、姉さんと僕はガブリエラの背に乗って、空を飛んだ。戦いの地に赴（おもむ）くために。あの頃、世界はまだ荒れ果てていて、姉さんはたくさん敵を倒さなきゃならなくて。僕はそれを手伝った。どれくらい姉さんの手助けができたかは、わからないけど。
それに、僕は強くならなきゃいけなかった。ちゃんとゼロを殺せるように。もしも姉さんがゼロに負けたら、僕が代わりにゼロを殺さなきゃならない。
「大丈夫。弟（キミ）ならできる」
姉さんは僕を安心させるつもりでそう言ったんだろうけど。でも、姉さんは肝心なことに気づいてなかった。
僕がゼロを殺すってことは、姉さんはゼロに殺されてるってことなんだよ？
そんなのいやだよ。姉さんが殺されるなんていやだ。
姉さんがいなくなったら、誰が此処に来てくれるの？　姉さんがいなくなった

ら、僕は誰と話せばいいの？　姉さんがいなくなったら、僕は……。
僕がずっと浮かない顔をしていたのは、戦うのがいやだったからじゃない。ドラゴンの牙から作った剣なんか使いたくない。「その日」がずっと来なければいいのに。
いつまでも、あの狭い部屋にいたい。姉さんが来てくれて、僕を優しく抱きしめてくれて。ずっと。
それが僕の願いだった。でも。

僕は此処に居てはならなかった。
とうとう「その日」が来てしまったから。僕を迎えに来た姉さんは、ひどく厳しい顔をしていた。だから、僕にはすぐにわかった。これから姉さんはゼロと殺し合うんだなって。
「大丈夫だよ。姉さんに言われたとおり、ちゃんとやれる」
僕がそう言ったら、姉さんはびっくりしてたよね。まだ何も言っていないのになぜって。でも、わかるよ、何も言われなくたって。それくらい。
僕は姉さんほどには頭が良くないから、難しい考えはわからないけど、姉さん

がどんな気持ちでいるのかはわかる。悲しんでいるのか、喜んでいるのか、怒っているのか。うれしいのか、寂しいのか。そばにいるだけで。だって、僕達は双子だもの。

そう、僕にはわかってた。もしも、姉さんがゼロを倒したとしても、僕は二度と姉さんには会えなかった。姉さんは自分も死ぬつもりだったんだよね？　だから自分の命を使って、聖堂の中に結界を張ったんだよね？

わかってたから、一度だけ、姉さんを引き留めた。駄々をこねた。行っちゃいやだって泣いた。

「心配するな。私は負けない」

姉さんは少しだけ困った顔をしてた。でも、僕は姉さんを困らせたかったわけじゃない。これが最後だって僕が知ってるってこと、わかってほしかったんだ。全部、わかってるから、安心して。姉さんが思ってるよりもっとたくさん、僕は姉さんのことを知ってるんだよ。

そして、姉さんはゼロに殺された。僕は言いつけどおりにゼロを殺した。この世界からウタウタイは一人もいなくなった。

でも、姉さんはその先を教えてくれなかったよね。何をすればいいのか。どこ

へ行けばいいのか。
僕は姉さんが死ぬってことと、ゼロを殺さなきゃならないってことで頭がいっぱいだったから、その先のことなんて考えてなかった。ちゃんと訊いておけばよかったって後悔したけど、もう遅い。姉さんは死んじゃってたから、もう答えはわからない。

途方に暮れた僕の目に飛び込んできたのが、聖堂のステンドグラス。割れてしまっていたけれど、きらきら光って綺麗だった。

そうだ、姉さんのために教会を作ろう。姉さんを讃（たた）える新しい教会を作ろう。あのときは、とても素敵な考えだと思ったんだけど。姉さんのために。姉さんのために。そう思って聖堂の外に出てみたけれど。

外の世界は広すぎて、姉さんのいない世界は寂しすぎて、たった一人は恐ろしすぎて。僕は逃げた。再び此処に逃げ込んだ。安全で、心地よくて、何もしなくていいこの部屋に。

僕は此処に居続けなければならなかった。

この部屋のことは誰も知らない。僕は「最後の切り札」で、僕の存在は誰にも

知られちゃいけなかったから。たぶん、姉さんは他の妹達にも秘密にしていた。

この部屋の扉は外からは見えない。姉さんがそういうふうに作った。誰かが不用意に開けたり、中に入って来たりしないように術を掛けた。だから、この場所に部屋があるなんて、誰も知らない。

この部屋には鍵がない。姉さんは僕を閉じこめるつもりなんてなかったから。ただ、僕は一人で外に出たことなんて一度もなかったし、出たいとも思わなかった。僕が外に出るのは、姉さんが迎えに来たときだけ。

姉さんはもう来ない。だから、此処に戻ってきて真っ先にやったのは、二度と扉を開けられないようにすることだった。姉さんの掛けた術をめちゃめちゃにした。もう二度と、外に出られないように。

外の世界で僕にできることなんて、何ひとつないから。姉さんの手伝いはできても、一人でできることなんてなかったんだ。ゼロを殺すこと以外は。

姉さんを待って、姉さんが退屈しのぎにと持ってきてくれた本を読んで。剣の稽古(けいこ)をして。それが、この部屋での僕の日々。

そんな僕がたった一人で外に出て、生きていけると思う？　姉さんは本当にそう思ってたの？

だから、僕は此処に戻ってきたんだ。此処なら何もしなくていい。こんな僕が居てもいい場所は、もう此処しかないんだ……。

でも。どんなに待っても、もう姉さんは来てくれない。二度と会えない。いやだ。会いたい。姉さんに会いたい。姉さんに会いたい。姉さんに会いたい。姉さんに会いたい。姉さんに会いたい……。

ああ、そうだ。本当に会えるわけじゃないけど、姉さんの姿を見るだけならできるよね。だって、僕は姉さんから造られた。同じ姿に同じ顔。僕が姉さんの服を着て、鏡を見れば。

ほら、こんなにそっくり。まるで姉さんがそこに立ってるみたいだ。

姉さん、会いたかった……。

「私も会いたかった」

こんなにそっくりなのに。目の前に姉さんがいるのに。手を伸ばせば届きそうなのに。

僕の指先に触れるのは、冷たい鏡。この境界線の向こうに姉さんがいるのに。どうして、僕はそこへ行けないんだろう？　どうして、僕は此処にいるんだろう？

どうして、僕は一人きりなんだろう？　どうして、姉さんは僕を置いていった

んだろう？
ううん、違うよね。姉さんは僕を置いていくつもりなんてなかったんだよね。本当は僕も連れていくつもりだったんだよね。
姉さんはゼロを殺さなきゃならなかった。ゼロを殺した後は姉さんも死ななきゃならなかった。ウタウタイは世界を滅ぼす〝花〟の苗床（なえどこ）だから。世界を滅ぼす〝花〟は駆除（くじょ）しなきゃならないから。
でも、〝花〟は逃げる。駆除されまいとする。だから、ゼロはしくじった。姉さんはゼロと同じ轍（てつ）を踏まないように、最後の一人が確実に死ねるように仕掛けをした。
その仕掛けが僕。この部屋で、姉さんは僕にゼロを殺す練習をさせた。壁に人の形に線を引いて、心臓の位置に×印をつけて、そこに剣を突き立てる練習。僕がしくじらないように。間違いなく、ゼロの心臓を一突きにできるように。
×印のところには、ちゃんと穴が開けてあって、人を刺したときと同じように剣が貫通するようになってた。すばやく、正確に、何度も。僕は姉さんに言われるままに剣を突き立てた。
でも、それってゼロだけを殺す練習じゃなかったんだよね？　姉さんを殺す練

習でもあったんだよね？
もしも、生き残ったのが姉さんで、〝花〟が姉さんを死なせてくれなかったとしたら。姉さんはあの壁の向こう側に立つつもりだったんだよね？　僕は言われるままに剣を突き立てて……いつもみたいに。練習のつもりで……でも、確実に姉さんを殺したんだろう。
姉さんをこの手で殺してしまったら、僕は生きていけない。迷わずその場で剣を自分に向けてた。姉さんから造られた僕は、姉さんほどには〝花〟の力が強くないから、たぶん、それで死ねる。僕が死んでしまえば、〝花〟の影響を受けた者はいなくなる。
そのうち、姉さんは計画を少しばかり変更して、僕がもっと容易く後を追える方法を考えてくれた。剣を使うまでもなく死ねるように。
そう、姉さんは僕を一人にするつもりなんかなかった。必ず僕が姉さんの後を追うって信じてた。ゼロを殺した後、どうすればいいのか、教えてくれなかったんじゃなくて、教える必要なんてないと思ってた。
裏切ったのは、僕。間違えたのは、僕。
ゼロを殺した後、僕がしなきゃならなかったのは、その場で姉さんの後を追う

こと。だって、あのとき、僕はウタウタイを殺せる武器を手にしていたんだから。僕はホンモノのウタウタイじゃないけど、普通の剣を普通に使っただけじゃ死ねない。

うん、試してみたんだよ。此処へ戻ってきて、真っ先に。普通の剣を使って。だって、ゼロを殺したあの剣は、聖堂に置いてきてしまったから。

バカだよね。扉の術をめちゃめちゃにして、二度と開けられないようにしたのは僕自身。だから、剣を取りに行くこともできない。此処に僕を殺せる武器はない。僕はずっと此処に居なきゃならない。何もできないまま。安全で、居心地がよくて、何もしなくていい、この部屋に。

僕が間違えたせい。何もかも僕のせい。

姉さん、僕を叱ってよ。悪い子の僕を叱って。僕は悪い子なんだよ。そこから出てきて叱ってよ。

どうして何も言ってくれないの？　すぐそこにいるのに。なんで叱ってくれないの？

鏡の中の姉さんは、ちっとも叱ってくれなくて。ただ、泣き出しそうな顔でじっと僕を見てる。

この顔、知ってる。覚えてる。僕と抱き合っているとき、姉さんはいつもこんな顔をしてた。

それが不思議でたまらなかったんだ。どうして、そんな顔をするの？　僕は気持ちいいのに、姉さんは気持ちよくないの？　どうして？　同じことをしているのに、どうして、姉さんは泣き出しそうな顔しているの？

間違ったことだからって、姉さんは言った。姉と弟はこんなことをしちゃいけない。こんなの間違ってる。わかってるけど止められないって。ひどくつらそうに、切なそうに。

僕にはよくわからなかった。姉と弟がこんなことをしちゃいけないなら、他の人となら、いいってこと？　僕にはそっちのほうが、よほど悪いことに思えるけど？

そしたら、姉さんはもっと困った顔をした後、びっくりするくらい優しい顔をして、こう言ったんだ……。

「そうだな。弟（キミ）はそれでいい」

ああ、そっくりだ。あのときの姉さんに。

「そうか？」

うん。少しだけ眉根を寄せる癖。姉さん、気づいてた？

「いや。知らなかった」

だよね。僕、わざと姉さんには教えなかったんだ。

「なぜ？」

そう、そうだよ。そんなふうに首を傾げて。何かを尋ねるとき、姉さんはそんな顔をする。その顔が好きだったから、僕だけのものにしておきたかったんだ。ねえ、僕は姉さん以上に姉さんのことをよく知ってるんだよ。

自分がどんな顔をして笑うかなんて、自分じゃ見えないけど、僕には見えたから。姉さんの表情のひとつひとつも、自分じゃ気づいてない小さな癖も。

顔だけじゃない。身体の隅々まで全部知ってる。どこをどうすれば、姉さんがどんな顔をするか。どんな声で、どんな息づかいで……。

「いや……だ……」

少し慌てた様子で視線を泳がせて、僕が駄々をこねるときみたいに首を横に振って。可愛かったな、あのときの姉さんは。ふふっ。僕以外、誰も知らないよね？　僕だけが知ってる、僕だけの姉さん。そう、その顔だよ……。

なんだ、僕はいつだって姉さんに会えるじゃないか。僕達は双子なんだから。

簡単なことだったんだ。

「私はどこにも行かない」

うん。約束したよね。いつだったか、僕が怖い夢を見て泣いたとき。本当は、僕が眠っている間に此処を出て行くつもりだったんだろうけど。姉さんは身支度を終えていたから。でも、あの夜はずっとそばにいてくれた。朝まで僕の手を握っててくれた。

「弟のそばにいる」

本当に？　もうどこにも行かない？　一緒にいてくれる？

「ああ。ずっと一緒だ」

そうだよね。此処に僕を殺せる武器はない。僕は死なない。だから、姉さんも死なない。

そうか。僕が死ななかったのは、間違いじゃなかったんだ。僕が生きてれば、姉さんも生きていられるもの。僕は姉さんが死ぬのが何よりもいやだった。姉さんさえ生きていてくれれば、他の誰が死んだっていい。世界中の人達がみんな死んでしまっても構わない。

僕、間違ってないよね？　僕、悪い子じゃないよね？

「うん。弟(キミ)はいい子だ」
姉さん、聞いてよ。僕ね、姉さんのために新しい教会を作ろうと思ったんだよ。姉さんと、それから……忘れちゃいけないな、ガブリエラのことも。姉さんはガブリエラが大好きだったものね。
「ガブリエルも。ガブリエラがガブリエルになった後も、私はずっと彼女が好きだった」
そうだね。それを作りたかったんだ。姉さんと天使のガブリエルを讃える教会。
「詳しく聞かせてくれ」
うん。あのね、ゼロのせいで、教会都市はめちゃくちゃになっちゃったでしょう？　だから、きちんと作り直そうよ。何もかもイチから始めようよ。まず、新しい教会を作って、ヒトをいっぱい集めて。
そうだ、姉さんと僕のものだっていうシルシ、思いついた。こんなのどうかな？
でしょう？　姉さんと僕がぴったり頬をくっつけてるところ。二人でひとつになってるところ。まるで、鏡を真ん中に置いたみたいに。
「いいかもしれないな」
「三ツ目みたいだな、こうやって見ると」

ほんとだね。ほんとはね、もっと、もっと、もっと、ひとつになりたい。姉さんと僕の境目がなくなって、全部溶けてなくなって、二度と離れなくてもいいように。もう二人に戻れないくらい、ひとつに……。

ああ、でも。

僕は此処に居続けてはならなかった。

誰も知らないはずの部屋が見つかってしまったから。姉さんの術は解けていた。開かなくても、扉があるのは誰にでもわかった。壊れて開かない扉があれば、誰だって興味を覚える。叩き壊してでも、中に入りたくなる。壁に穴をあけてでも、中を覗(のぞ)きたくなる。

「ワン様！　こんなところにいらっしゃったなんて……！」

崩れた壁の向こう側にいたのは、見知らぬ人々。教会の関係者なんだろう。この塔に出入りできるってことは。

「よくぞご無事で……」

誰もが声を上げて泣いていた。だから、僕は……私はこう答えた。

「心配をかけてすまなかった。もう大丈夫だ。傷も癒(い)えた」

姉さんはずっと僕と一緒にいるから。弟と私は、ひとつだから。
「行こうか」
そして、僕と姉さんは、弟と私は、此処を出ていく。外の世界へと。
「新しい教会を作ろうと思う」
「ワン様、新しい教会とはどのような？」
そう、僕達は、私達は、新しい教会の宗主になる。
「天使の教会」
いい名前だろう？　きっと大勢の信者達が集まってくる。ウタヒメを讃えるために作った教会。ウタヒメが呼んだ天使を讃えるために……。
ただ姉さんのためだけに。



**映島 巡** Eishima Jun

1964年8月26日生まれ。福岡県出身。主な著書は『鋼の錬金術師3 神を継ぐ少女』『小説ドラッグ オン ドラグーン2 封印の紅、背徳の黒』『FINAL FANTASY XIII Episode Zero -Promise』（スクウェア・エニックス）など。また永嶋恵美名義の著書に『ベストフレンズ』（光文社文庫）、『明日の話はしない』（幻冬舎文庫）等がある。

---

GAME NOVELS
**ドラッグ オン ドラグーン3**
**ストーリーサイド**

2014年8月28日　初版第1刷発行

原　作　「ドラッグ オン ドラグーン3」
©2013 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.
Character Design : Kimihiko Fujisaka.

著　者　映島 巡
監　修　ヨコオタロウ
イラスト　藤坂公彦
協　力　「ドラッグ オン ドラグーン3」開発・マーケティングチーム

発行人　松浦克義

発行所　株式会社スクウェア・エニックス
〒160-8430
東京都新宿区新宿 6-27-30
新宿イーストサイドスクエア

＜書籍内容についてのお問い合わせ＞
書籍編集部　03-5292-8306
月～金曜日13:00～18:00（祝祭日及び弊社指定休日を除く）
＜販売・営業についてのお問い合わせ＞
出版営業部　03-5292-8326
月～金曜日10:00～17:00（祝祭日及び弊社指定休日を除く）

印刷所　加藤製版印刷株式会社



ISBN978-4-7575-4407-9 C0293

〝契約〟〝天使の教会〟〝封印〟は何時何処で生まれたのか？

四人の使徒は何処から来て、五人の妹達は何処へ向かうのか？

裏切りのウタウタイ・ゼロと竜（ミハイル）がたどる新たな分岐とは？

9784757544079
1920293009339
ISBN978-4-7575-4407-9
C0293 ¥933E
定価：本体933円＋税
SQUARE ENIX.

〝契約〟〝天使の教会〟〝封印〟は何時何処で生まれたのか？

四人の使徒は何処から来て、五人の妹達は何処へ向かうのか？

裏切りのウタウタイ・ゼロと竜（ミハイル）がたどる新たな分岐とは？